鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　29

平成24年度発掘調査報告

（第２分冊）

玉　縄　城　跡

笹　目　遺　跡

今 小 路 西 遺 跡

円覚寺旧境内遺跡

玉　縄　城　跡

天　神　山　城

新 善 光 寺 跡

米　町　遺　跡

平成25年３月

鎌倉市教育委員会

天神山城　全景

米町遺跡出土の瀬戸水滴

ご　あ　い　さ　つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成16～21年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として14ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成25年3月29日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成２４年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。

2　本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第１分冊に掲載した表のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第２分冊）

例言・・Ⅱ
目次・・Ⅲ

７　玉縄城跡（No.63）植木字植谷戸１９８番地点
第一章　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第三章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第四章　まとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

８　笹目遺跡（No.207）笹目町３１６番１０地点
第一章　本調査地点の位置と歴史的環境（図1・2、表1）・・・・・・・・・・・・・・・63
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第三章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

９　今小路西遺跡（No.201）御成町１７６番７地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・180

１０　円覚寺旧境内遺跡（No.434）山ノ内字瑞鹿山３９８番地点
第一章　本調査地点の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・212
第三章　発見された遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
第四章　発見された遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・240
第五章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・266

１１　玉縄城跡（No.63）植木字植谷戸４８番６地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・288
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・291
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・293
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295

12　天神山城（No.384）山崎字宮廻６５６番１９地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・302
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・304
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・308
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・314

13　新善光寺跡（No.284）材木座四丁目５７９番８地点
第一章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・331
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・337
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・342
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・353

14　米町遺跡（No.245）大町二丁目９９３番１外地点
第一章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・375
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・381
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・384
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・393

平成24年度の緊急発掘調査地点（1～8）
本書掲載の平成16～20年度発掘調査地点（①～⑭）
※遺跡名は一覧表を参照

鎌倉市全図

1：50,000

玉縄城跡（No.63）

植木字植谷戸 198 番地点

例　言

1．本報は「玉縄城跡」内、植木字植谷戸198番における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　2006年2月2日～同年4月6日

　調査面積　98㎡

3．本調査地点の略称はTUU198とした。

4．調査体制

　担　当　者　馬淵和雄

　調　査　員　松葉崇・松原康子・沖元道（資料整理）・根本志保（資料整理）

　調査補助員　鈴木弘太・岩崎卓治（資料整理）

　作　業　員　浅香文保・佐野吉男・田口康雄・渡辺輝彦（社団法人鎌倉シルバー人材センター）

5．本報作成分担

　遺構図整理　沖元

　遺物実測　　根本・松原・岩崎

　同墨入れ　　根本・松原・岩崎

　同観察表　　松原

　同写真撮影　沖元

　原稿執筆　　馬淵・沖元

　編集　　沖元

　総括　　馬淵

6．現地調査及び資料整理に際して以下の方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。

　汐見一夫・下高大輔・中野晴久・藤澤良祐

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の概観 …… 5

1．玉縄地域の地勢と調査地点の位置
2．歴史的環境

第二章　調査の概要 …… 15

1．調査にいたる経緯
2．調査方法
3．調査の経過

第三章　調査結果 …… 17

第1節　概要
1．層序
第2節　各説
1．Ⅰ面～Ⅱ面上層
2．Ⅱ面下層
3．Ⅲ面
4．Ⅳ面

第四章　まとめと考察 …… 41

1．遺構の変遷と年代
2．まとめ

挿　図　目　次

図1　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 …… 8
図2　明治15年頃の玉縄城周辺 ……10
図3　玉縄城縄張図 ……13
図4　玉縄城中心域の地形「1954年」……14
図5　調査区設定図 ……16
図6　調査区・深掘り土層断面図 ……18
図7　Ⅰ面～Ⅱ面上層遺構全図 ……20
図8　Ⅰ面～Ⅱ面上層出土遺物 ……21
図9　柱穴列1～4、同出土遺物 ……22
図10 柱穴列5～9 ……23
図11 土坑1～5、Ⅱ面上層小穴出土遺物 ……24
図12 Ⅱ面下層遺構全図 ……25
図13 Ⅱ面下層包含層・Ⅱ面下層出土遺物、土坑7・8
同出土遺物、Ⅱ面下層小穴出土遺物 ……26
図14 Ⅲ面遺構全図 ……27
図15 Ⅲ面包含層出土遺物 ……28
図16 建物1・L字柱穴列、Ⅲ面小穴出土遺物 29
図17 Ⅳ面遺構全図 ……30
図18 Ⅳ面包含層出土遺物 ……31
図19 溝2、同出土遺物 ……32
図20 溝2出土遺物（2）……33
図21 溝1・4・5、同出土遺物 ……34
図22 遺構外出土遺物 ……35
図23 遺構変遷図 ……42
図24 調査地点及び周辺の遺構検出状況 ……43

表　目　次

表１　出土遺物観察表（１）……36
表２　出土遺物観察表（２）……37
表３　出土遺物観察表（３）……38
表４　出土遺物計量表 ……39
表５　出土遺物産地別構成比 ……40
表６　鞴羽口面毎出土比 ……40
表７　鉄滓面毎出土比 ……40

図　版　目　次

図版１……44
１－１　昭和30年頃の玉縄城
１－２　調査地点遠景（矢印の下、南から）
１－３　本支谷に入る道（調査地点は右手奥）
図版２……45
２－１　１区Ⅱ面上層全景（東から）
２－２　１区Ⅱ面上層全景（南から）
２－３　１区Ⅱ面上層全景（西から）
図版３……46
３－１　１区Ⅱ面上層西南隅　盛り上り部分（北東から）
３－２　２区Ⅱ面上層全景（東から）
３－３　２区Ⅱ面上層全景（南から）
図版４……47
４－１　１区Ⅱ面下層全景（東から）
４－２　１区Ⅱ面下層全景（南から）
４－３　２区Ⅱ面下層全景（北から）
図版５……48
５－１　１区Ⅱ面上層調査区東切石列（東から）
５－２　１区Ⅱ面上層調査区東切石列（南から）
５－３　１区Ⅱ面上層土坑５（北から）
５－４　１区Ⅱ面下層中央深掘り土層断面(南から)
図版６……49
６－１　１区Ⅲ面全景（東から）
６－２　１区Ⅲ面全景（南から）
６－３　１区Ⅲ面P.103土層断面（南から）
図版７……50
７－１　２区Ⅲ面下白磁皿（図15－12）出土状況（北から）
７－２　２区Ⅳ面溝２覆土内耳鍋（図19－14）出土状況（北から）
７－３　２区Ⅱ面下土師器皿（図15－４）出土状況（北から）
７－４　１区Ⅳ面全景（南から）
７－５　２区Ⅳ面全景（西から）
図版８……51
８－１　１区Ⅳ面溝２（西から）
８－２　Ⅳ面溝２全景（東から）
８－３　溝２中央部土層断面（西から）
８－４　２区溝２内土師器皿出土状況（東から）
図版９……52
９－１　２区Ⅳ面溝４（南から）
９－２　溝４内角材（北から）
９－３　溝４南壁土層断面（北から）
９－４　１区Ⅳ面溝５（北から）
９－５　１区溝５南壁際土層断面（北から）
図版10 ……53
10－１　１区Ⅳ面溝５内遺物出土状況(北東から)
10－２　１区調査区東壁土層断面（西から）
10－３　２区調査区南壁中央部土層断面(北から)
図版11 ……54
出土遺物１
図版12 ……55
出土遺物２
図版13 ……56
出土遺物３
図版14 ……57
出土遺物４

第一章　遺跡の概観

１．玉縄地域の地勢と調査地点の位置

玉縄地域は三浦半島の基部にあって、鎌倉市の北西部に位置し、北と西を藤沢市に、東を横浜市に接する。「玉縄」という地名は、鎌倉市玉縄・関谷・植木・城廻・岡本を中心として、藤沢市村岡東・高谷・渡内をも含んだ、一帯の総称である。大船・山崎辺から北方を見たとき、鉄道の向こうに視界いっぱいに広がる山塊がそれで、ほぼ全域が中世山城である玉縄城とその支城群からなる。

この山塊は横浜市西南部から延びてきた第3紀層からなり、藤沢市側の古地名を取って「村岡丘陵」と呼ばれる。横浜市から江ノ島に向かって南西に流下する柏尾川の右岸にあって、標高は30～80ｍほど、大小の谷戸が入り組んだ複雑な地形を呈する。相模野台地の南端に位置し、柏尾川によって南の片瀬丘陵と寸断されている。

柏尾川は村岡丘陵と片瀬丘陵の間の低地を北東からいくらか蛇行しつつ西流し、村岡丘陵を過ぎた藤沢市川名の辺で北から来た境川に合流する。そして、片瀬丘陵を左岸に見ながら、江ノ島付け根の相模湾に流れ込む。村岡丘陵は柏尾川と境川とに挟まれ、両河川に側面を削り落された形になっている。丘陵先端部分は現在では柏尾川から600ｍほど離れているが、これは近代の大がかりな造成によって南半部が失われたものであり、明治十五年（1882）測量の『迅速測図』の時点では、尾根はほとんど川岸まで到達していることがわかる。丘陵部以外の平坦地は柏尾川と境川の形成する沖積地となる（藤沢市教育文化センター 2000）。

村岡丘陵は三浦半島の基部を扼する位置にあって、平安時代後期以来有力武士の拠点であり、またしばしば重大な抗争の舞台ともなった。丘陵中央部のとりわけ険阻な地を占めたのが玉縄城である。城域中心部は現在の行政区分では鎌倉市城廻および同植木に含まれる。現在の清泉女学院構内がかつての本丸で、標高は60ｍ前後ある。最高点は同学院東側にある「諏訪壇」と呼ばれる丘陵で、本丸を環状に囲む山稜の一部をなし、約80ｍの標高がある。玉縄城中心部の丘陵側面は急峻な崖となっていて、周囲の標高10ｍ弱～30ｍ前後の平地から隔絶されている。城から相模湾までは約5kmの距離を隔てる。

今回の調査地点は城域東南の谷戸内にあり、本丸南面の大手にある「御厩曲輪」と呼ばれる平場から東南に延びる「太鼓櫓」の南東側山裾に位置する。大手から東に降りる「七曲」坂から下った谷の、一つ南側の谷戸の中にある。地番は鎌倉市植木字植谷戸198番。本地点から谷尻まで約100ｍ強、地主のＳ氏家は江戸時代から代々この地に住み、先祖が近世玉縄藩の御典医だったという。

２．歴史的環境

旧石器時代

玉縄の近在では、これまで藤沢市内の伊勢山（白旗付近）と渡内一丁目の二箇所からナウマン象の化石が出土している。いずれも下末吉ローム層相当の13万年前の地層からで、後者は玉縄城の南西約1.3kmにある（以下「玉縄城から」といった場合は清泉女学院校地を起点とする）。1975年と1980年に同一個体とみられる象の化石が発見され、採集地の地名から「天岳院標本」と称される。この地点からはほかにも様々な動植物の化石が出土したが、人的営為は確認できていない。藤沢市内の旧石器時代の遺跡はこれまでに相模野台地上に50例以上を数え、玉縄から1.8kmほど西にある藤が岡二丁目の御幣山（おんべやま）遺跡では、2006年の発掘調査で、立川ローム層中のＢ１層からナイフ形石器・掻器・二次加工痕ある剥片などを含む石器ブロックや、礫の集中が発見された（長澤・横山ほか2007）。玉縄地域でも北西1.3kmの

関谷東勝院遺跡から、表面採集ながら有舌尖頭器が発見されている。また、玉縄城から2km余り東の粟船山で、両横に調整痕のある頁岩製縦剥ぎの剥片が採集されており、いずれ資料の増加が期待できる。

縄文時代

南関東は縄文時代草創期の遺跡が多いことで知られ、2008年の時点で埼玉・千葉・東京・神奈川4県で全国の40％近い約50箇所を数える。なかでも藤沢市は11遺跡（20地点）という、全国的にみても高い集中度を示す（藤沢市教育委員会2009）。国内的にもきわめて稀なこの時期の住居跡も、遠藤の慶応大学湘南藤沢キャンパス内遺跡で発見されている。相模野台地上の広い範囲に遺跡が存在するが、玉縄の近くにもいくつかあり、半径2km以内に御幣山遺跡・渡内遺跡・柄沢遺跡群の3地点が確認されている。このうち西に1kmほど離れた、村岡丘陵基部に位置する柄沢遺跡E地点からは、口縁部と体部上位に横位の多条平行隆起線文帯を置きその間に大ぶりの山形文を配するものや、数条の平行隆起線によって縦・斜め・曲線を描いたものなど、関東地方には稀な土器が出土している。

縄文時代早期になると藤沢・鎌倉両市で遺跡が急増する。藤沢市では市域北半部を占める相模野台地全体に確認できる（59遺跡70地点）。早期中葉三戸式の斜格子状沈線文土器や、早期後半とされる子母口式の絡条体圧痕文が出土している。また東海系入海式の刻目文土器などもあり、他地域との交流をうかがわせる。玉縄地域でも北西1.3kmの鎌倉市関谷東勝院遺跡から大浦山式土器が出土しており、同じく関谷の山居遺跡からも早期の土器が見つかっている。また調査地点から400m弱北の玉縄城東側斜面（城廻字打越165地点）で、縄文早期の可能性のあるガラス質黒色安山岩製礫器が発見されているほか、繊維の含まれた土器も出土している（馬淵1986）。

縄文時代前期は海進期で、村岡丘陵は古大船湾の入口にあたる。この一帯では海面が現在の水面より10mほど高かったとされるので、丘陵のすぐ脇まで汀線が迫っていたことになる。この時期になると藤沢市内で遺跡は50箇所を数え、台地のみならず当時の海岸線に近い砂丘低地にも遺跡が発見されるようになる。玉縄地域では城の西南約1.5mにある藤沢市村岡東二丁目の十二天遺跡において顕著な人的活動の痕跡がみられ、遺構こそ検出されていないものの前期初頭の花積下層式、静岡県富士川町木島遺跡を標式遺跡とする前期初頭の木島式土器、胎土に植物繊維を含み羽状縄文をもつ前期中葉の黒浜式、前期後半では特徴的な半裁竹管文の諸磯式などのほか、「ソーメン状」と称される浮線文をもつ十三菩提式や、集合条線文をもつ踊場式土器などが出土している。玉縄地域でも本地点北400mの前出城廻字打越165地点をはじめ、関谷東勝院遺跡や山居遺跡で竹管文系土器が少なからず出土しているので、調査地点を含む玉縄地域に活発な人的活動があったことは間違いない。

縄文中期の遺跡は、藤沢市側では砂丘低地も含めた市内全域におよび、99箇所を数える。分布はきわめて濃密で、砂丘低地も生活の舞台となっている。玉縄地域でも前出の十二天遺跡では中期初頭の五領ヶ台式土器が出土しているが、小片にとどまる。城から西に1.3kmの柄沢ナデッ原遺跡では、23軒の竪穴住居と10棟の掘立柱遺構で構成される環状集落が発見された。集落の外径は約130m、中央部は遺構が空白で、広場となっていたことが推測される。土器年代は勝坂期の古段階に属する。また柏尾川対岸にある向川名（むかいかわな）貝塚は直径3m、層厚数10cmほどの小規模な貝塚で、中期後半に位置づけられる。

縄文時代後期では、藤沢市側で70箇所の遺跡が確認されている。村岡丘陵はこの時期の遺跡の多いことが知られ、関谷東勝院遺跡で堀之内Ⅰ・Ⅱ式や加曽利BⅠ・Ⅱ式の柄鏡形、あるいは円形の住居や環礫配石遺構・貯蔵穴等が検出された。玉縄地域では本調査地点から北に1.3kmの位置にある関谷島ノ神遺跡で、後期初頭の比較的短い期間に営まれた柄鏡形住居5軒が報告されている。村岡東の高谷遺跡や、柏尾川を挟んだ向川名遺跡（川名仲丸遺跡）などでも検出例がある。

晩期の遺跡は激減し、近隣では藤沢市で5箇所を数えるにとどまる。いずれも土器のみの発見であり、遺構はこれまで確認されていない。うち4箇所が、玉縄からそう遠くない村岡丘陵上や柏尾川沿いにある。玉縄近辺では、本地点南東700ｍの二伝寺砦遺跡から晩期に特徴的な、いわゆる「飛行機鏃」が出土している。柏尾川沿いの向川名遺跡と大源太遺跡からは土器も出た。片瀬丘陵下の柏尾川右岸に立地する大源太遺跡からは、県内でも縄文時代最末期と目される浮線文土器が出土した。

弥生時代

相模地方の弥生時代は、中期中葉の中里式の時代に水田稲作中心の集落が形成され始めるが、本格的に集落が展開するのは中期後半の宮ノ台式期である。鎌倉・藤沢市域でも同様で、中期中葉の遺跡はこれまで江ノ島植物園内遺跡にしか確認されておらず、本格的な農耕社会の開始はやはり宮ノ台期以降とみなければならない。宮ノ台式期の土器は玉縄地域では十二天遺跡で採集されており、資料のうちには宮ノ台でも古式に属するものがある。また玉縄城から南西に800ｍの二伝寺砦遺跡からも住居址が確認されている。

後期に入ると、前半においては、相模地方の土器様相に西の東海地方からと東の東京湾側からというおおむね二つの系譜が認められる。藤沢市においてもやはり市域西部には前者の、東部には後者の傾向が認められる。玉縄地域の十二天遺跡一帯は市域東南域にあり、後者の久ケ原式土器を主体とする。近在では御幣山遺跡や二伝寺砦遺跡がある。しかし、後期も後半になると次第に東京湾側の特徴は薄まり、全体として一つの様相にまとまっていく傾向にある（藤沢市教育委員会2011立花実執筆分）。

古墳時代

弥生時代末期から古墳時代の初めにかけて、おそらく生活基盤の多様化に伴い、集落は砂丘低地や段丘の下段面に降りてくるようになる。また内陸部の相模野台地上平野部にも進出する。藤沢市片瀬の大源太遺跡からは同市内唯一の鏡である「変形四獣鏡」が出土している。玉縄地域ではまだ明確な集落は確認されていないものの、本地点から直線距離で西にわずか150ｍほどの陣屋坂東側の調査で、台付甕や高坏が多数出土しており、報告者は近在に住居の存在を予想している（大河内1994）。

古墳時代後期、柏尾川と境側の合流地点付近の砂丘地帯で、円形（環状）の溝や埴輪片など古墳の痕跡がいくつか発掘調査で見つかっており、この付近に後期の高塚古墳が存在したことは間違いない（寺田ほか2008）。

大磯から三浦半島にかけての丘陵部には横穴墓が多い。とりわけ片瀬川左岸の川名から竜口寺にかけての片瀬丘陵の斜面は濃密な分布を示し、かつては200基以上存在したといわれる。神奈川県内の横穴墓はおおむね6世紀後半に始まるが、鎌倉・藤沢一帯で最も古いとされる川名新林横穴群なども、この時期に属する。玉縄地域では関谷下坪にある洗馬ケ谷横穴群が知られる。玉縄城の北側外郭山上にあり、2号穴奥壁には戦闘場面を描いた線刻画がある（鎌倉市指定史跡）。また十二天遺跡に数基の横穴墓が存在する。

律令時代

律令時代初期の相模国は八郡で構成され、鎌倉市と逗子市の全体、藤沢市東半の一部および横浜市戸塚区南部はおおむね鎌倉郡に、藤沢市は大半が高倉郡に属していた。高倉郡は和銅年間（708 ～ 715）に「高座（たかくら）」郡に名称が変わったとみられる（荒井ほか1991荒井執筆分）。玉縄地域は鎌倉・高倉両郡の境界に位置し、いずれに属していたかは明確でないが、承平五年（935）成立の『和名類聚鈔』に出てくる「岡本郷」の地名は現在の鎌倉市岡本一帯とみられ、位置からいって調査地点もこの郷に属していた可能性がある（服部ほか1972服部執筆分）。

この時期の遺跡は鎌倉・藤沢両市内に数多い。砂丘低地にも濃密に分布する。本地点近在の遺跡とし

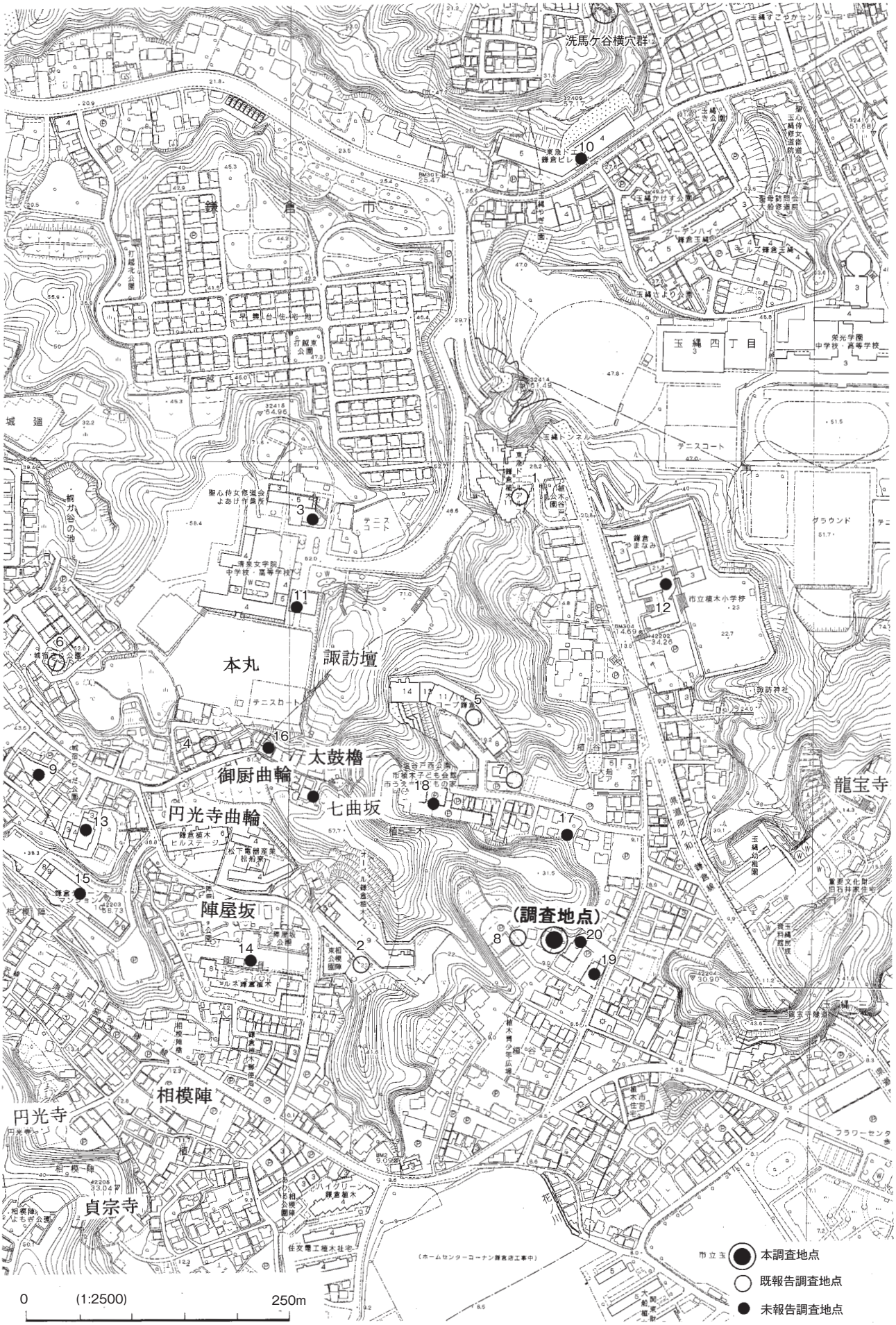


図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡

(№63玉縄城跡)

本調査地点　植木字植谷戸198番　1. 城廻字打越165番地点（馬淵1980・1981）「相模玉縄城―城廻字打越165番地点の発掘調査」『鎌倉考古学研究所研究調査報告第三集』(馬淵1986)　2. 植木相模陣374番他地点（大河内1987～1988)『玉縄城跡発掘調査報告書』(大河内1994)　3. 城廻字打越200番（田代・汐見2001）未報告　4. 城廻字打越329番1外（田代・宗臺1998～1999)『東国歴史考古学研究所紀要第1集』(大畑1999) 5. 植木字植谷戸6番1外（田代1999)『東国歴史考古学研究所報第3集』(大畑1999) 6. 城廻字城宿357番2・15(宮田1999)『玉縄城跡発掘調査報告書』（森2000）7. 植木字植谷戸70番1外（原2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20第1分冊』（原他2004）8. 植木字植谷戸198番の一部（継2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　第1分冊』(継・伊丹2004)　9. 植木字城宿467番（馬淵1980）『鎌倉考古』2・4（馬淵　1980）　10. 玉縄五丁目3番27（馬淵1981）『鎌倉考古』9（馬淵　1981）　11. 城廻字打越200番1(齋木1978)　未報告　12. 植木字植谷戸1番（永井1982～1983）未報告　13. 城廻字城宿340番1地点（藤井秀男1987）未報告　14. 植木字相模陣370番地点（齋木1989～1990）未報告　15. 植木字相模陣436番1（玉林1978）未報告　16. 植木字植谷戸48番6（宮田・滝沢2007）未報告　17. 植木字植谷戸192番4外・207番1（福田2008）未報告　18. 植木字植谷戸213番外（継 2000）未報告　19. 植木字植谷戸78番2外5筆（継・汐見　2001）未報告　20. 植木179番1他4筆（浜野2000）未報告　21. 洗馬ケ谷横穴群（赤星1959）

ては、前出の二伝寺砦遺跡があり、これまでの数次の調査で平安時代前期の竪穴住居が何軒か見つかっている。

平安時代後期

10世紀になると律令体制の矛盾が露わとなり、各地で大きな争いが起きる。あらたに登場してきた「兵（つわもの）」が争乱の平定で名を上げ、国衙の軍制改革の中で押領使（国衙軍事部門の統括者）などとなって次第に地歩を固めていく。この傾向は平安京から遠い坂東の地でより顕著であり、桓武平氏の祖として知られる高望王はその代表的な一人であった。彼は関東八平氏の一つ、村岡氏の祖ともされる。そして村岡丘陵は、桓武平氏村岡流の本拠となる。それは同時に南関東の大豪族発祥の地となったことも意味する。

高望王は桓武から四代目、寛平年間に朝敵を平定して平姓をもらい上総介となったと伝える。その後裔は坂東に土着して国衙官人になったという。本調査地点からほんの1.2㎞南西に、高望王の後裔の居館址と伝えられる場所もある（「村岡城址」)。村岡氏は三浦氏・千葉氏・鎌倉氏（大庭氏）の祖ともいい、平安後期の坂東武士団にあってきわめて有力な幹流のひとつである。しかし、誰の代から村岡を名乗ったかは諸系図に違いがみられ、また村岡氏を出自とする上記の一族についてもどの代に始まるかはそれぞれ異なる。以下簡単に見ておきたい。

『桓武平氏系図』(群書類従本）では、

高望王―平良文（村岡五郎）―忠頼（陸奥守、号村岡五郎、千葉氏祖）―忠通（村岡五郎）―景通―景政（鎌倉権五郎）

とあり、良文以下三代はいずれも村岡五郎を称している。村岡氏の出とされる三浦氏は景政の弟景名の一門といわれるが、この系図では景通の甥為直が三浦平太夫を称し、その子為経が三浦平六郎を名乗ったところから発する。ここには景政と大庭氏との関係は見えず、景政三代の孫と伝える長江太郎義景も現れない。

『尊卑文脈』には、

高望王（上総介）―良茂（常陸大掾）―良正（下野介）―致成（滝口太郎)・景成（鎌倉権守）―景正（鎌倉権五郎）―景経―景忠（大庭太郎）―景義（大庭権守)・景親（大庭三郎）

とあり、『千葉大系図』では、

高望王―良文―忠通（領於相摸国鎌倉郡郷）―景通―景将（景正）

となっている。また『三浦系図』では、

高望王―良文―忠通―為通―景成（鎌倉権守）

となる。これらによれば、高望王以下三～四代は総・常・武・野の北関東から武蔵北部にかけてもっぱら勢力を張っており、この一族が相模国に進出したのはそれ以後ということになろう。したがって平良

図２　明治15年頃の玉縄城周辺（『迅速測図』）

文が「村岡」を称したとするなら、それは武蔵国村岡（埼玉県熊谷市）である可能性は高い。『新編武蔵国風土記稿』によると、そこが忠通の本拠であり、村の西北方にその墓と伝える茶臼塚がある。服部清道によれば、忠通が伝えられるように相模守に叙せられたとすれば、このときに彼および彼の一統が居を相模に移したのではないか、という（服部ほか1972）。妥当な推測であろう。とするとこの場合は、藤沢市の地名「村岡」は、忠通一族の移住後彼らに因んで定着したということになるのだろうか。

平安時代後期、村岡はおそらく鎌倉郡の一部であった。この時代の遺跡・旧跡は村岡に多く、上述の村岡城址を村岡氏の居館と伝える。この地の御霊神社は鎌倉権五郎景政を祀るものだが、鎌倉市坂ノ下から当地、そして横浜市戸塚区にかけて七社を数える。これらを結んだ線が、鎌倉党の勢力範囲を示すと同時に鎌倉の西の境界をも示すのだろう。鎌倉氏は景政以来大庭御厨の開発領主としても知られる。御厨の東の境界は、鎌倉市長谷の神明社から御霊社とほぼ同じ線を藤沢市川名付近まで向かい、境川と柏尾川の合流点以北は境川沿いにそのまま北上する。神明社は御厨の信仰の核なので、これはその東の四至を示していよう。一方御霊社の線は合流地点から柏尾川沿いに東行するので、平安時代後期の村岡

は大庭御厨と鎌倉郡に挟まれた境界域に位置することになる。

玉縄の地名が始まったのもこの頃とみてよい。天養元年と同二年（1144・1145）、源義朝は大庭御厨鵠沼郷を鎌倉の内だとして、侵入事件を起こした。この有名な事件の顛末を収めた天養二年（久安元年、1145）の官宣旨（『天養記』）に「玉輪（たまのわ）荘」の地名が出てくる。それによれば、玉輪荘は俣野川（境川）を境として大庭御厨と接しているというから、上述の地域と重なり、この荘園名がいつしか現在の玉縄の地名に変化したのだろう。

鎌倉時代

鎌倉幕府が成立すると、村岡丘陵は鎌倉への北西からの入口として重視された。村岡郷は建久二年（1191）という早い時期に、鶴岡八幡宮に寄進されている。玉縄近在の人物としては鎌倉時代初期の大庭景義・景親兄弟がおり、その消息は『吾妻鏡』に盛んに伝わる。治承寿永の内乱で平家方についた景親は頼朝に滅ぼされるが、景義は頼朝の信任を得て、本領の大庭御厨のほか通称名となった懐島や、波多野義常の遺領松田郷などを安堵された記事が見られる。大庭御厨は村岡からも程近く、その動静は玉縄地域にも影響を与えたに違いないが、詳細は不明である。

鎌倉時代後期、鎌倉新仏教諸派の活動が盛んとなり、そのうちの禅・律・浄土などは山腹に方形、または長方形の横穴を穿って僧侶や入道した武士などの墓とした。これらは「やぐら」と呼ばれ、藤沢市東南部を含む鎌倉地方にはかつて約3000基を超える数が存在したといわれる。村岡丘陵近在では藤沢市川名一帯に多かったが、近年の造成で大半消滅した。先述十二天遺跡の山裾にも、岩盤を方形に掘り窪めたやぐら様の遺構が見られる。谷戸内にこれら禅・律・浄土などの宗派の寺院が存在した可能性があるが、記録を欠く。

弘安五年（1282）、時宗（じしゅう）宗祖一遍たちは山内から鎌倉に入ろうとして執権北条時宗（ときむね）に出会い、拒否される。一行はその夜を山内の路辺で野宿したあと翌日片瀬にまわり、4ヵ月半を念仏修行して過ごした。以来鎌倉西北部および藤沢東南部には時宗の足跡が濃く残る。正中二年（1325）、本地点から西2kmの藤沢市西富に遊行道場藤沢山清浄光寺が開かれている。遊行寺の通称で知られ、開祖は遊行四代呑海、彼が近在の俣野出身（東俣野は横浜市、西俣野は藤沢市）であったことからこの地に作られた。

鎌倉最末期の元弘三年（1333）5月、相州村岡は南下してきた新田義貞の軍と北条軍との戦場となり、前者の側の飽間（秋間）一族数人が戦死したことが、埼玉県東松山市徳蔵寺所在の板碑に記されている（重要文化財「徳蔵寺板碑」）。かつて鎌倉氏の祖村岡一族の蟠踞した村岡は、鎌倉入りをめぐる攻防の要衝となった。

南北朝・室町・戦国時代

駿河国今川氏と結んだ伊勢宗瑞（「北条早雲」）は、明応七年（1498）足利茶々丸を討滅し、混乱の極みにあった伊豆を平定する。明応五年（1496）から文亀元年（1501）までの間に小田原城を制圧して相模国に進む（黒田2005）。宗瑞は関東の動乱に乗じて次々に相模東部の上杉支配地を収めていく。当時相模東部から三浦半島にかけて圧倒的な勢力を持っていた三浦道寸義同を平塚岡崎城に破り、永正九年（1512）、三浦半島の付け根に位置する鎌倉北端の玉縄に広大な城を築いた。玉縄城は三浦一族を半島内に封じるとともに、東相模の経営拠点として後北条氏にとってきわめて重要な城となった。城の縄張りは早雲自身によるという。村岡丘陵は、近代に削られる以前、玉縄城から南東の柏尾川まで長く延び、衝立のように三浦半島に対峙する地形をしていた。「石川忠總留書」（『埼玉県史　資料編』8－6）に、山内・扇谷両上杉の抗争が再発した明応三年（1494）9月19日、「相州玉縄要害没落」とみえ、玉縄地方にすでに何らかの拠点の存在したことがわかるが、詳細は不明である。平安時代後期、桓武平氏の城郭であった村岡の丘は、鎌倉最末期の戦乱の舞台を経て、戦国時代にまたもや城郭として採用されたことに

なる。中丸和伯氏は、玉縄周辺が「鎌倉時代のはじめからあらゆる点で要地であった」といっている（中丸1958）。初代城主は早雲の次男氏時で、以後天正十八年（1590）六代氏勝が豊臣方徳川軍の大将本多忠勝に開城するまで続いた。

玉縄城について

玉縄城に関しては、かつて大河内勉が多方面からの詳細な考察を加えており、ぜひ一読されたい（大河内1994）。また、豊富な研究のある玉縄北条氏についても、近年重要論文が集成されるなど、隆盛の気配を見せているので（浅倉編2012など）、ここでは概観するにとどめる。

現在その大半が戦後の造成により失われているが、戦前の赤星直忠による踏査と1955年頃に撮影された航空写真が旧状を伝える。それによれば、直径800ｍほどの環状をなす山稜内に本丸を置き、その外側に家臣団などの居館を配し、さらにその外周にもう一巻きの山稜部を有する複郭構造を持つ。そしてそこから支尾根を利用して放射状に郭を延ばし、周囲の長尾台（横浜市）・御幣山（藤沢市）・二伝寺（同）・村岡（同）・天神山（鎌倉市）などに支城が配されるという、相模野丘陵南端の複雑な地形を利用した強固な構造を誇る城であった（赤星1959）。ただし当初からそうであったとは考えにくく、玉縄城100年の歴史の中で徐々に城容が拡大・整備されていったと大河内は推測している（大河内1994）。

近年の研究によれば、玉縄城城主歴代（玉縄北条氏）は次のとおり（丸囲み数字が歴代次数）。

①氏時（早雲庵宗瑞二男）―②為昌（宗瑞長子氏綱二男）―③綱成（つなしげ）（氏綱養子、のち義兄為昌養子）―④氏繁（綱成長子）―⑤氏舜（うじきよ）（氏繁長子）―⑥氏勝（氏繁二男）

永正九年（1512）8月、鎌倉に入った早雲庵宗瑞は、「枯るる樹にまた花の木を植ゑ添へてもとの都に成してこそ見め」と詠んだという（『快元僧都記』天文三年十一月二〇日条）。後北条氏は寺社領を除いて鎌倉を直轄領とし、重臣の大道寺氏を代官に、後藤氏等鎌倉在住の有力者を小代官に任じた。永正十七年（1520）と天文十六年（1547）には検地をおこなっている。後北条氏はまた、鎌倉の社寺の敷地・所領を安堵あるいは寄進し、鶴岡八幡宮を造営した。八幡宮は鎌倉に入った里見実堯軍により大永六年（1526）12月、諸堂を焼失したが、天文元年（1532）氏綱が再興に着手、10年をかけて正殿・上宮拝殿・上宮廻廊・式内社・神宮寺・門・池・段葛・赤橋・下馬橋・浜の大鳥居などを整備・再建した（「快元僧都記」）。この造営に際しては、京都・奈良・伊豆・小田原・鎌倉など各地の職人が呼び寄せられ、玉縄の職人も大工番匠として加わっているので、両地の建立物に技法的共通性があったことが推測される。また「快元記」からは、氏綱がたびたび鶴岡八幡宮に参詣していたことや、玉縄城主北条為昌やその家臣が造営に関わっていたことがうかがえる。藤木久志によれば、この時期仮遷宮や大町八雲神社の祇園会などは、町衆でおおいに賑わったという（藤木1993）。

永禄二年（1559）、早雲の孫で小田原城当主であった氏康が、所領支配のため領主ごとに家臣団の名簿を作らせるが（『北条氏所領役帳』）、その中に村岡領主として玉縄城三代城主北条綱成の名がある。綱成は剛勇で知られ、扇谷上杉氏を討った河越合戦のとき目覚ましい活躍を示した。彼の軍団を「玉縄衆」と呼ぶ。

鎌倉市内でこの時期の後北条氏関連遺跡が発見されている。天正十七年（1547）、荏柄天神社造営のため北条氏康は、かつての大倉幕府跡東南角の六浦道沿いに、商人・道者から関銭を徴収する関所を設けた。ちょうどその地点と思われる場所の調査で、大型の礎石建物が発見され、関所建物の一部と推測された（馬淵ほか1990）。

（馬淵）

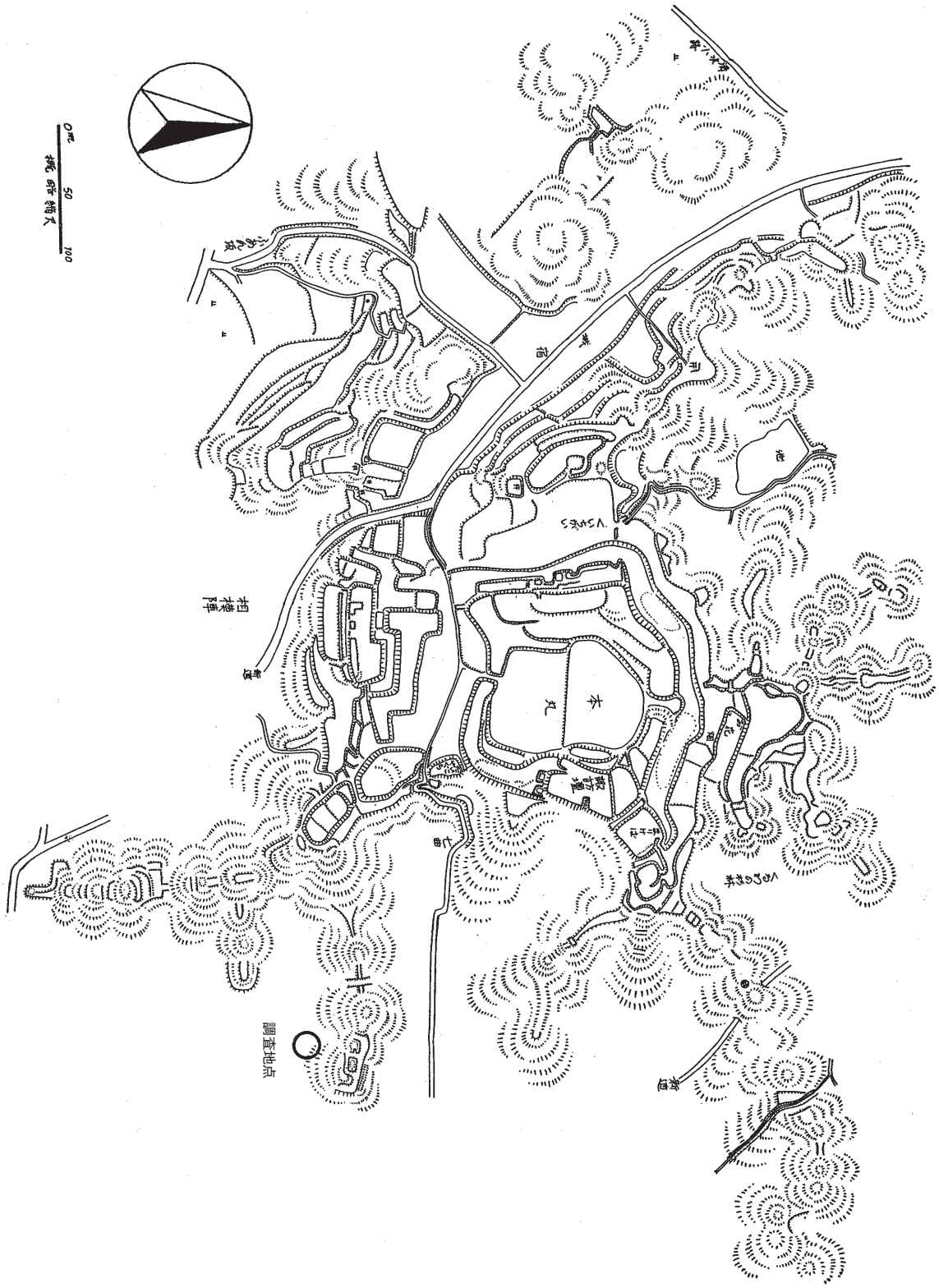


図３　玉縄城縄張図（赤星直忠氏調査、赤星1959第６図版を改変）

溜池
お花畑
曲輪の杉林
堀
土塁
くいちがい
鉄塔
諏訪壇
(本丸・城山)
主郭
御厩曲輪
土塁
土塁
土塁

高柳光寿　1959『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
田代郁夫ほか　1998『若尾山（藤沢市№36）遺跡　―藤沢市立大道小学校内地点―　発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所
土屋浩美ほか　1999『二伝寺砦遺跡　―藤沢市渡内3丁目535・536地点―』東国歴史考古学研究所ほか
寺田兼方・服部清道・杉山博　1972『藤沢市史』第4巻　藤沢市
寺田兼方ほか　2008『藤沢市川名新林横穴墓群発掘調査報告書』
長澤邦夫・横山太郎ほか　2007『御幣山遺跡（5次調査）』有限会社吾妻考古学研究所
中丸和伯　1958「第二篇第三章　後北条時代」『横浜市史　第1巻』
藤沢市教育委員会　1983『藤沢市文化財調査報告書』第18集
藤沢市教育委員会　2009・2010・2011『大地に刻まれた藤沢の歴史』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
藤沢市教育文化センター　2000『ふじさわの大地―人々の暮らしと自然―』

第二章　調査の概要

1．調査にいたる経緯

植木字植谷戸198番において、個人専用住宅建設の照会があった。工法は鋼管杭打ち込みによる基礎工事を含むものであり、設計変更は困難と判断された。当地点は玉縄城跡の縄張りにおいて、南西外郭部として位置づけられる丘陵の東側山裾にあたり、地下の遺構の損壊を免れないため、鎌倉市教育委員会により発掘調査が実施されることになった。

2．調査方法

掘削方法

掘削にあたっては残土を場内処理とし、置き場所の確保のため面積98㎡の調査区を東西に二分割した。そして前半（西半部）を「1区」、後半（東半部）を「2区」と仮称した。　両区とも地表下60cm前後の表土部分を重機で掘削し、以下を人力で掘削した。

測量基準

調査区の長軸を概念上の基準軸とし、測量はこれに直交または平行する軸線を5m間隔で設定しておこなった。のち資料整理の際、世界測地系の数値を導入した。調査区はX－71 945～71 960　Y－28 730～28 750の間にある。

3．調査の経過

調査は2006年2月2日に始まり、4月6日に終了した。その間の経過は以下の通り。

2月2日	重機により、1区表土掘削
2月6日	機材搬入
2月21日	1区Ⅰ面全景写真撮影
3月3日	1区Ⅱ面全景写真撮影
3月13日	1区Ⅲ面全景写真撮影
3月15日	1区Ⅳ面全景写真撮影
3月16日	重機により、1区埋め戻しと2区表土掘削
3月24日	2区Ⅰ面全景写真撮影
3月28日	2区Ⅱ面全景写真撮影
4月4日	2区Ⅳ面全景写真撮影
4月6日	機材撤収

（沖元）

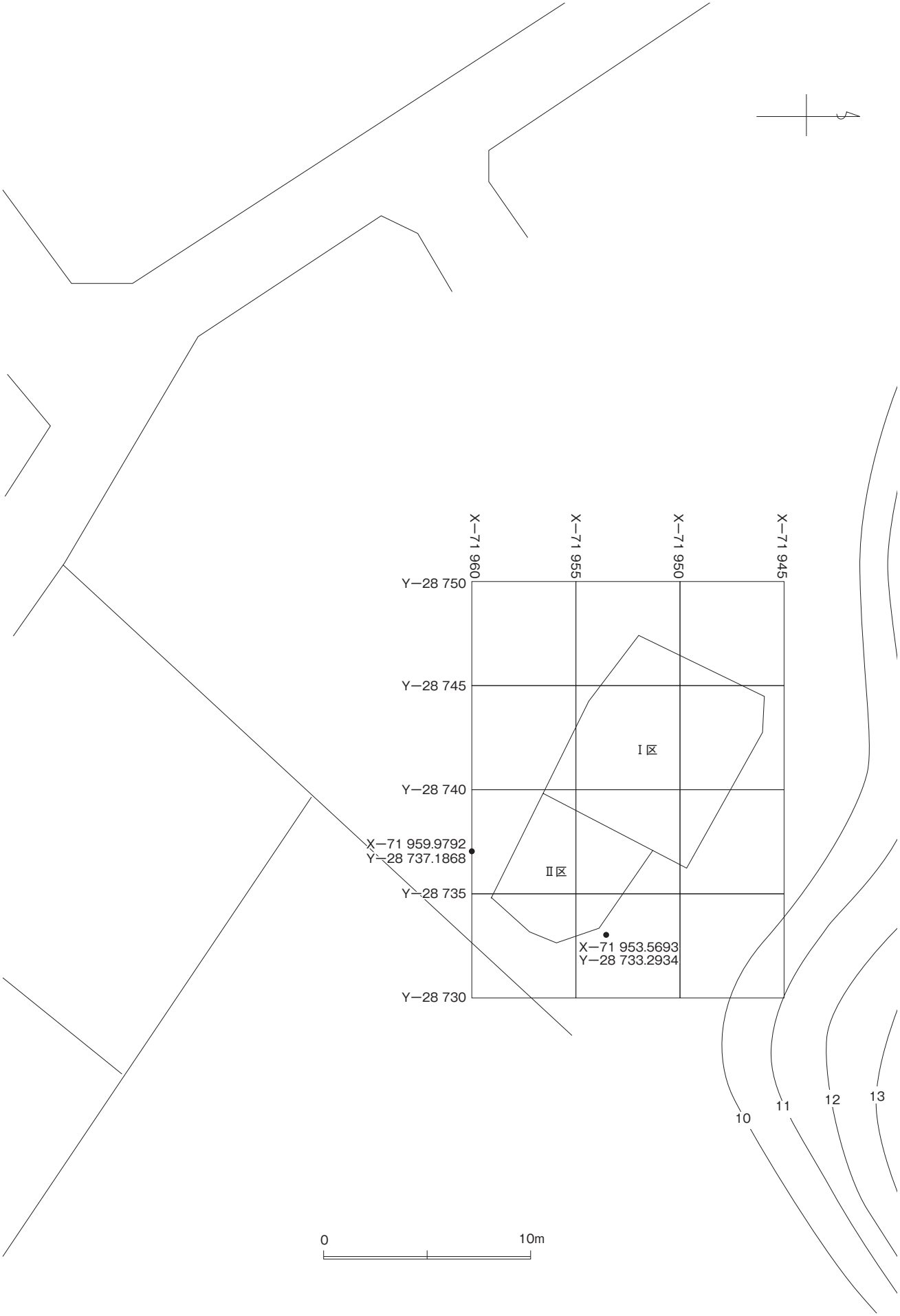

X−71 960
X−71 955
X−71 950
X−71 945
Y−28 750
Y−28 745
Y−28 740
Y−28 735
Y−28 730
X−71 959.9792
Y−28 737.1868
X−71 953.5693
Y−28 733.2934
Ⅰ区
Ⅱ区
10
11
12
13
0
10m

図５　調査区設定図

第三章　調査結果

第１節　概要

１．層序

地表面と表土

地表面の標高は、調査区中央部北側で9.60m、同南側で8.90ｍと、山裾から谷中央部に向けていくらか傾斜がある。これを除くと近世後期～近代の耕土となり、幕末頃から一帯が畑地だったことがわかる。

Ⅰ面～Ⅱ面上層

耕作土の下に現われる最初の面で、標高8.40（南）～8.70ｍ（北）程度、やや谷中央部に向かって下っている。面を構成するのは灰褐色粘質土で、拳大泥岩塊を多く含む。調査区中央部から西南域にかけては、Ⅰ面下に破砕泥岩とローム塊の版築面が見られ、柱穴様の小穴も確認できたので、これを当初「Ⅱ面」と称し、次述の「Ⅱ面下層」と同じⅡ面「群」と考えた。しかしⅡ面下層には溝があるが、この「Ⅱ面」はそれを埋めて平面を造成していることから、むしろⅠ面下層の遺構群と把握して、ここでは併せて提示することとした

Ⅱ面下層

Ⅱ面上層を構成する泥岩塊による版築層は厚さ20㎝を超えるところがあり、これを剥がすと標高8.19～8.34ｍに、泥岩塊を多く含む暗灰褐色ないしは暗褐色の粘質土が現れる。この上面からは小穴等の遺構が確認できたので、Ⅱ面下層とした。しかし、後述の溝２の上層の掘り直しらしき浅い溝もあったことから、Ⅱ面上層との隔絶が認められたので、ここでは分離して提示する。

Ⅲ面

特に１区においてⅡ面下層構成層の下に締まりの強い褐色～暗灰褐色粘質土の粘質土層があり、遺構も確認できたのでこれを「Ⅲ面」とした。標高8.20ｍ強で、おおむね平坦な面といえる。2区においてはⅡ面下層に結びつき、遺構に恵まれなかった。

Ⅳ面

Ⅲ面構成土は10～20㎝ほどの厚みがあり、これを除くと標高8.10～8.20ｍで、締まりの強い黒褐色の粘質土が現れ、上面に溝等の大型遺構が数条検出されたので、「Ⅳ面」とした。これがこの遺跡における最終生活面である。

基盤層

生活痕跡は上記Ⅳ面までにとどまるが、１区西壁際・同中央部・２区南壁際に確認のための深掘り坑を設定した。その結果、Ⅳ面以下は無遺物の基盤層であることが確認されたので、Ⅳ面からほぼ１ｍまで掘り下げたところで（1区中央部）、掘削を終えた。

（馬淵）

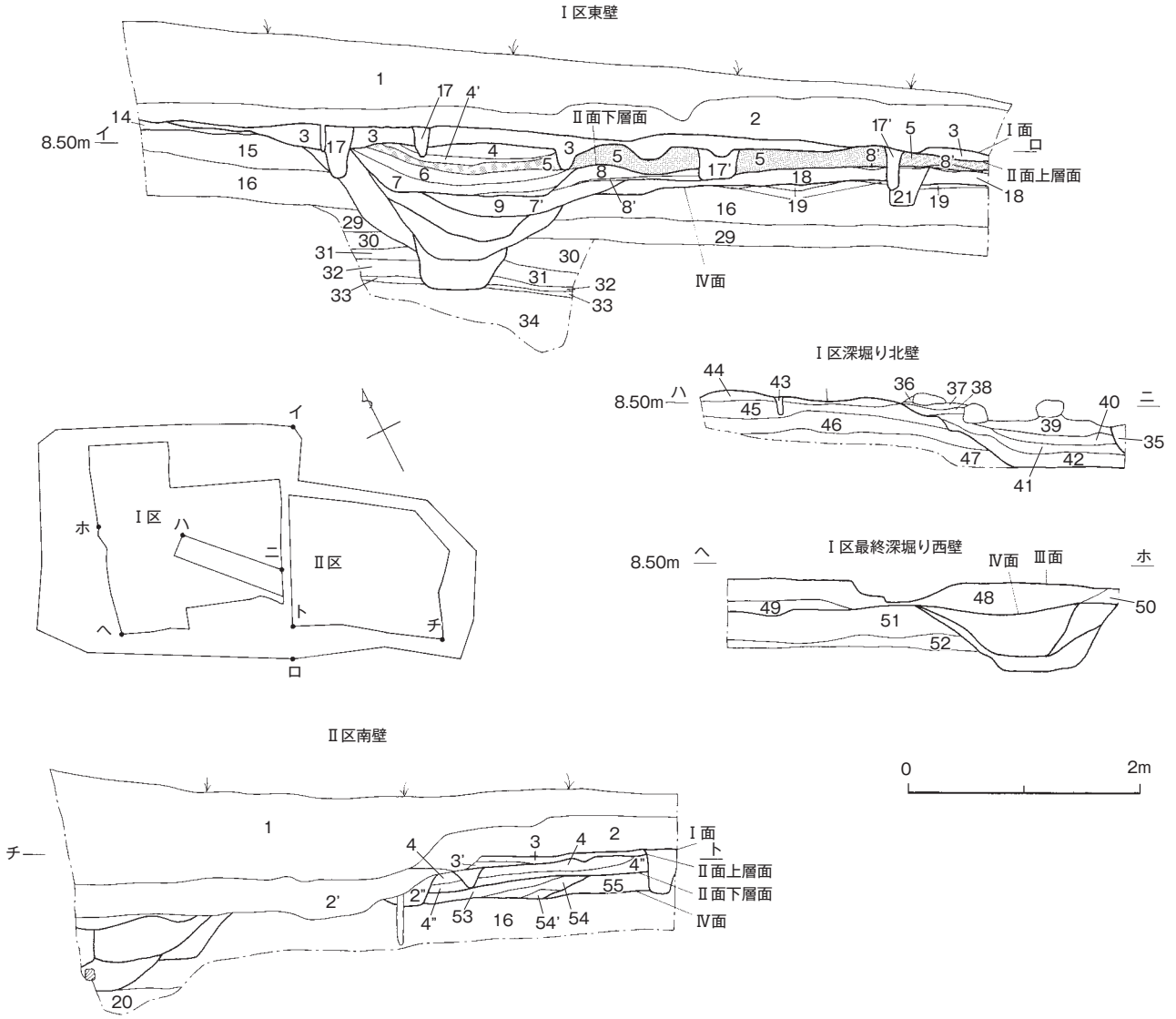


図６　調査区・深掘り坑土層断面図

1．　表土
2．　灰褐色砂質土　　近世後期～近代の耕作土
2'．青灰色粘質土　　近代の水田耕作土
2"．青灰色粘質土　　若干の泥岩含む　畦畔杭の裏込め
2'''．灰色粘質土　　畦畔の杭跡
3．　暗灰褐色～灰褐色粘質土　　半拳大泥岩多く含む　上面がⅠ面
3'．暗灰褐色粘質土　若干の泥岩含む
4．　暗灰褐色～明灰褐色粘質土　拳大以上の泥岩含む上面がⅡ面上層面
4'．明灰褐色粘質土　泥岩少ない
5．　明黄灰色粘質土　泥岩版築層
6．　暗褐色粘質土　　地山黒色土・赤褐色ロームの混土　2～4cmの泥岩含む
7．　茶褐色～黒褐色粘質土
7'．暗褐色粘質土　　炭化物多量に含む
8．　灰褐色～暗褐色粘質土　　炭化物・泥岩小塊含む上面がⅡ面下層面
9．　青灰色砂質土　　泥岩・凝灰岩粒子ブロック多く含む
14．　茶褐色粘質土　　地山黒色土・泥岩塊含む
15．　黒褐色強粘質土　凝灰岩粒子少量含む
16．　黒褐色強粘質土　混入物ほとんどなし　上面がⅣ面
17．　暗灰褐砂質土　　柱穴埋土
17'．灰色粘質土　　柱穴埋土
18．　暗灰褐色粘質土　拳大以下の泥岩含む
19．　黒褐色粘質土　　炭化物多量に含む
20．　黒褐色粘質土　　植物遺体多量に含む
21．　暗茶褐色粘質土　柱穴埋土
29．　暗褐色強粘質土　少量の泥岩粒子・炭化物・火山灰む
30．　黒褐色強粘質土　混入物ほとんどなし
31．　黒褐色強粘質土　29・30に比べやや明るい　混入物極めて少ない
32．　青灰色弱粘質土
33．　暗褐色弱粘質土
34．　暗茶褐色弱粘質土　植物遺体を多く含む
35．　灰褐色粘質土　　粘性やや強く、しまりあり　5mm～2cm大の泥岩粒含む
36．　灰褐色土　　粘性、しまりやや弱い　1cm～3cm大の泥岩含む
37．　灰褐色土　　粘性、しまりやや弱い　1cm～5cm大の泥岩含む
38．　灰褐色土　　粘性あり、しまり強い　1cm～5cm大の泥岩粒、関東ローム粒多く含み、炭化物僅かに含む
39．　灰褐色粘質土　粘性強く、しまりやや弱い　1cm～10cm大の泥岩多く含み、炭化物少し含む
40．　暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　1cm～5cm大の泥岩含み、炭化物多く含む

41. 暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　炭化物含む
42. 暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　1㎝～3㎝大の泥岩、炭化物少し含む
43. 灰褐色砂質土　しまり弱い　1㎝～3㎝大の泥岩、炭化物僅かに含む
44. 灰褐色粘質土　粘性やや強く、しまりやや弱い　5mm～3㎝大の泥岩含み、炭化物少し含む
45. 黄灰褐色砂質土　粘性、しまり弱い　1㎝～10㎝大の泥岩非常に多く、炭化物少し含む
46. 暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　1㎝～10㎝大の泥岩少し含み、炭化物多く含む
47. 暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い。1㎝～10㎝大の泥岩、炭化物含む
48. 褐色粘質土　粘性あり、しまり強い　2mm～5㎝大の泥岩多く含み、炭化物含む
49. 暗灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　2mm～5㎝大の泥岩含み、炭化物少し含む
50. 黒灰褐色粘質土　粘性あり、しまり強い　人頭大泥岩含み、炭化物僅かに含む
51. 黒灰褐色粘質土　粘性、しまり強い　2mm～3㎝大の泥岩、炭化物含む
52. 黒灰色粘質土　粘性、しまり強い　2mm～3㎝大の泥岩、炭化物少し含む
53. 暗褐色粘質土　2～4㎝の泥岩含む　上面がⅡ面上層面
54. 黒褐色粘質土　炭化層、もしくは炭化物を多量に含む層
54'. 暗茶褐色粘質土　54と55の混土
55. 暗褐色粘質土　炭化物、泥岩小塊含む　上面がⅡ面下層面

第2節　各説

1．Ⅰ面～Ⅱ面上層

面の概要（図7・8）

検出高：8.40～8.70ｍ　**面構成土**：灰褐色粘質土・破砕泥岩版築　**検出遺構**：柱穴列9列・土坑5基・小穴154穴（柱穴列9列含む）　**Ⅰ面出土遺物**：土師器皿R種中型（1）・土器質焙烙（2）・砥石（3）　**Ⅰ面～Ⅱ面上層出土遺物**：土師器皿R種小型（4）・渥美甕（5）・瀬戸底卸目付大皿（6）・瀬戸縁釉小皿（7）・瀬戸美濃碗（8）・瀬戸美濃腰折皿（9）・瀬戸美濃丸皿（10）　**特記事項**：9の腰折皿は古瀬戸後Ⅳ期新段階のもので、15世紀後半。10の丸皿は登窯第1小期のもので17世紀前半。

柱穴列1（図9）

位置：X－71 948.56～－71 953.41　Y－28 740.13～－28 743.65　**平面形**：直線　**規模**：東西5.84ｍ　**主軸方位**：N－35°－W　**重複関係**：土坑1・2・3に切られる、柱穴列7と重なる　**出土遺物**：(P.7) 瀬戸美濃魚形皿（1）・(P.8) 土師器皿R種大型（2）　**特記事項**：柱間は安定せず、時期の重複も考えられるが、ひとまず同一遺構として提示した。P.6には杭の抜き痕と思われるものが確認できた。1の魚形皿は大窯第3段階後半のもの。

柱穴列2（図9）

位置：X－71 947.98～－71 953.97　Y－28 740.25～－28 744.37　**平面形**：直線　**規模**：東西6.97ｍ　**主軸方位**：N－34°－W　**重複関係**：土坑4を切る、柱穴列3に切られる、柱穴列7と重なる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：P.2内の石は泥岩のため礎石とは考えにくい。

柱穴列3（図9）

位置：X－71 948.70～－71 954.68　Y－28 740.14～－28 744.58　**平面形**：直線　**規模**：東西7.30ｍ　**主軸方位**：N－36.5°－W　**重複関係**：柱穴列2・土坑4を切る、柱穴列7・9と重なる　**出土遺物**：(P.6) 土師器皿R種極小型（3）　**特記事項**：P.7には杭の抜き痕と思われるものを確認した。

柱穴列4（図9）

位置：X－71 948.83～－71 950.85　Y－28 742.57～－28 745.54　**平面形**：直線　**規模**：南北3.45ｍ　**主軸方位**：N－56°－E　**重複関係**：柱穴列2と重なる　**出土遺物**：(P.8) 土師器皿R種極小型（4）・土師器皿R種小型（5）

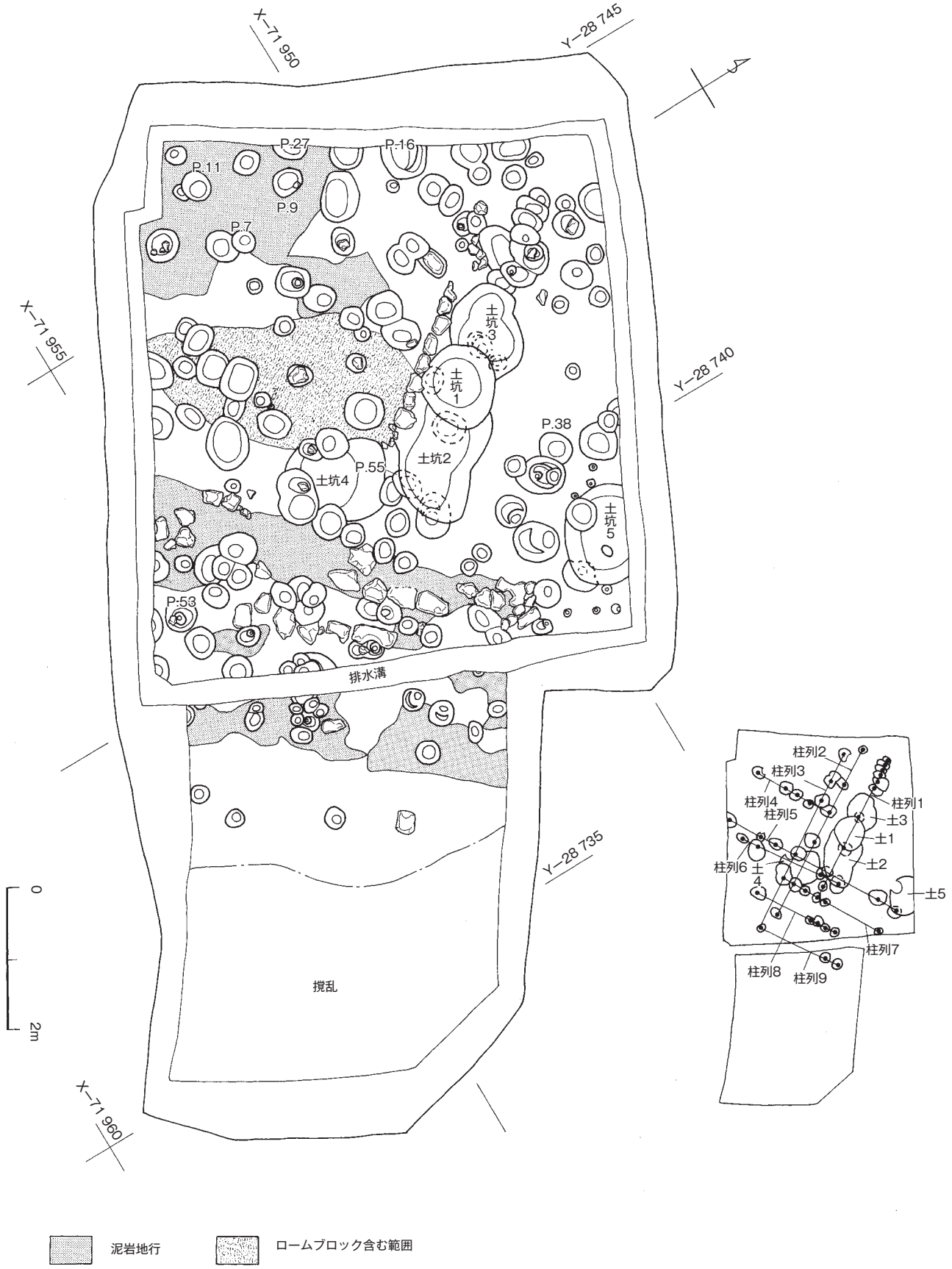


図７　Ⅰ面～Ⅱ面上層遺構全図

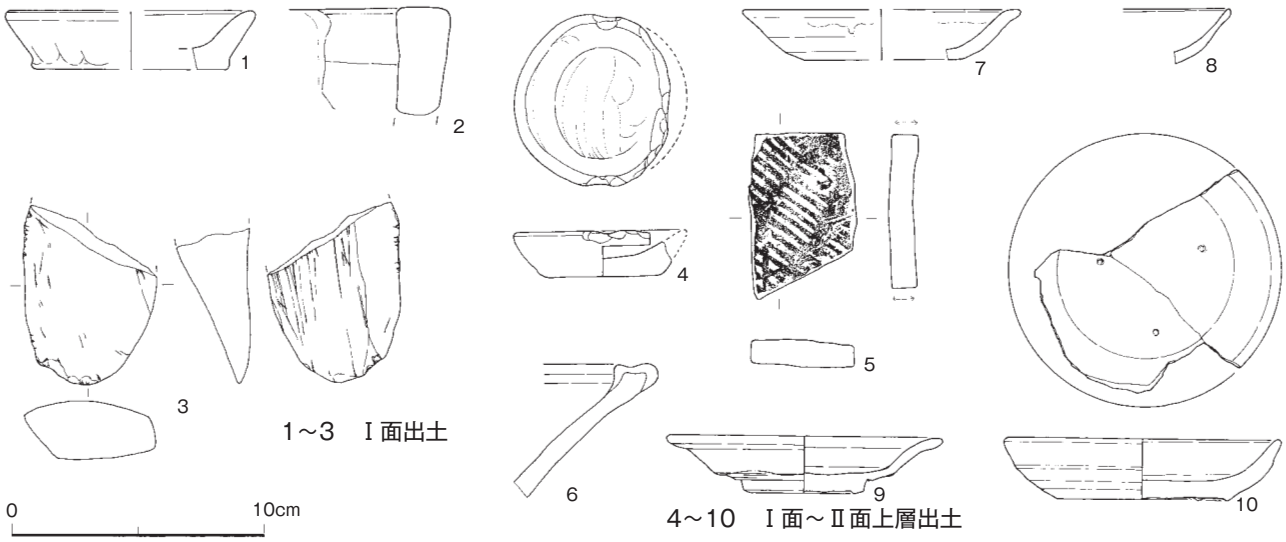


図８　Ⅰ面～Ⅱ面上層出土遺物

柱穴列５（図１０）

位置：X－71 949.81～（－71 953.93）　Y－28 738.28～（－28 744.51）　**平面形**：直線　**規模**：南北7.37 m　**主軸方位**:N－56°－E　**重複関係**:土坑４を切り、土坑５に切られる　柱穴列３と重なる　**出土遺物**:図化可能なものなし

柱穴列６（図１０）

位置：X－71 951.12～－71 953.69　Y－28 740.07～－28 743.18　**平面形**：直線　**規模**：南北4.26 m　**主軸方位**：N－53°－E　**重複関係**：土坑４を切り、土坑２・P.55に切られる　**出土遺物**：図化可能なものなし

柱穴列７（図１０）

位置：X－71 950.67～－71 953.23　Y－28 738.05～－28 741.65　**平面形**：直線　**規模**：南北4.35 m　**主軸方位**：N－56.5°－E　**重複関係**：土坑４を切る　柱穴列１・２・３と重なる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**:P.5とP.6の間に泥岩列があるが、軸線上に並んだので同一遺構として提示した。

柱穴列８（図１０）

位置：X－71 952.12～－71 954.25　Y－28 738.63～－28 741.64　**平面形**：直線　**規模**：南北3.46 m　**主軸方位**：N－56°－E　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能なものなし

柱穴列９（図１０）

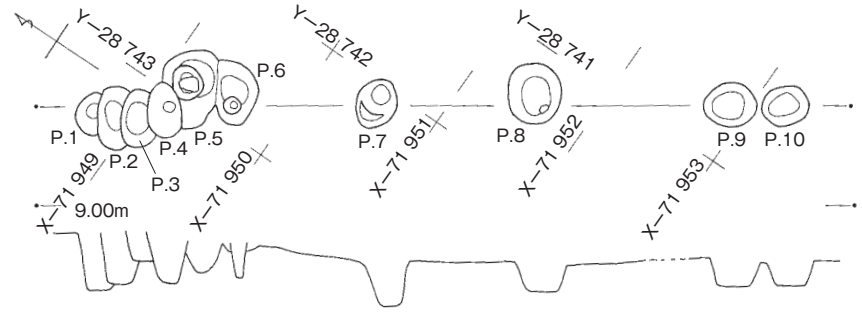
位置：X－71 952.48～－71 954.67　Y－28 737.68～－28 740.39　**平面形**：直線　**規模**：南北3.34 m　**主軸方位**：N－52°－E　**重複関係**：柱穴列３と重なる　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：P.1には杭の抜き痕と思われるものを確認した。

土坑１（図１１）

位置：X－71 949.52～－71 950.48　Y－28 741.16～－28 742.30　**規模**：東西119cm×南北105cm×深さ15cm（底面高8.53 m）　**平面形**：楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－89.5°－W　**重複関係**：柱穴列１・土坑２・３を切る　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

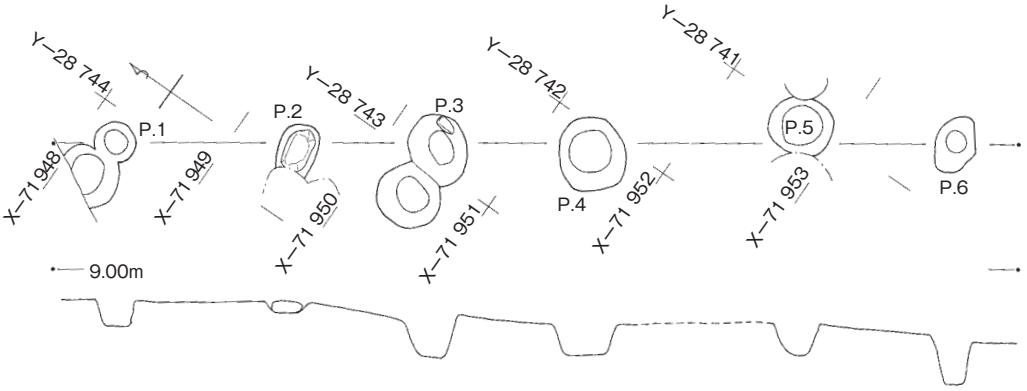
土坑２（図１１）

位置：X－71 949.87～－71 951.49　Y－28 740.10～（－28 741.53）　**規模**：東西（197cm）×南北142cm



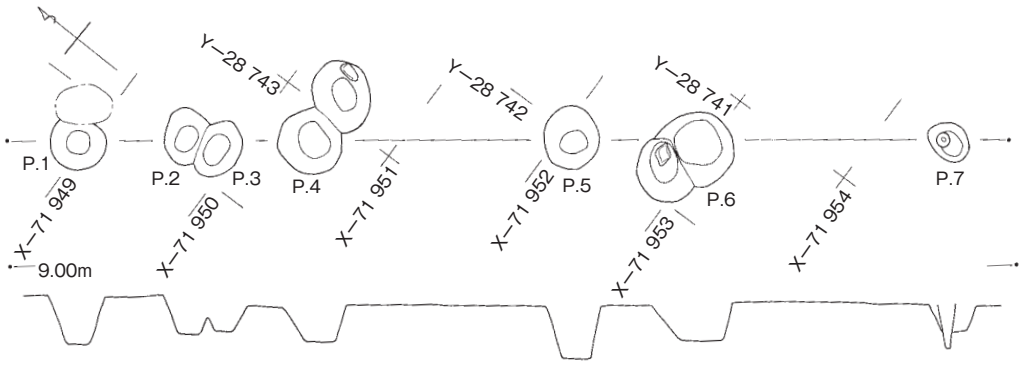
柱穴列1						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	35	×	(30)	×	46
P.2	50	×	(30)	×	42
P.3	45	×	(30)	×	16
P.4	43	×	27	×	35
P.5	65	×	49	×	37
P.6	53	×	36	×	31
P.7	43	×	33	×	39
P.8	48	×	42	×	20
P.9	42	×	34	×	24
P.10	38	×	31	×	19

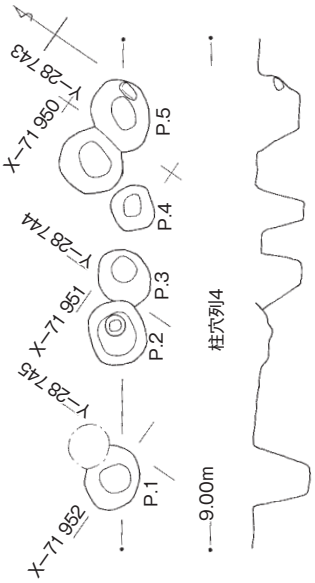
単位cm



柱穴列2						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	33	×	32	×	23
P.2	(46)	×	30	×	8
P.3	58	×	45	×	33
P.4	68	×	53	×	28
P.5	50	×	44	×	27
P.6	47	×	33	×	39

単位cm



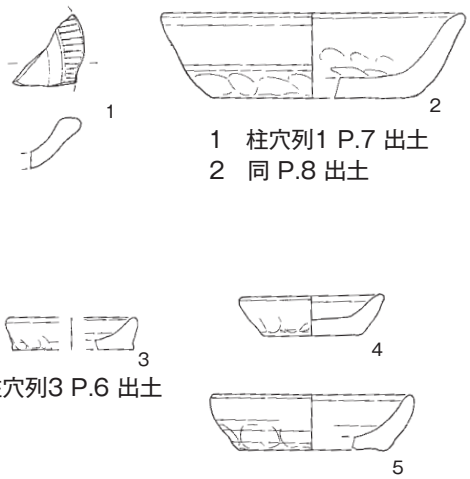


柱穴列3						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	44	×	40	×	40
P.2	45	×	38	×	32
P.3	47	×	(34)	×	23
P.4	52	×	48	×	29
P.5	50	×	43	×	43
P.6	65	×	59	×	32
P.7	36	×	28	×	38

単位cm

柱穴列4						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	51	×	42	×	44
P.2	51	×	43	×	14
P.3	47	×	40	×	36
P.4	35	×	32	×	37
P.5	58	×	45	×	33

単位cm

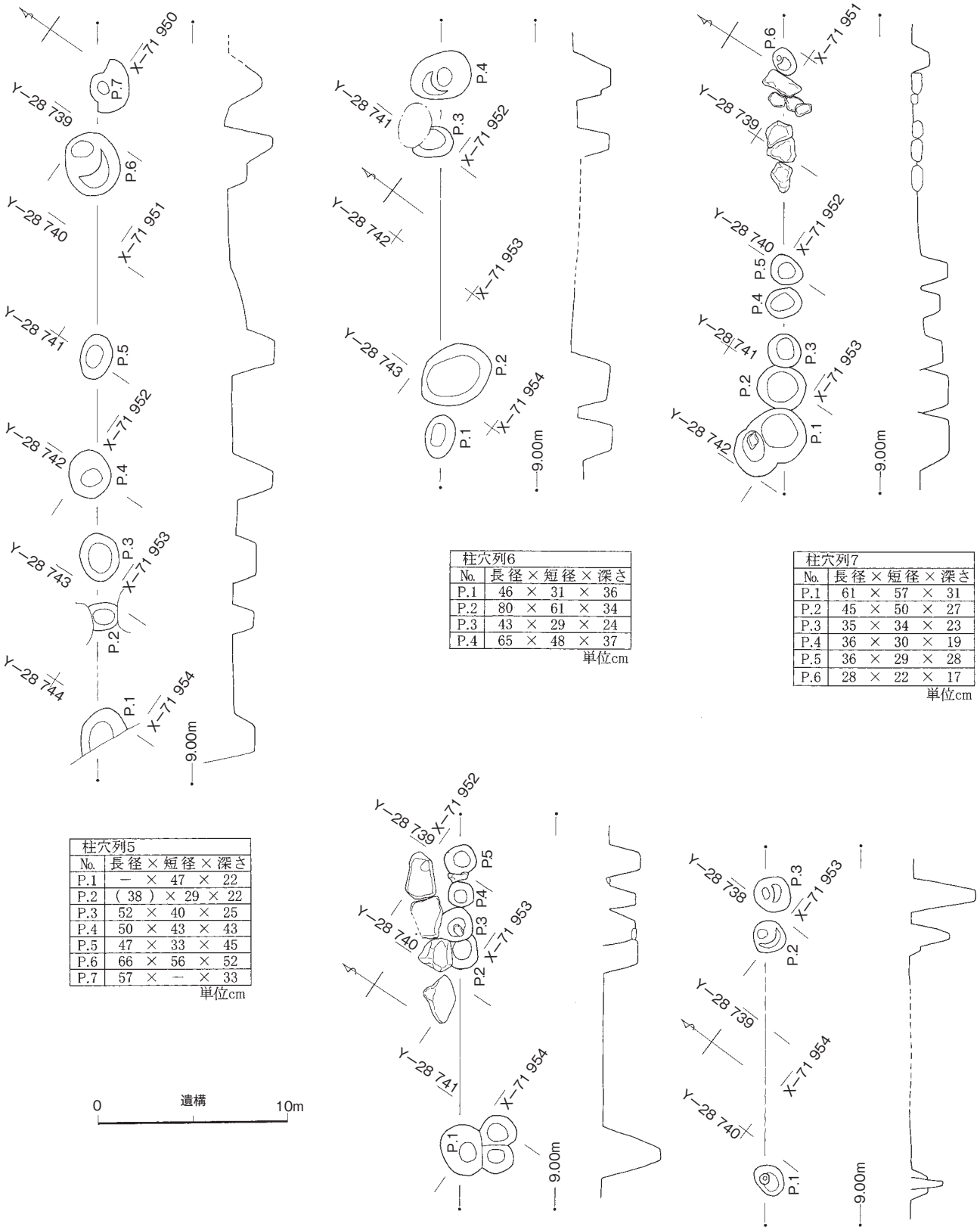


1　柱穴列1 P.7 出土
2　同 P.8 出土

柱穴列3 P.6 出土

4～5　柱穴列4 P.8 出土

図９　柱穴列１～４、同出土遺物



柱穴列5

No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	− × 47 × 22
P.2	(38) × 29 × 22
P.3	52 × 40 × 25
P.4	50 × 43 × 43
P.5	47 × 33 × 45
P.6	66 × 56 × 52
P.7	57 × − × 33

単位cm

柱穴列6

No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	46 × 31 × 36
P.2	80 × 61 × 34
P.3	43 × 29 × 24
P.4	65 × 48 × 37

単位cm

柱穴列7

No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	61 × 57 × 31
P.2	45 × 50 × 27
P.3	35 × 34 × 23
P.4	36 × 30 × 19
P.5	36 × 29 × 28
P.6	28 × 22 × 17

単位cm

柱穴列8

No.	長径 × 短径 × 深さ
P.1	54 × 46 × 62
P.2	38 × − × 37
P.3	37 × 36 × 33
P.4	27 × 26 × 31
P.5	32 × 30 × 35

単位cm

柱穴列9

No.	長径×短径×深さ
P.1	36 × 28 × 38
P.2	36 × 36 × 43
P.3	37 × 36 × 69

単位cm

図10　柱穴列5～9

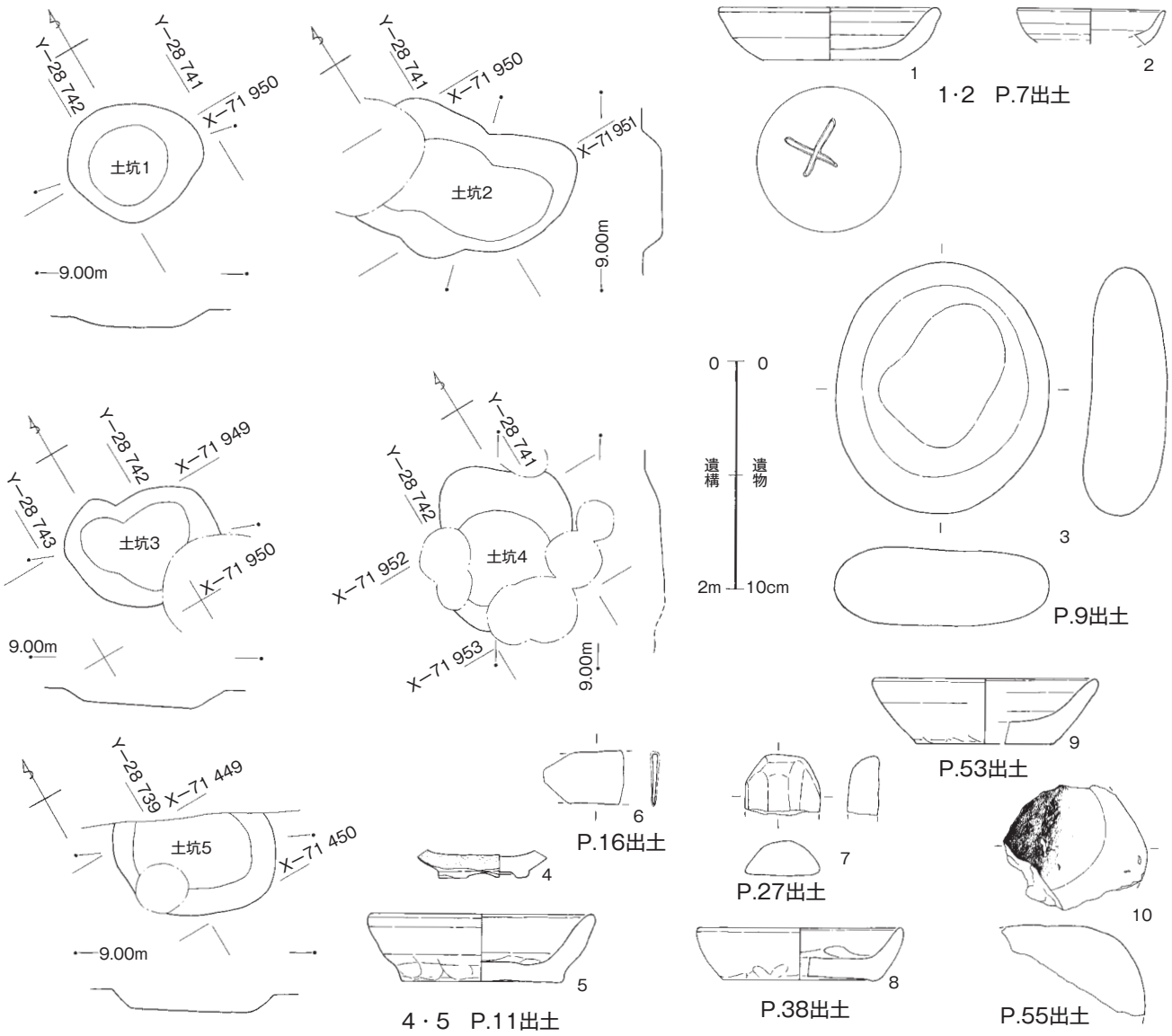


図11　土坑１～５、Ⅰ面～Ⅱ面上層小穴出土遺物

×深さ21cm（底面高8.46ｍ）　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－42°－W　**重複関係**：柱穴列１・６を切り、土坑１に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

土坑３（図11）

位置：X－71 949.64～（－71 949.85）　Y－28 741.53～－28 742.81　**規模**：東西（149cm）×南北107cm×深さ16cm（底面高8.56ｍ）　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－47°－W　**重複関係**：柱穴列１を切り、土坑１に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：一帯に横並びで存在する土坑群の一つ。非常に浅く性格不明。

土坑４（図11）

位置：X－71 951.49～－71 952.85　Y－28 740.79～－28 742.15　**規模**：東西117cm×南北144cm×深さ11cm（底面高8.42ｍ）　**平面形**：隅丸長方形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－30°－E　**重複関係**：柱穴列２・３・７に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：非常に浅く、性格不明。

土坑５（図11）

位置：X（－71 448.82）～－71 450.04　Y（－28 738.09）～－28 739.55　**規模**：東西143cm×南北（88cm）

図12　Ⅱ面下層遺構全図

×深さ17㎝（底面高8.48ｍ）　**平面形**：楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－64°－W　**重複関係**：柱穴列５を切る　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：非常に浅く、性格不明。

Ⅰ面～Ⅱ面上層小穴出土遺物（図11）

(P.7) 土師器皿Ｒ種小型（１）・瀬戸美濃小皿（２）・(P.9) 台石（３）・(P.11) 白磁皿（４）・土師器皿Ｒ種中型（５）・(P.16) 刀子（６）・(P.27) 不明石製品（７）・(P.38) 土師器皿Ｒ種小型（８）・(P.53) 土師器皿Ｒ種中型（９）・(P.55) 使用痕ある石片（10）　**特記事項**：３の台石は７世紀代にも類例がみられるため、年代を特定することはできないが、中世よりも前のものであろう。４の白磁は15世紀。

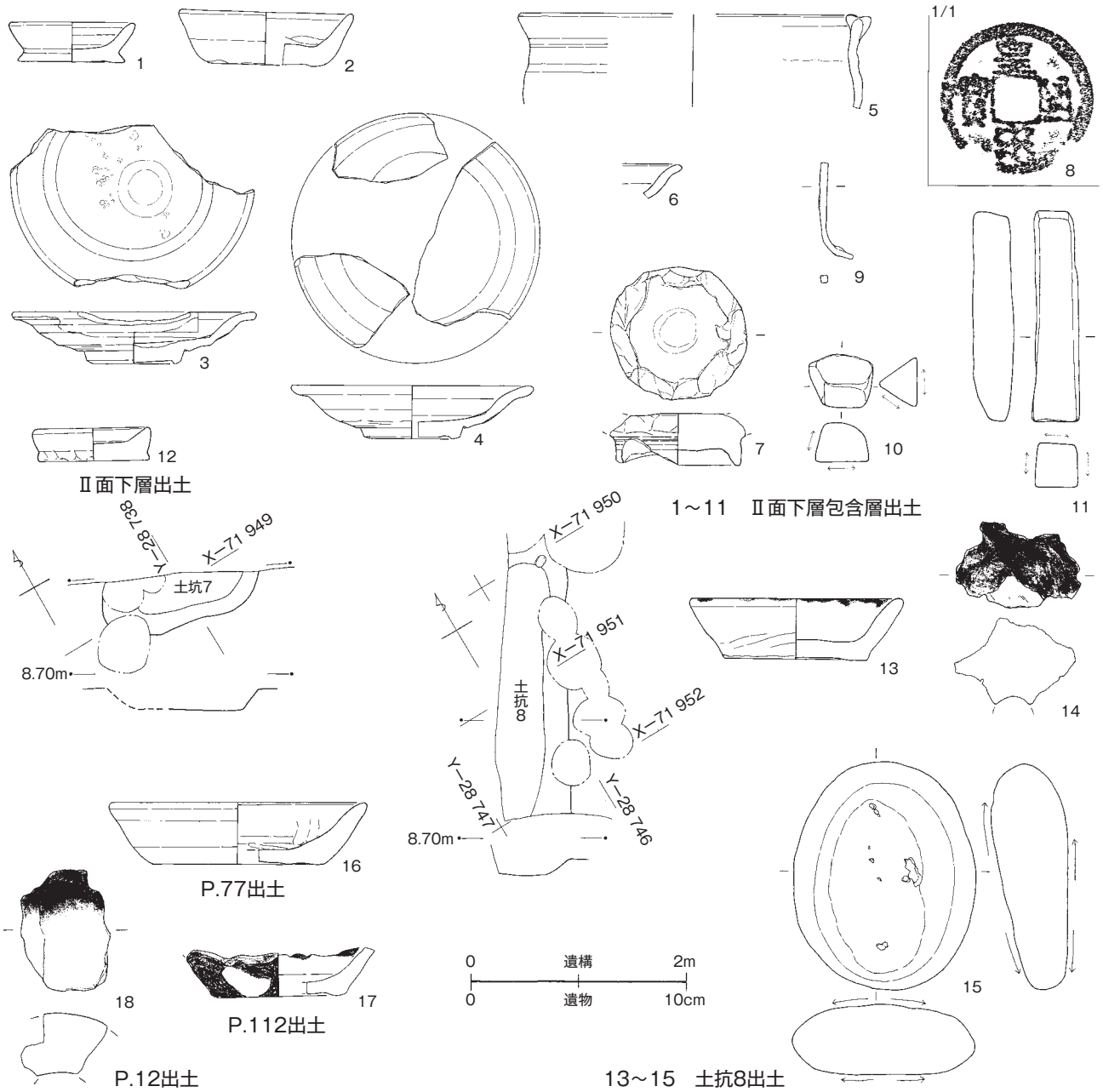


図13　Ⅱ面下層包含層・Ⅱ面下層出土遺物、土坑７・８　同出土遺物、Ⅱ面下層小穴出土遺物

２．Ⅱ面下層

面の概要（図12・13）

検出高：8.19 ～ 8.34 m　**面構成土**：暗褐色粘質土・暗灰褐色粘質土　**検出遺構**：土坑２基・小穴76穴

Ⅱ面下層包含層出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（１・２）・瀬戸美濃腰折皿（３・４・６）・瀬戸美濃口広有耳壺（５）・竜泉窯系青磁碗（７）・皇宋通宝（８）・鉄釘（９）・砥石仕上げ砥（10）・砥石中砥（11）

Ⅱ面下層出土遺物：土師器皿Ｒ種小型（12）　**特記事項**：３・４の腰折皿は古瀬戸後Ⅳ期新段階、５の口広有耳壺は大窯第１段階のもの。７の青磁碗は15世紀初頭前後。

土坑７（図13）

位置：X（－71 948.39）～－71 949.45　Y（－28 737.67）～－28 738.78　**規模**：東西149cm×南北（45cm）×深さ21cm(底面高8.36ｍ）　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－64°－W　**重複関係**：小穴に切られる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：浅い楕円状の土坑。性格は不明。

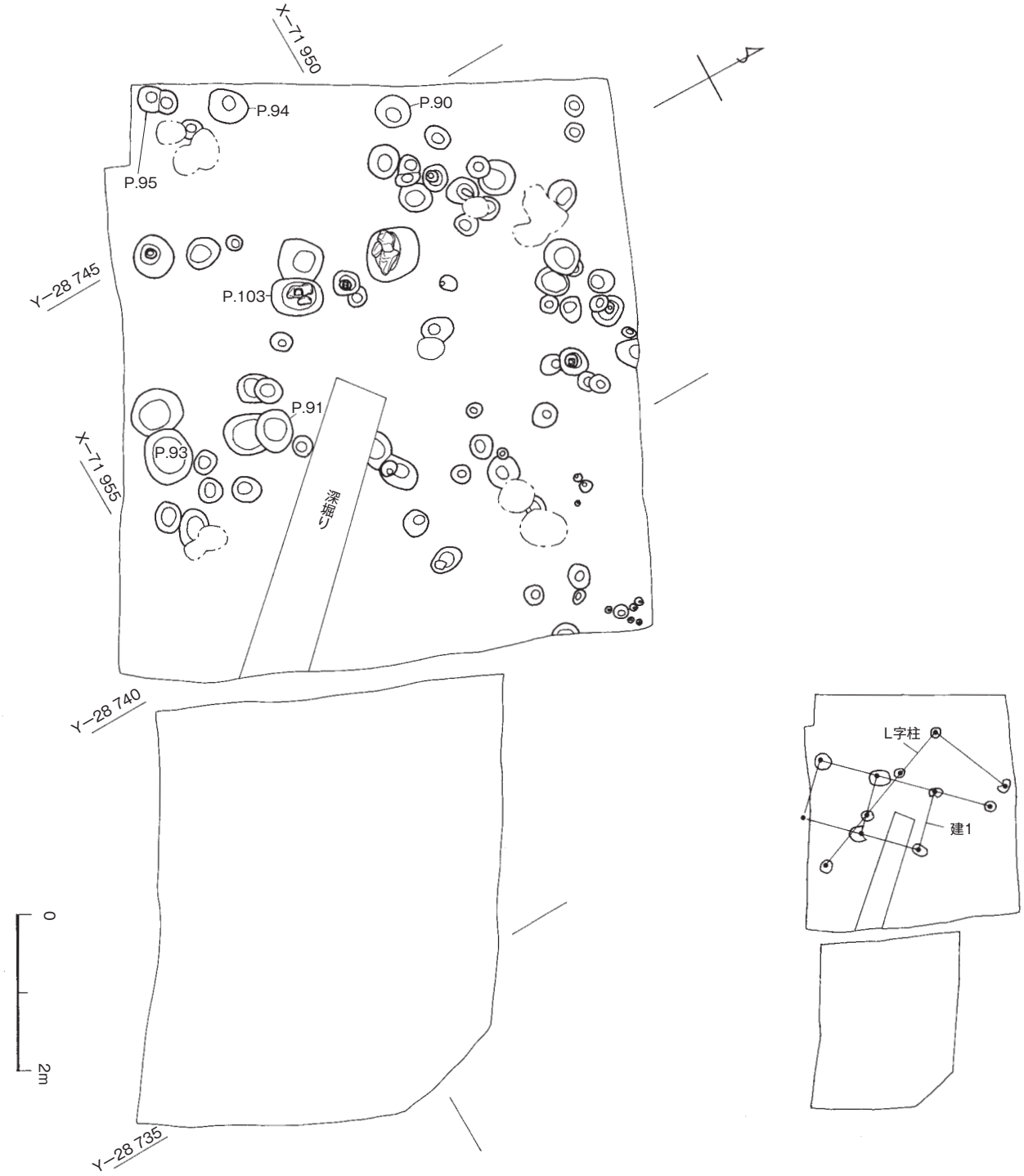


図14　Ⅲ面遺構全図

土坑８（図13）

位置：X(－71 949.89)～－(71 952.23)　Y(－28 745.77)～(－28 746.94)　**規模**：東西(69cm)×南北(263cm)×深さ17cm（底面高8.65ｍ）　**平面形**：隅丸長方形または長楕円形　**断面形**：浅皿形　**主軸方位**：N－34°－E　**重複関係**：P.80に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種中型（13）・鞴羽口（14）・台石（15）

特記事項：西側及び南側が調査区外のため実際の大きさ、性格ともに不明。15の台石は図９－３と同様のもの。

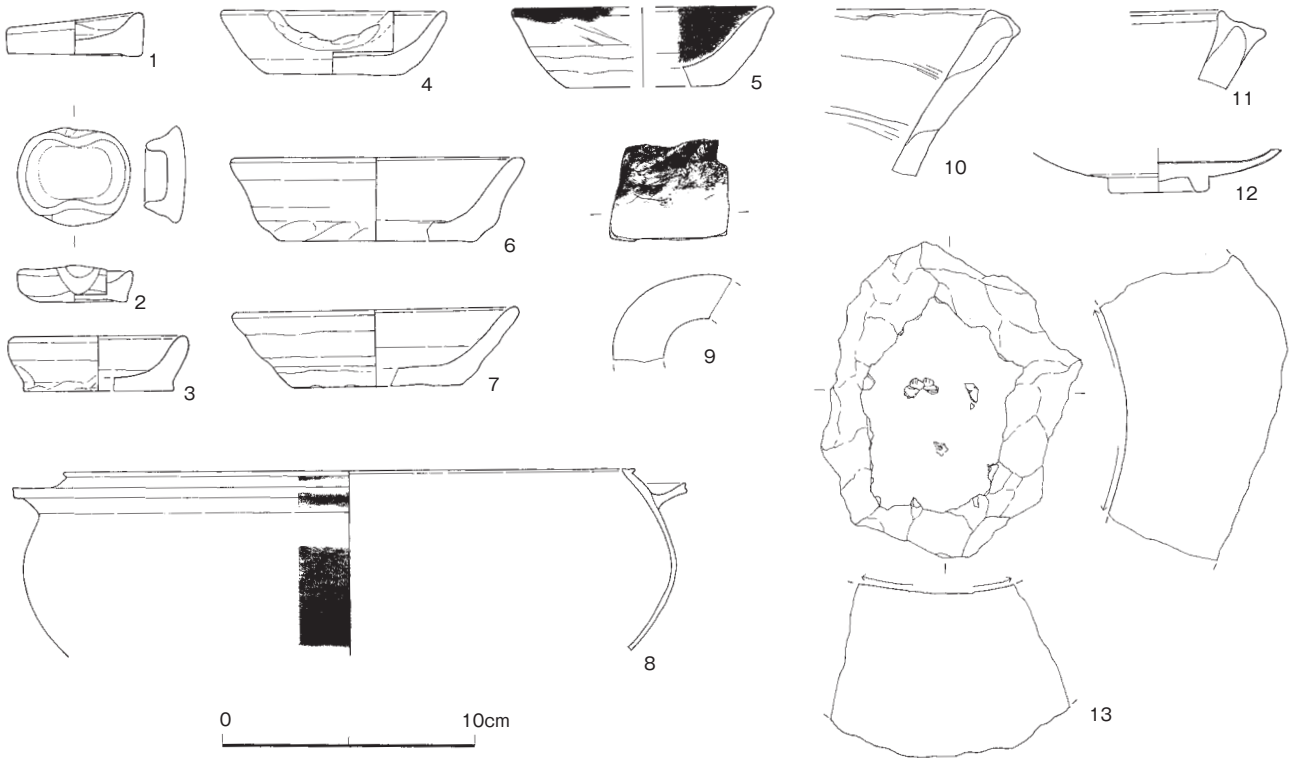


図15　Ⅲ面包含層出土遺物

Ⅱ面下層小穴出土遺物（図13）

(P.77) 土師器皿Ｒ種大型（16）・(P.112) 土師器皿Ｒ種中型（17）・(P.124) 鞴羽口（18）

３．Ⅲ面

面の概要（図14・15）

検出高：8.22ｍ　**面構成土**：暗灰褐色粘質土　**検出遺構**：建物１棟・Ｌ字柱穴列１列・小穴81穴（建物１棟、Ｌ字柱穴列１列含む）　**Ⅲ面包含層出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１～３）・土師器皿Ｒ種中型（４・５）・土師器皿Ｒ種大型（６・７）・伊勢系鍔鍋（８）・鞴羽口（９）・常滑片口鉢Ⅱ類（10・11）・白磁皿（12）・石皿（13）　**特記事項**：12の白磁は15世紀後半のもの。13は大型の石皿の破片か。

建物１（図16）

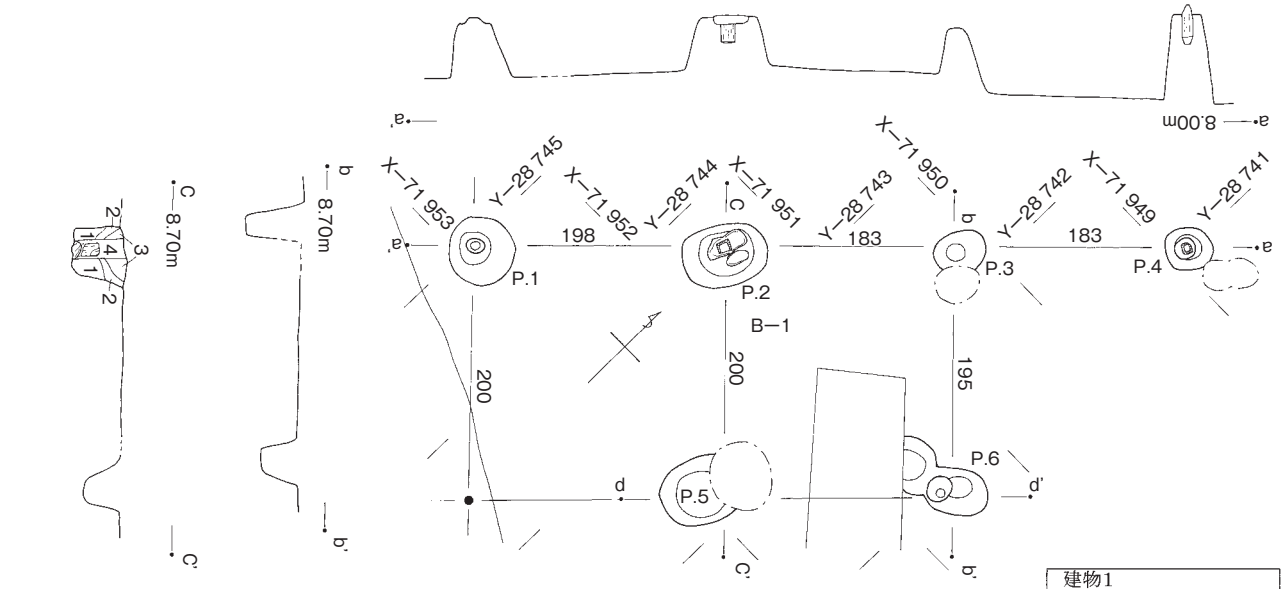
位置：X（－71 948.68）～（－71 944.34）　Y－（28 740.65）～（－28 745.18）　**規模**：東西１間，2.32ｍ×南北３間，6.17ｍ　**主軸方位**：N－44°－E　**重複関係**：Ｌ字柱穴列と重なる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：柱間は安定しないが、柱穴が並んだので建物として提示した。P.2では礎石にのる柱根が確認された。

Ｌ字柱穴列（図16）

位置：X（－71 947.92）～（－71 954.60）　Y（－28 741.16）～－28 744.12　**規模**：東西１間，3.16ｍ×南北４間，5.97ｍ　**主軸方位**：N－24°－W　**重複関係**：建物１と重なる　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：建物１とは軸方位を完全に異にする。切合いが不明なため前後関係は不明。

Ⅲ面小穴出土遺物（図16）

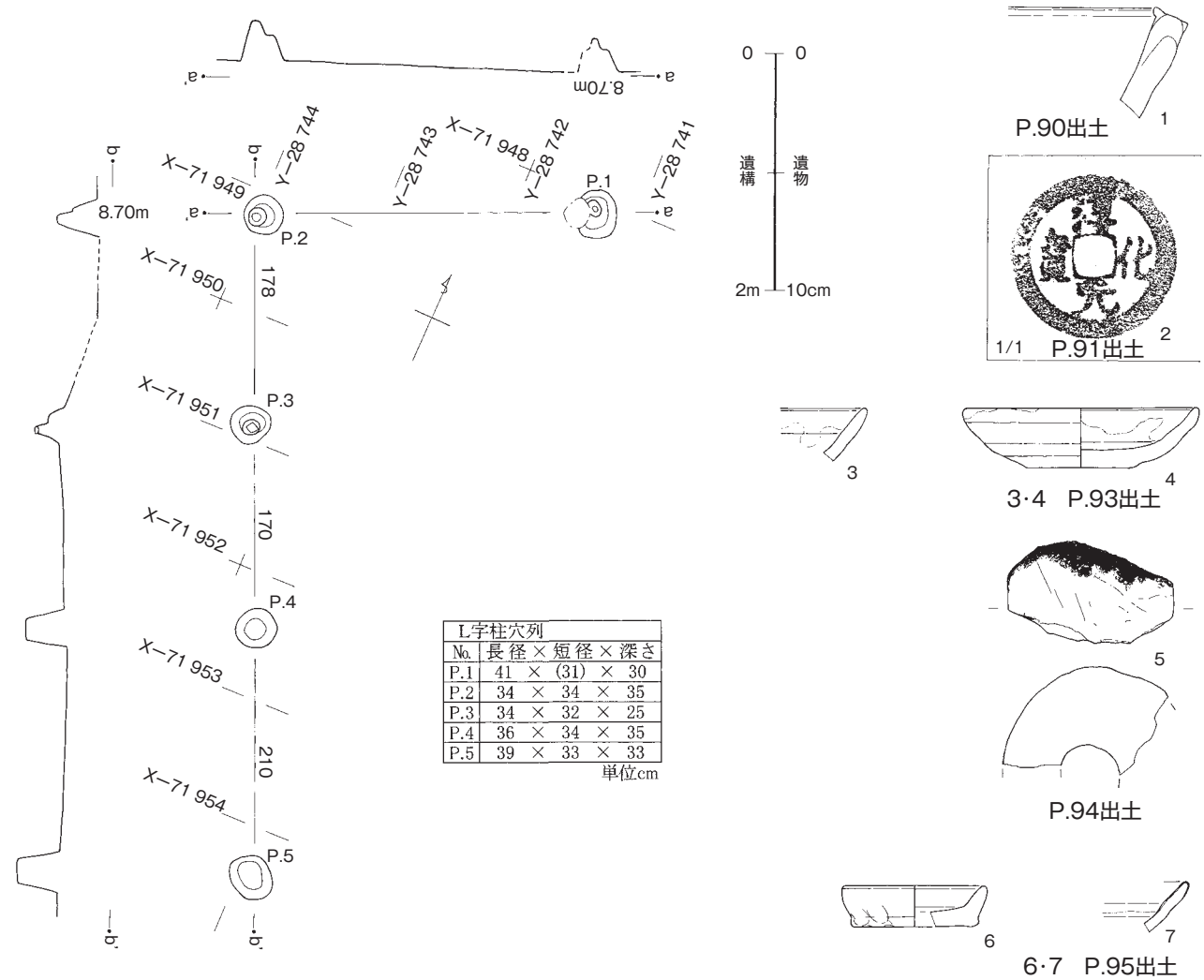
(P.90) 常滑片口鉢Ⅱ類（１）・(P.91) 淳化元宝（２）・(P.93) 瀬戸縁釉小皿（３・４）・(P.94) 鞴羽口（５）・(P.95) 土師器皿Ｒ種小型（６）・瀬戸縁釉小皿（７）



1. 青灰褐色粘質土　粘性強、締まりやや弱、泥岩小片、少量の炭化物含む
2. 茶褐色粘質土　粘性強、締まりやや弱、泥岩粒、少量の炭化物含む
3. 黄茶色弱粘質土　粘性弱、締まり強、泥岩小片、少量の炭化物含む
4. 茶褐色土　粘性強、締まり極弱、泥岩粒、少量の炭化物含む

建物1						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	53	×	52	×	48
P.2	68	×	48	×	41
P.3	41	×	35	×	50
P.4	38	×	34	×	71
P.5	51	×	37	×	32
P.6	(64)	×	53	×	30

単位cm



L字柱穴列						
No.	長径	×	短径	×	深さ
P.1	41	×	(31)	×	30
P.2	34	×	34	×	35
P.3	34	×	32	×	25
P.4	36	×	34	×	35
P.5	39	×	33	×	33

単位cm

図16　建物1・L字柱穴列、Ⅲ面小穴出土遺物

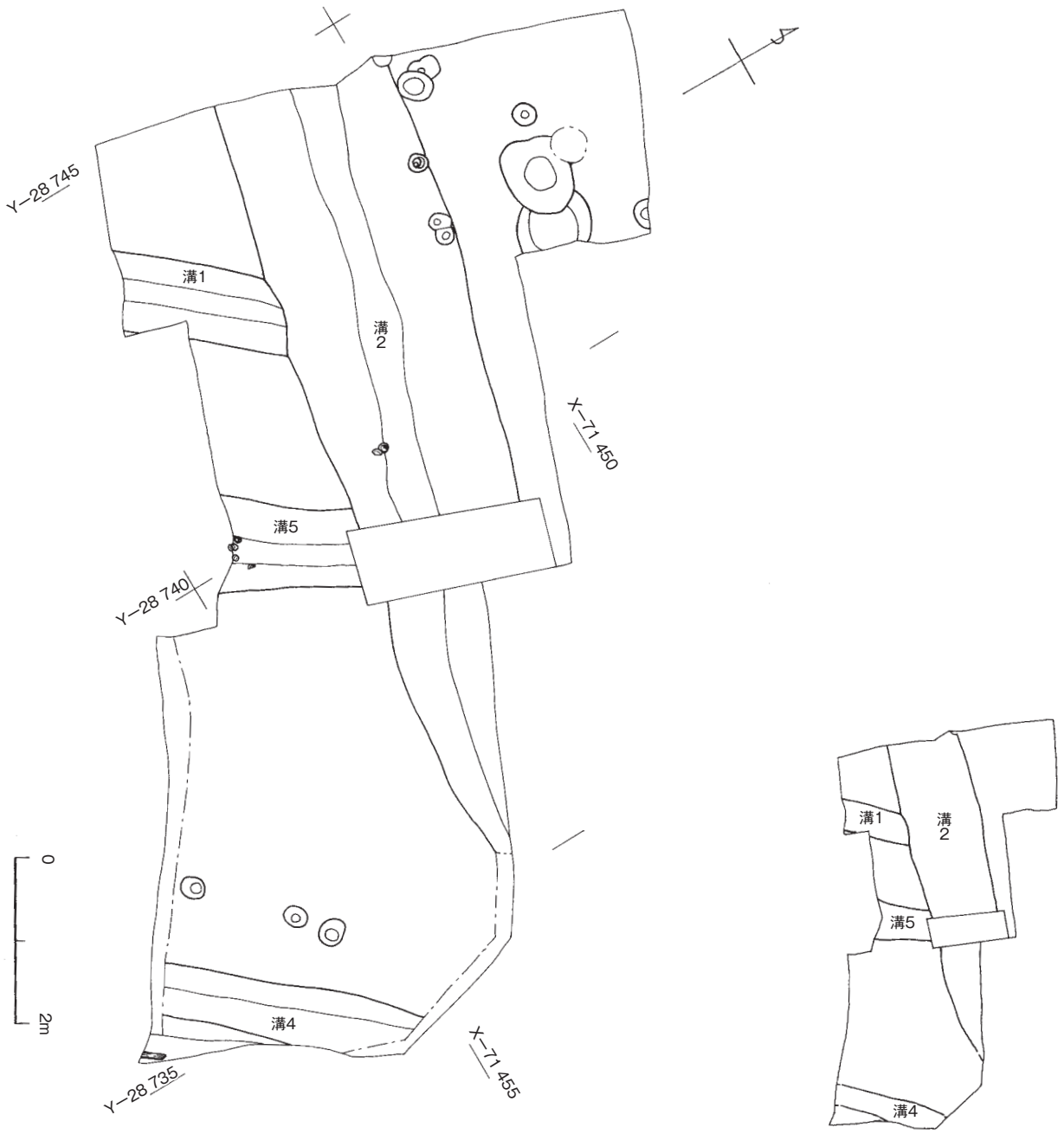


図17　Ⅳ面遺構全図

4．Ⅳ面

面の概要（図17・18）

検出高：8.10 ～ 8.20 m　**面構成土**：黒褐色強粘質土　**検出遺構**：溝４条・小穴12穴　**Ⅳ面包含層出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１～３・５～７）・土師器皿Ｒ種中型（４・８・９）・伊勢系鍔鍋（10）・鞴羽口（11・12）・常滑片口鉢Ⅱ類（13・14）・瀬戸縁釉小皿（15）・不明石製品（16）・箆状木製品（17）・不明木製品（18）・円盤状木製品（19）・加工骨（20）

溝２（図19・20）

位置：X − 71 949.70 ～ − 71 953.43　Y(− 28 335.20) ～ (− 28 344.92)　**断面形**：逆台形　**規模**：幅2.40 m × 長さ（9.87 m）× 深さ 0.85 m　**主軸方位**：N − 77° − W　**流下方向**：西→東　**出土遺物**：土師器皿Ｒ

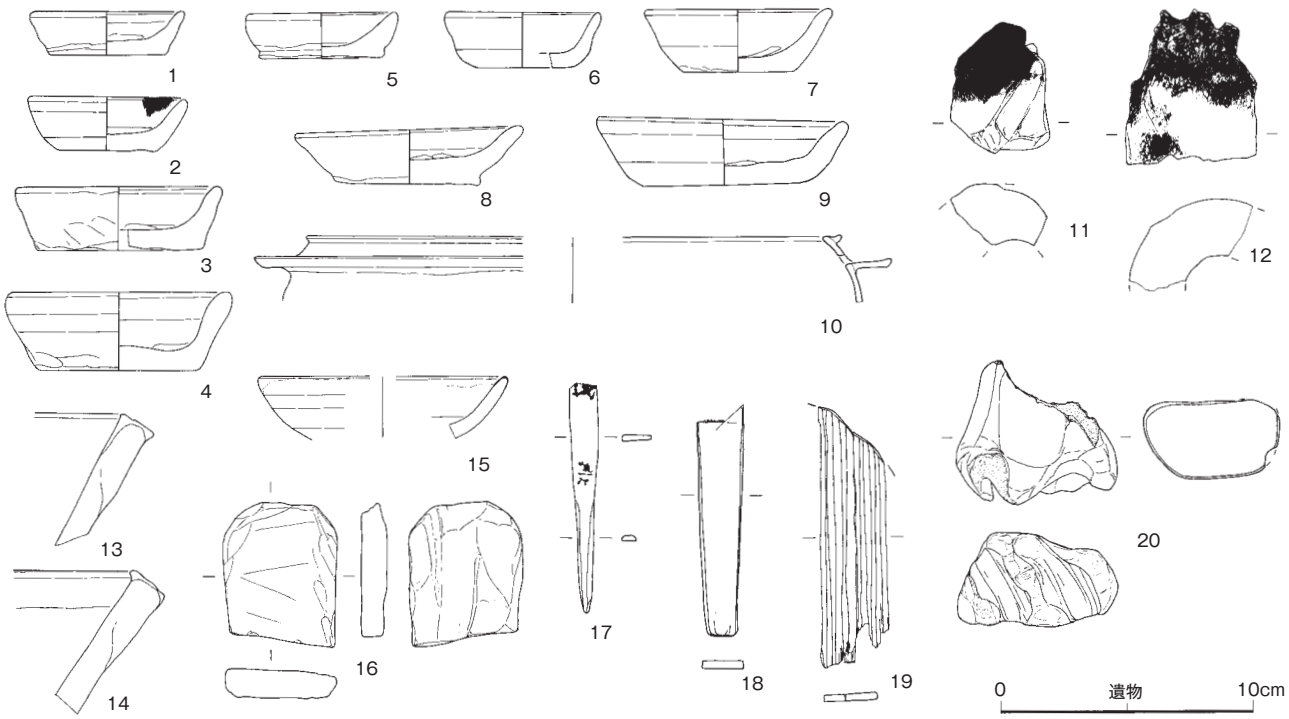


図18　Ⅳ面包含層出土遺物

種小型（1～5）・土師器皿R種中型（6～10）土師器皿R種大型（11～13）・内耳土鍋（14）・鞴羽口（15）・瓦器香炉（16）・常滑甕（17・18）・常滑片口鉢Ⅱ類（19）・瀬戸美濃擂鉢（20～22）・摩耗陶片（23・24）・瀬戸縁釉小皿（25）・砥石荒砥（26）・棒状木製品（27）　**特記事項**：東西に延びる溝。山際に沿って伸びる溝と考えられる。14の内耳土鍋出土例は市内でまだ数点しかない。16の瓦器香炉は米町遺跡(二丁目2308番1地点『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告17（第2分冊）』）に類例が見られる。22の瀬戸美濃擂鉢は大窯第1段階あたりのもの。

溝1（図21）

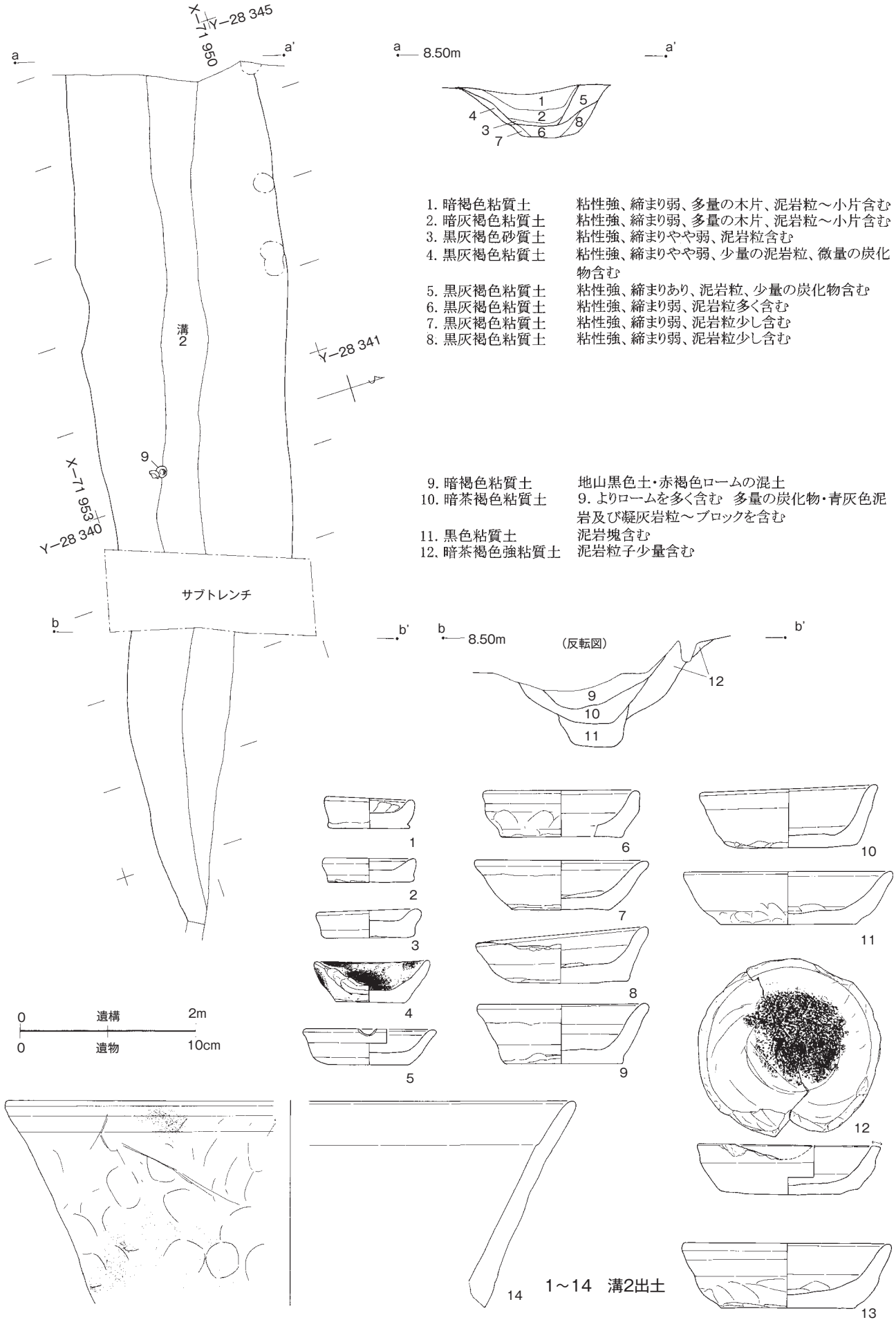
位置：X－71 952.33～(－71 954.17)　Y－28 741.85～(－28 744.08)　**断面形**：漏斗形　**規模**：幅0.97 m×長さ（2.02 m）×深さ0.78 m　**主軸方位**：N－42°－E　**流下方向**：北→南？　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。

溝4（図21）

位置：X(－71 950.33)～(－71 953.59)　Y(－28 733.94)～(－28 736.32)　**断面形**：逆台形・深皿形　**規模**：幅（1.03 m）×長さ（3.25 m）×深さ（0.65）　**主軸方位**：N－43°－E　**流下方向**：北→南？　**出土遺物**：瀬戸美濃擂鉢（1）・青花小皿（2）・備前擂鉢（3）・産地不明陶器大皿（4）　**特記事項**：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。1の擂鉢は大窯第3段階。

溝5（図21）

位置：X（－71 951.85）～（－71 953.79）　Y（－28 738.94）～(－28 740.85)　**断面形**：逆台形　**規模**：幅1.21 m×長さ（1.78 m）×深さ0.65 m　**主軸方位**：N－32°－E　**流下方向**：南→北？　**出土遺物**：土師器皿R種小型（5～6）・土師器皿R種中型（7）・土師器皿R種大型（8）・木地皿（9）・使用痕ある石片(10)　**特記事項**：溝2に流れ込んでいると考えたいが、検出範囲が狭いため正確な流下方向は不明。10は大きさ、形状、摩耗箇所から考えて礎石の可能性もある。



1. 暗褐色粘質土　粘性強、締まり弱、多量の木片、泥岩粒～小片含む
2. 暗灰褐色粘質土　粘性強、締まり弱、多量の木片、泥岩粒～小片含む
3. 黒灰褐色砂質土　粘性強、締まりやや弱、泥岩粒含む
4. 黒灰褐色粘質土　粘性強、締まりやや弱、少量の泥岩粒、微量の炭化物含む
5. 黒灰褐色粘質土　粘性強、締まりあり、泥岩粒、少量の炭化物含む
6. 黒灰褐色粘質土　粘性強、締まり弱、泥岩粒多く含む
7. 黒灰褐色粘質土　粘性強、締まり弱、泥岩粒少し含む
8. 黒灰褐色粘質土　粘性強、締まり弱、泥岩粒少し含む

9. 暗褐色粘質土　地山黒色土・赤褐色ロームの混土
10. 暗茶褐色粘質土　9. よりロームを多く含む　多量の炭化物・青灰色泥岩及び凝灰岩粒～ブロックを含む
11. 黒色粘質土　泥岩塊含む
12. 暗茶褐色強粘質土　泥岩粒子少量含む

図19　溝2、同出土遺物

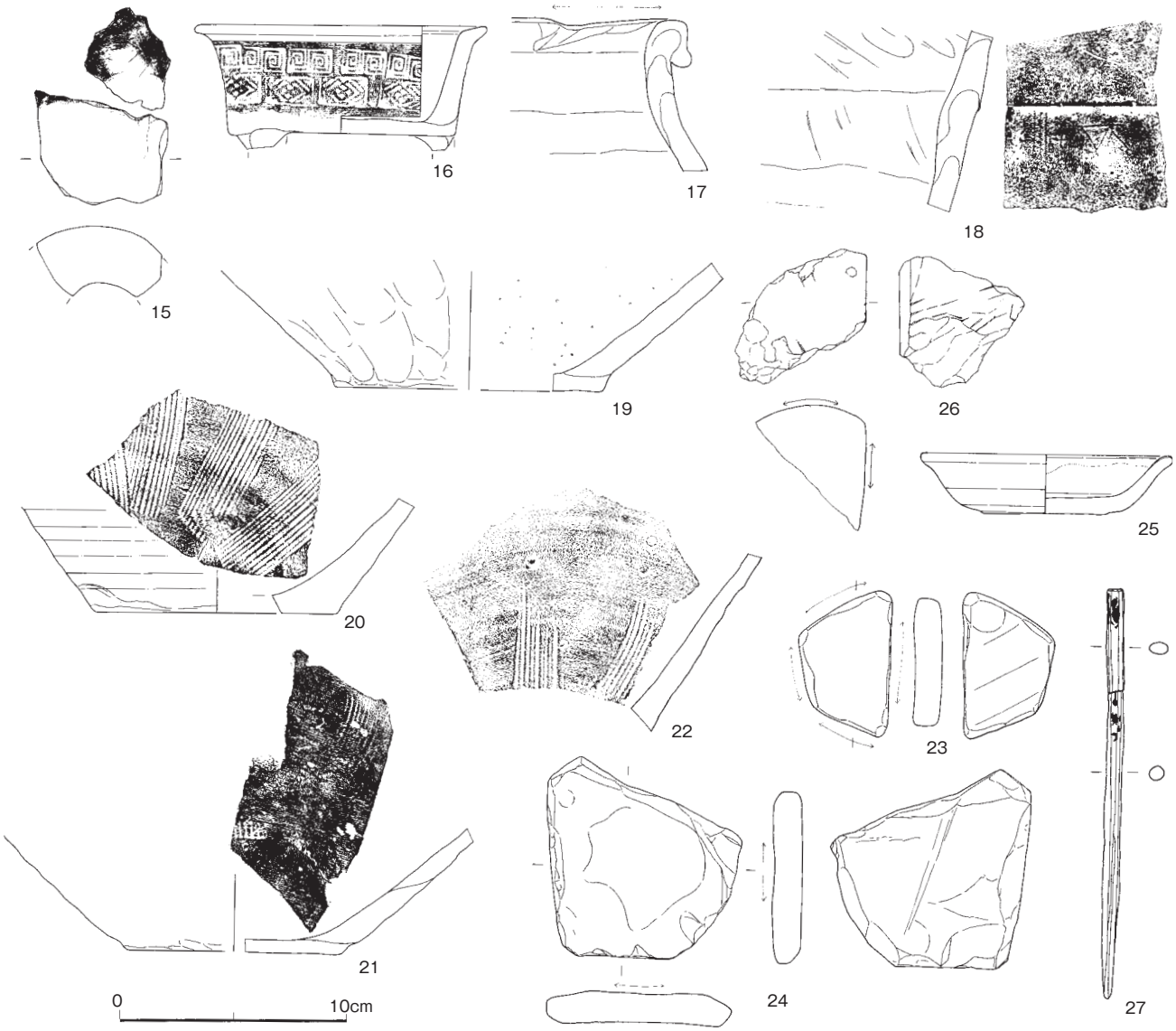
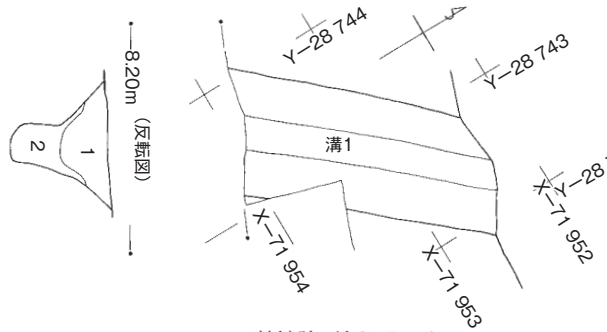
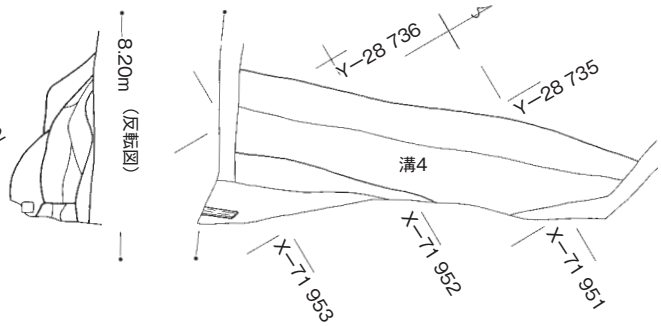


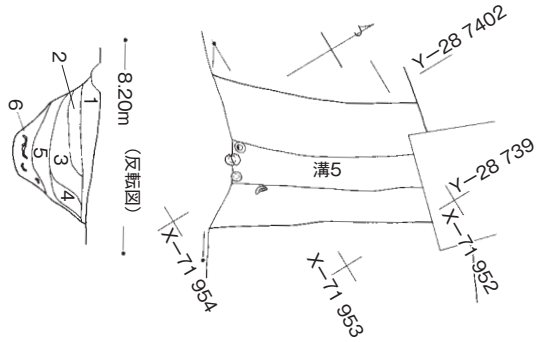
図20　溝２出土遺物（２）



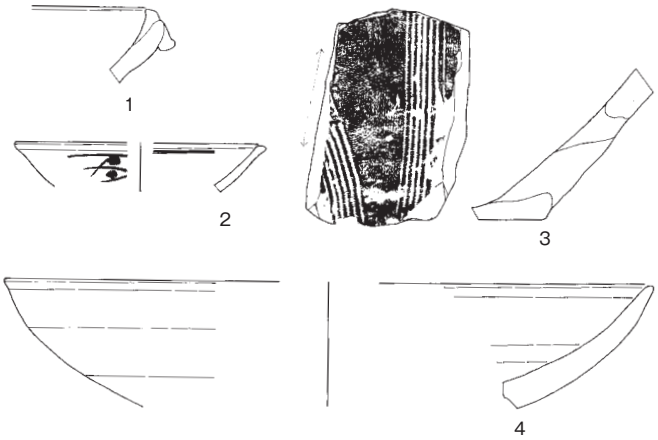
1. 暗茶褐色腐植土　粘性強、締まり弱、多量の木片、泥岩小片、少量の炭化物含む
2. 暗灰褐色強粘質土　粘性強、締まり弱、細かい木片・火山灰と思われる物質含む



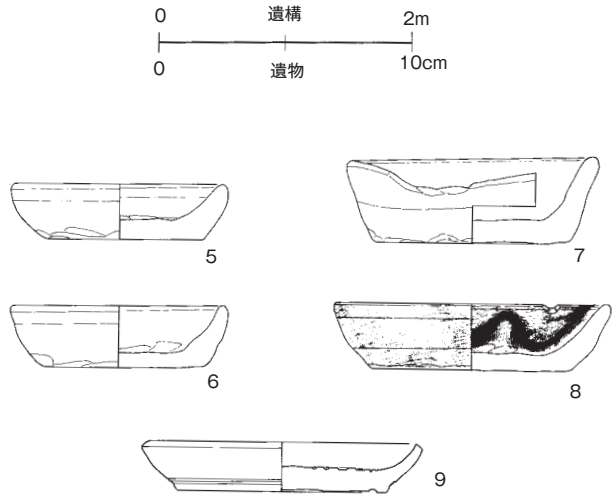
1. 暗青灰色粘質土　2〜4cmの泥岩片少量ふくむ
2. 泥岩層　暗青灰色の拳大泥岩による地行層
3. 暗青灰色粘質土　混入物少ない
4. 暗青灰色粘質土　混入物少ない
5. 青灰色粘質土　泥岩多く含む
6. 暗茶褐色粘質土　混入物少ない
7. 暗青灰色砂質土　泥岩粒・砂粒含む
8. 暗青灰色粘質土　泥岩粒・砂粒含む
9. 暗灰色粘質土　炭化物含む
10. 黒褐色粘質土　炭化物・遺物含む

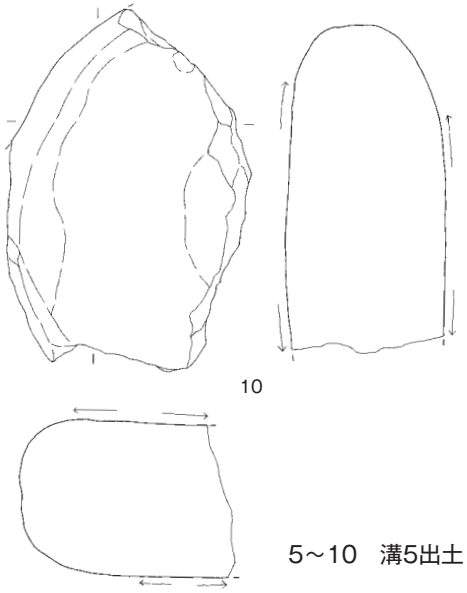


1. 暗茶色弱粘質土　粘性やや強、やや締まりあり、泥岩粒・炭化物・灰白色火山灰少量含む
2. 暗灰褐色弱粘質土　粘性やや強、締まり弱、1〜3cmの泥岩小片含む　炭化物やや多し
3. 暗灰褐色弱粘質土　2に類似し、泥岩小片はやや多い
4. 暗灰色粘質土　粘性強、締まり弱、1〜5cmの泥岩小片少量、微量の炭化物含む
5. 暗茶褐色腐植土　粘性強、締まり弱、泥岩粒、微量の炭化物含む
6. 暗灰色粘質土　粘性強、締まり弱、1から5cmの泥岩小片やや多く含む　炭化物含む



1〜4　溝4出土





5〜10　溝5出土

図21　溝1・4・5、同出土遺物

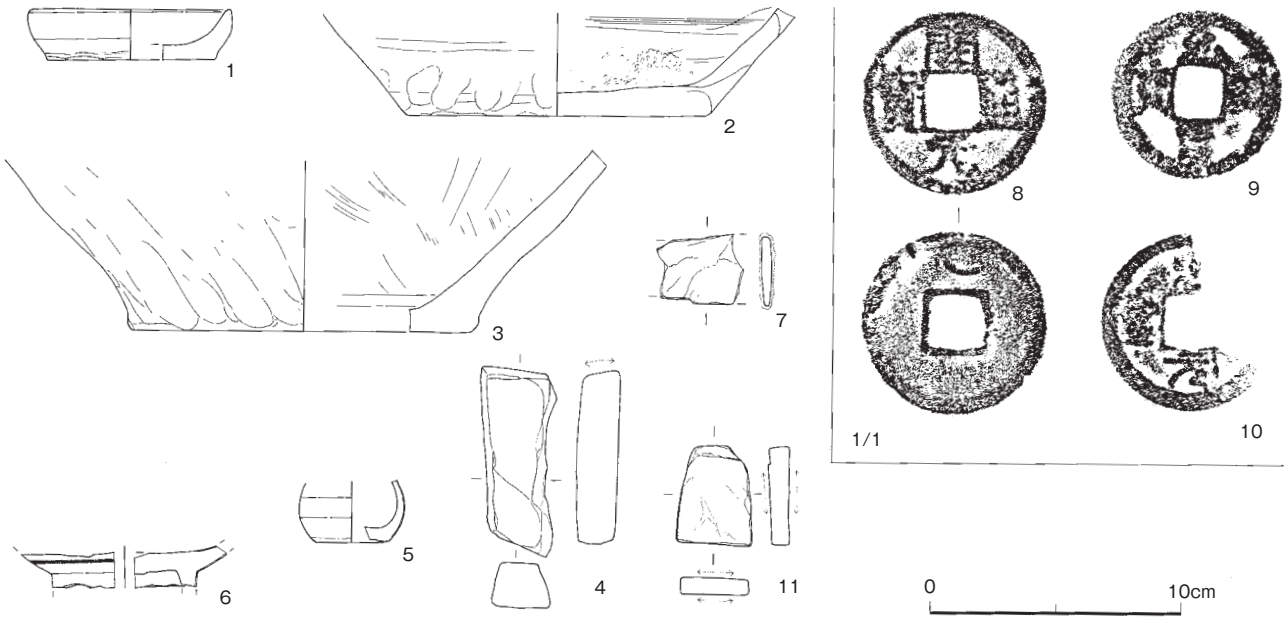


図22　遺構外出土遺物

遺構外採集遺物（図22）

土師器皿Ｒ種小型（１）・瀬戸大平鉢（２）・常滑片口鉢Ⅱ類（３）・摩耗陶片（４）・伊万里仏華瓶（５）・舶載施釉陶器碗（６）・不明鉄製品（７）・開元通宝（８）・銭種不明（９・10）・砥石中砥（11）

（沖元）

表１　出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図８－１	Ⅰ面	土師器皿 R種　大型	口径（9.8）cm　底径（7.6）cm　器高2.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土　やや粗土
2	Ⅰ面	土器質 焙烙	口縁部片　方型になる　胎土は淡橙色、赤色粒・砂粒・白色粒含む砂質土
3	Ⅰ面	砥石	残存長（6.5）cm　残存幅（5.3）cm　最大厚（2.7）cm　淡褐色　きめ細かく堅い　周辺が刃状に薄い　表面は滑らかで、擦過痕あり
4	Ⅰ面～Ⅱ面上層	土師器皿 R種　小型	口径6.7cm　底径4.5cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む　口縁部の一部を打ち欠く
5	Ⅰ面～Ⅱ面上層	渥美 甕	胴部片　胎土は灰色、緻密土　叩き痕あり　断面の２辺が磨耗
6	Ⅰ面～Ⅱ面上層	瀬戸 卸目付大皿	口縁部片　ロクロ成形　胎土は黄灰色、砂粒を含む　灰釉漬け掛け
7	Ⅰ面～Ⅱ面上層	瀬戸 緑釉小皿	口径（9.6）cm　底径（4.5）cm　器高2.5cm　ロクロ成形　体部外面下半回転ヘラ削り　胎土は淡黄褐色、砂粒多めに含みやや粗　口唇部内・外面に白濁した灰釉ヶ掛かる
8	Ⅰ面～Ⅱ面上層	瀬戸美濃 碗	口縁部片　ロクロ成形　胎土は淡灰褐色、砂粒・礫含む　茶褐釉
9	Ⅰ面～Ⅱ面上層	瀬戸美濃 腰折皿	口径（10.7）cm　底径4.8cm　器高2.3cm　ロクロ成形　削り出し高台　外面下半回転ヘラ削り　胎土は淡黄褐色、砂粒・粘土粒含みやや粗　内面と外面下位まで灰釉やや厚く掛かる　古瀬戸後Ⅳ
10	Ⅰ面～Ⅱ面上層	瀬戸美濃 丸皿	口径（10.8）cm　底径7.0cm　器高2.4cm　ロクロ成形　外底部削り出し　胎土は淡灰褐色、白色粒含みやや粗　全体に長石釉が薄く掛かり、細かく貫入が入る　内底面に三箇所、外底面に一箇所の目跡　登窯第１小期
図９－１	柱穴列1P.7	瀬戸美濃 魚形皿	"縁部分　胎土は黄灰色、白色粒・砂粒含みやや粗　全体に透明感のある灰釉掛かり、貫入が入る 形状は魚形になると思われ、口唇部には串状工具による沈線がはいる　大窯第３段階後半あたりか"
2	柱穴列1P.8	土師器皿 R種　大型	口径（12.0）cm　底径（8.0）cm　器高3.4cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土　やや粗土
3	柱穴列3P.6	土師器皿 R種　極小型	口径（4.9）cm　底径（4.8）cm　器高1.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	柱穴列4P.8	土師器皿 R種　極小型	口径（5.5）cm　底径（4.0）cm　器高1.6cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含み、やや粗土
5	柱穴列4P.8	土師器皿 R種　小型	口径（7.8）cm　底径（6.0）cm　器高2.2cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
図11－１	Ⅰ面　P.7	土師器皿 R種　小型	口径（9.7）cm　底径（6.2）cm　器高2.5cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底面ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土　外底面に十字の陰刻あり
2	Ⅰ面　P.7	瀬戸美濃 小皿	口径（6.4）cm　ロクロ成形　胎土は灰黄色、砂粒含みやや粗　内側に艶のない茶褐釉が掛かる 外面の釉薬は摩耗によりほとんど残存しない
3	Ⅰ面　P.9	台石	縦11.1cm　横9.4cm　厚さ2.4cm　平たい円形　上面の中央が磨耗し滑らかになっている 群馬県の荒砥宮川遺跡の７世紀前半代のものに類例がみられる"
4	Ⅰ面　P.11	白磁 皿	底径（4.0）cm　ロクロ成形　胎土は淡黄灰色　内面に淡灰色の釉、貫入あり　削り出し高台、畳み付き部分斜めに削りとっている　15世紀
5	Ⅰ面　P.11	土師器皿 R種　中型	口径（9.7）cm　底径（6.9）cm　器高3.0cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・粘土粒を含む弱砂質土やや粗土
6	Ⅰ面　P.16	刀子	遺存長（3.5）cm　最大幅（2.2）cm　最大厚（0.2）cm
7	Ⅰ面　P.27	不明石製品	遺存長（2.7）cm　幅3.3cm　最大厚（1.5）cm　灰オリーブ色　砂粒多く含むが堅い　蒲鉾状に削られている
8	Ⅰ面　P.38	土師器皿 R種　小型	口径（9.0）cm　底径（6.9）cm　器高2.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土　やや粗土
9	Ⅰ面　P.53	土師器皿 R種　中型	口径（9.7）cm　底径（6.0）cm　器高2.9cm　回転ロクロ　底面糸切り　板状圧痕あり　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土　やや粗土　薄く煤付着
10	Ⅰ面　P.55	使用痕ある 石片	遺存長（5.6）cm　遺存幅（6.4）cm　最大厚（3.2）cm　暗赤褐色　堅緻　表面は全体に滑らかで、中央がかすかに窪み炭化している
図13－１	Ⅱ面下層包含層	土師器皿 R種　小型	口径（5.7）cm　底径（5.0）cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
2	Ⅱ面下層包含層	土師器皿 R種　小型	口径（8.0）cm　底径（5.4）cm　器高2.4cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む砂質土　やや粗土
3	Ⅱ面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口径（11.2）cm　底径4.5cm　器高2.4cm　ロクロ成形　削り出し高台　外面下半回転ヘラ削り　胎土は灰黄色、砂粒・礫含みやや粗　内面と外面途中まで灰釉やや厚く斑に掛かる　内底面に大きい目跡あり、粘土屑も付着　口縁部の一部を打ち欠いている　古瀬戸後Ⅳ
4	Ⅱ面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口径（11.5）cm　底径（5.0）cm　器高2.5cm　ロクロ成形　削り出し高台　外面下半回転ヘラ削り　胎土は灰黄色、砂粒・礫含む　内面と外面下位まで灰釉掛かる　古瀬戸後Ⅳ
5	Ⅱ面下層包含層	瀬戸美濃 口広有耳壺	口径（16.1）cm　ロクロ成形　胎土は灰黄色、砂粒・礫含みやや粗土　外面と外面口縁部下まで鉄釉掛かる　口唇部内側よりに重ね焼きの痕あり　大窯第１段階あたりか
6	Ⅱ面下層包含層	瀬戸美濃 腰折皿	口縁部片　ロクロ成形　胎土は灰黄色　灰釉掛かる
7	Ⅱ面下層包含層	竜泉窯系 青磁碗	底部片　底径（5.6）cm　ロクロ成形　削り出し高台　素地は淡灰色、 釉は灰緑色、半透明、外面は高台外側まで掛る　内底面周囲を故意に打ち欠く 15世紀初頭前後
8	Ⅱ面下層包含層	皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　楷書
9	Ⅱ面下層包含層	鉄釘	残存長（5.2）cm　幅0.3cm　厚0.4cm　重量2.6ｇ
10	Ⅱ面下層包含層	砥石 仕上砥	縦2.5cm　横3.0cm　高さ1.8cm　淡緑灰色　砥面３～４面　特に底面が滑らかに磨耗し、硯の研磨に使用したものと思われる　鳴滝産
11	Ⅱ面下層包含層	砥石 中砥	遺存長（10.0）cm　幅2.1cm　厚2.0cm　淡緑灰色凝灰岩　砥面４面　上野産　近世のものか？
12	Ⅱ面下層	土師器皿 R種　小型	口径5.1cm　底径5.0cm　器高1.4cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・礫・雲母を含む粗土
13	土坑８	土師器皿 R種　小型	口径9.6cm　底径6.4cm　器高2.9cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫・雲母を含むやや粗土　口縁部に油煤付着
14	土坑８	鞴　羽口	胎土は橙色～灰橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子・雲母を含む粗土　断面の一辺が磨耗
15	土坑８	台石	長10.6cm　幅8.6cm　厚3.5cm　灰色　扁平な楕円型　両面とも中央が滑らかに磨耗　図９－３と同様のもの
16	Ⅱ面　P.77	土師器皿 R種　大型	口径（11.9）cm　底径（7.5）cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　板状圧痕あり、内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む
17	Ⅱ面　P.112	土師器皿 R種　中型	口径（10.5）cm　底径（8.0）cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・礫・雲母を含む　口縁部から外側にかけて油煤付着
18	Ⅱ面　P.124	鞴　羽口	胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含むやや粗土　外側に厚く鉱滓溶着

表２　出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15－１	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径5.0cm　底径5.2cm　器高1.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含む
2	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径4.5cm　底径3.8cm　器高1.5cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・礫を含む粗土　耳皿（側面二か所内側につぶす）
3	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（6.6）cm　底径（5.8）cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は橙色、多量の砂粒・雲母・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
4	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径8.6cm　底径5.5cm　器高2.5cm　回転ロクロ　底面糸切り、薄く板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む弱砂質土粗土　口縁部を半月型に打ち欠く
5	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径（10.0）cm　底径（6.4）cm　器高3.1cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む弱砂質土粗土　口縁部から内側にかけて厚く油煤付着
6	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.4）cm　底径（8.0）cm　器高3.3cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、多量の砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫・雲母・泥岩粒を含む粗土
7	Ⅲ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（10.9）cm　底径（6.7）cm　器高3.0cm　回転ロクロ　底面糸切り　スノコ痕あり　内底面ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・礫を含む粗土
8	Ⅲ面包含層	伊勢系 鍔鍋	口径（22）cm　胎土は淡橙色、胎芯暗灰色　微砂・赤色粒子・雲母含み、硬く焼き締まる　口縁部下に径0.4cmの小孔貫通　鍔下面～胴部外側に煤付着
9	Ⅲ面包含層	鞴　羽口	胎土は橙色～灰橙色、砂粒・赤色粒子を含むやや粗土　外側に厚く鉱滓溶着
10	Ⅲ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は橙色、砂粒・長石粒・石英粒多く含む　内側下位は使用により磨耗
11	Ⅲ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は橙色、砂粒・長石粒・石英粒含む
12	Ⅲ面包含層	白磁 皿	底部片　3.8cm　ロクロ成形　削り出し高台　胎土は灰白色、緻密　釉は淡い水色、不透明で内側と外側高台外1cm位まで掛る　15世紀後半の船載品か
13	Ⅲ面包含層	石皿	遺存長（12.0）cm　遺存幅（9.8）cm　最大厚（6.6）cm　灰色　内側は滑らかな凸面をす
図16－１	Ⅲ面　P.90	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は橙色、器表は茶色　砂粒・長石粒・礫含む
2	Ⅲ面　P.91	淳化元寶	初鋳990年　北宋　楷書
3	Ⅲ面　P.93	瀬戸 縁釉小皿	口縁部片　ロクロ成形　胎土は黄灰色　口縁部内側に灰釉掛る
4	Ⅲ面　P.93	瀬戸 縁釉小皿	口径（9.6）cm　底径（4.5）cm　器高2.5cm　ロクロ成形　外底面糸切　胎土は灰黄色、砂粒・礫含みやや粗い　口縁部内側に灰釉掛る　内底面は滑らかに磨耗　外面も摩耗しており釉薬が剥落した可能性もある
5	Ⅲ面　P.94	鞴　羽口	胎土は橙色～灰色、砂粒・赤色粒子・礫を含む粗土　外側に鉱滓溶着
6	Ⅲ面　P.95	土師器皿 R種 小型	口径（5.7）cm　底径（5.0）cm　器高1.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母を含み、やや粗土
7	Ⅲ面　P.95	瀬戸 縁釉小皿	口縁部片　ロクロ成形　胎土は黄灰色　口縁部に灰釉掛る
図18－１	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（5.9）cm　底径4.7cm　器高1.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
2	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径6.2cm　底径4.0cm　器高2.1cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・泥岩粒を含む　口縁部に油煤付着
3	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.9）cm　底径（6.6）cm　器高2.5cm　回転ロクロ　底面糸切り、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は黄灰色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む粗土
4	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径（8.6）cm　底径6.4cm　器高3．1cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底面ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（5.8）cm　底径（4.7）cm　器高1.8cm　回転ロクロ　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（6.0）cm　底径（4.0）cm　器高2.2cm　回転ロクロ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒を含む
7	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.2）cm　底径（4.5）cm　器高2.5cm　回転ロクロ　底面糸切、薄く板状圧痕あり　胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨芯少し含む
8	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径5.1cm　底径4.9cm　器高1.4cm　回転ロクロ　底面糸切、板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨芯・雲母含む
9	Ⅳ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径（9.5）cm　底径6.2cm　器高2.6cm　回転ロクロ　底面糸切、 内底部ナデ　胎土は灰黄色、砂粒・海綿骨芯・雲母含む
10	Ⅳ面包含層	伊勢系 鍔鍋	口径（21.0）cm　胎土は灰黄色　少量の雲母含み、硬く焼き締まる　口縁部下に径0.6cmの小孔貫通　鍔下面～胴部外側に煤付着
11	Ⅳ面包含層	鞴　羽口	胎土は淡橙色、砂粒・白色子を含むやや粗土　外側に鉱滓溶着
12	Ⅳ面包含層	鞴　羽口	胎土は淡橙色～灰橙色、砂粒・赤色粒子を含むやや粗土　外側に厚く鉱滓溶着
13	Ⅳ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は淡橙色、砂粒・白色粒・雲母含みやや砂質
14	Ⅳ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　胎土は橙色、器表は茶色　砂粒・長石粒・礫含む　図10－１と同一個体か？
15	Ⅳ面包含層	瀬戸 縁釉小皿	口縁部片　口径（9.9）cm　ロクロ成形　胎土は黄灰色　口縁部に灰釉掛る
16	Ⅳ面包含層	不明石製品	長5.6cm　幅4.5cm　厚1.1cm　赤間ヶ石　製作途中のものか
17	Ⅳ面包含層	箆状木製品	遺存長（9.2）cm　幅1.15cm　厚0.2cm　漆付着
18	Ⅳ面包含層	不明木製品	遺存長（9.3）cm　最大幅（1.9）cm　厚0.3cm
19	Ⅳ面包含層	円盤状木製品	遺存長（10.5）cm　遺存幅（2.0）cm　厚0.3cm
20	Ⅳ面包含層	加工骨	遺存長（5.8）cm　最大幅6.4cm　最大厚3.7cm　大型獣（馬か？）四肢骨の関節部分　突部が磨耗
図19－１	溝２	土師器皿 R種　小型	口径5.2cm　底径4.6cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切、 内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
2	溝２	土師器皿 R種　小型	口径5.2cm　底径4.6cm　器高1.8cm　回転ロクロ　底面糸切、 内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
3	溝２	土師器皿 R種　小型	口径5.7cm　底径5.4cm　器高1.6cm　回転ロクロ　底面糸切、 内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・灰黒色ブロック・海綿骨芯・雲母含む
4	溝２	土師器皿 R種　小型	口径6.5cm　底径4.1cm　器高2.2cm　回転ロクロ　底面糸切、 内底部ナデ　胎土は淡橙色　全体が黒っぽく炭化し、内側には厚く黒灰色の物質が付着する　口唇部は平らに削られ、側面の一部は故意に打ち欠かれる
5	溝２	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.7cm　器高2.0cm　回転ロクロ　底面糸切　板状圧痕あり、 内底部ナデ　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む　口縁部を一か所小さく打ち欠く

表３　出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
6	溝２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径（8.8）cm　底径（6.8）cm　器高2.6cm　回転ロクロ　底面糸切　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母・気孔含む　口縁部を一か所小さく打ち欠く
7	溝２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径（9.8）cm　底径5．8cm　器高2.9cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・雲母含む
8	溝２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径9.4cm　底径6.7cm　器高2.8cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・雲母含むやや粗土
9	溝２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径9.5cm　底径6.7cm　器高3.5cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯・泥岩粒・雲母含む
10	溝２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径9.8cm　底径7.4cm　器高3.4cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は灰黄色、砂粒・海綿骨芯・気孔含む
11	溝２	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（11.8）cm　底径7.7cm　器高3.7cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は淡橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・気孔含む
12	溝２	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（10.3）cm　底径7.8cm　器高（3.8）cm　回転ロクロ　底面糸切　薄く板状圧痕あり　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯含む　全体に灰褐色を帯びる　内底部に漆と思われる黒色物質が付着する　口縁部は平らに削られている
13	溝２	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（11.8）cm　底径（7.7）cm　器高3.7cm　回転ロクロ　底面糸切　内底部ナデ　胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・雲母含む
14	溝２	内耳土鍋	内耳部分は不明　口縁部から体部片　復元口径（32.3）cm　胎土は淡橙色、砂粒・白色粒子・雲母含む　内側は灰色を帯び、外側は煤付着　体部外面指頭痕
図20－15	溝２	鞴　羽口	胎土は淡橙色～橙色、砂粒・赤色粒子・気孔を含むやや粗土　外側に鉱滓溶着
16	溝２	瓦器 香炉	口径12.8cm　底径10.0cm　体部器高4.9cm　三カ所に脚貼付　胎土は灰橙色、砂粒・白色粒子・黒色粒子・雲母含む　器表は灰色を呈す　胴部外側は雷文・矩形の中に違菱文の押印が二層に巡る
17	溝２	常滑　甕	口縁部片　胎土は灰赤褐色、長石・石英粒を含む　口縁部上面は磨耗
18	溝２	常滑　甕	胴部片　胎土は灰色、長石・砂粒を含む　器表は茶色　外側に矩形枠内に不明文様の叩き目あり
19	溝２	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片　底径（12.0）cm　胎土は赤褐色、長石・石英・砂粒を含む　内側下位は使用により磨耗
20	溝２	瀬戸美濃 擂鉢	底部片　底径（10.8）cm　胎土は淡橙色、比較的精良　内外とも底面も含めて茶褐色の釉掛る　条線は11本
21	溝２	瀬戸美濃 擂鉢	底部片　底径（9.5）cm　外底部回転糸切り　胎土は黄灰色、気孔含む　内外とも底面も含めて暗茶褐色の釉掛る　条線は９本　内面は使用により激しく磨耗し、条線や釉ガ一部失われている
22	溝２	瀬戸美濃 擂鉢	胴部片　胎土は黄灰色、やや砂質で気孔含む　内外面とも暗茶褐色の釉掛る　条線は10本　内面下位は使用によりやや磨耗、条線や釉ガ一部失われている　大窯第１段階あたりか
23	溝２	磨耗陶片	常滑甕胴部片使用　縦6.5cm　横4.1cm　厚さ1.3cm　胎土は灰色、長石・砂粒含む　断面の3辺顕著に磨耗、１辺はやや磨耗
24	溝２	磨耗陶片	渥美甕胴部片使用　縦8.8cm　横8.5cm　厚さ0.8cm　胎土は灰色、白色粒子・灰黒色ブロック含む　器の表面と断面の４辺に磨耗いた部分がある
25	溝２	瀬戸 緑釉小皿	口径（10.8）cm　底径5.4cm　器高2.6cm　ロクロ成形　回転糸切　胎土は黄灰色、堅緻　口縁部に灰釉掛る　はさみ皿？内底面は滑らかに磨耗する
26	溝２	砥石　荒砥	遺存長（5.5）cm　遺存幅（5.3)cm　最大厚（5.0)cm　灰色　砥面２面残存　元は蒲鉾形の製品か　紀州大村
27	溝２	棒状木製品	長13.1cm　幅0.9cm　厚0.6cm　一端が尖る　漆状黒色物質付着
図21－１	溝４	瀬戸美濃 擂鉢	口縁部片　胎土は黄灰色、やや砂質　内外面とも茶褐色の釉掛る　大窯第３段階
2	溝４	青花 小皿	口縁部片　口径（10.0)cm　胎土は灰白色、堅緻　透明釉の下に藍色の模様が描かれている　漳州窯か
3	溝４	備前 擂鉢	底部片　胎土は灰色、白色粒子・灰黒色粒子含み、堅く焼き締まる　内面及び外側の一部、断面の一部が滑らかに磨耗　条線は７本
4	溝４	産地不明 陶器大皿	口径（26.0）cm　胎土は灰色、精良　器表は茶褐色　焼締陶器
5	溝５	土師器皿 Ｒ種　小型	口径8.4cm　底径6.5cm　器高2.1cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は黄灰色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・礫を含む
6	溝５	土師器皿 Ｒ種　小型	口径8.3cm　底径6.6cm　器高2.5cm　回転ロクロ　底面糸切り　薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は黄灰色、砂粒・黒色粒子・海綿骨針・雲母・礫を含む
7	溝５	土師器皿 Ｒ種　中型	口径9.7cm　底径7.8cm　器高3.4cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は黄灰色、砂粒・黒色粒子・海綿骨針・雲母・礫を含む　口縁部の一部を打ち欠く
8	溝５	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（10．8）cm　底径（7.5）cm　器高2.7cm　回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・雲母を含む　口縁部の一部を小さく打ち欠く　二次焼成により全体が灰黒色を呈し、内面にはさらにタール状の付着物あり
9	溝５	木地 皿	口径（10.6）cm　底径8.4cm　器高2.0cm　輪高台　轆轤目がよくでている
10	溝５	使用痕ある 石片	遺存長（13.8）cm　遺存幅（9.6）cm　厚6.1cm　灰色　扁平な丸石の一部と思われる　平らな二面には滑らかになった部分がある　礎石の可能性もある
図22－１	遺構外出土	土師器皿 Ｒ種　小型	口径（7.8）cm　底径（6.7）cm　器高2.0cm　回転ロクロ　底面糸切り　胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒礫を含む砂質土
2	遺構外出土	瀬戸 直縁大皿	底部片　底径（12.0）cm　ロクロ成形　胎土は黄灰色、砂粒・白色粒を含む　外側下位、内側は中位まで灰釉漬け掛け　内底面はやや滑らかに磨耗 外底部回転ヘラ削り
3	遺構外出土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片　底径（8.6）cm　胎土は赤褐色、長石・石英・砂粒を含む　　内面は良く使い込まれて滑らかである
4	遺構外出土	磨耗陶片	常滑甕胴部片使用　縦7.5cm　横3.0cm　厚さ1.8cm　器表面は暗赤褐色　胎土は赤褐色　長石片・石英片・小石片含む　１面がよく使い込まれて摩耗している　長軸が元は横位である
5	遺構外出土	伊万里 仏華瓶	胴部～底部片　素地は灰白色、堅緻　外側は底部近くまで淡い水色を帯びた不透明の釉が掛る
6	遺構外出土	舶載 施釉陶器碗	底部片　底径（5.7）cm　ロクロ成形　胎土は黄灰色、白っぽい粘土の大き目のブロック含む　高台の畳付き部分は破損　外側は青い絵付けのうえにたまご色の釉を施す　内底面は無釉、滑らかに磨耗　中国を含む南方産
7	遺構外出土	不明鉄製品	残存長（3.5）cm　最大幅2.8cm　厚さ0.25cm
8	遺構外出土	開元通寶	初鋳621年　唐　楷書　背文上月
9	遺構外出土	銭種不明	磨耗により
10	遺構外出土	銭種不明	欠損により
11	遺構外出土	砥石　中砥	残存長（3.9)cm　幅3.0cm　厚0.8cm　淡緑灰色　砥面２面　上野産

表４　出土遺物計量表

			Ⅰ面		Ⅰ面～Ⅱ面上層		Ⅱ面下層		Ⅲ面		Ⅳ面		調査区全体	
古代以前	土師器		2	1.53%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.35%
	石皿		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	1	0.12%
	台石		1	0.76%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
土器	土師器皿	R種	96	73.28%	22	68.75%	113	74.34%	167	64.48%	132	61.97%	574	67.21%
	土器質	土鍋	0	0.00%	0	0.00%	2	1.32%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		風呂	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		内耳土鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		焙烙	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	伊勢系	鍔鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	1	0.47%	2	0.23%
	瓦質土器	香炉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
土製品	鞴羽口		7	5.34%	0	0.00%	8	5.26%	32	12.36%	3	1.41%	57	6.67%
国産陶器	常滑	甕	3	2.29%	2	6.25%	5	3.29%	8	3.09%	18	8.45%	37	4.33%
		Ⅱ類片口鉢	2	1.53%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.54%	3	1.41%	10	1.17%
		摩耗陶片（甕）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		大皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
	瀬戸	口広有耳壺	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		大平鉢	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		縁釉小皿	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	3	1.16%	2	0.94%	7	0.82%
		瀬戸美濃碗	0	0.00%	1	3.13%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
		瀬戸美濃皿	2	1.53%	2	6.25%	3	1.97%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.82%
		瀬戸美濃丸皿	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		瀬戸美濃擂鉢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	5	2.35%	7	0.82%
		魚形皿	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	渥美	甕	0	0.00%	1	3.13%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		摩耗陶片（甕）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
	備前	擂鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
舶載	青磁碗類	同安窯系	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		竜泉窯系	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	白磁	皿	1	0.76%	0	0.00%	1	0.66%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
	その他	青花皿	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		施釉陶器碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
鉱滓	鉄滓		6	4.58%	0	0.00%	5	3.29%	32	12.36%	0	0.00%	45	5.27%
金属製品	銭	中国銅銭	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	1	0.39%	0	0.00%	3	0.35%
		不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
	鉄	釘	1	0.76%	0	0.00%	2	1.32%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.35%
		刀子	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		不明鉄製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
石製品	砥石	鳴滝	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
		上野	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.23%
		紀州大村	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		その他	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	その他	使用痕ある石	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		不明（赤間石）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		不明	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
石材・石	石材		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	焼土丹		1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	玉石		1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
	石		1	0.76%	0	0.00%	2	1.32%	4	1.54%	3	1.41%	10	1.17%
	軽石		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	1	0.12%
	礎石？		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
木製品	漆器以外木製品	箸（両口）	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	1	0.47%	2	0.23%
		皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		串状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		棒状木製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.66%	0	0.00%	2	0.94%	3	0.35%
		箆状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		円盤状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
		不明木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.88%	4	0.47%
骨角製品	加工骨		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
木材	不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
自然遺物	木	丸木	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	15	7.04%	15	1.76%
		竹片	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.94%	2	0.23%
		木片	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.47%	1	0.12%
	骨	獣骨	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	2	0.94%	3	0.35%
		不明骨片	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	1	0.47%	2	0.23%
近世	伊万里仏華瓶		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%
合計			131	100%	32	100%	152	100%	259	100%	213	100%	854	100%

表５　出土遺物産地別構成比

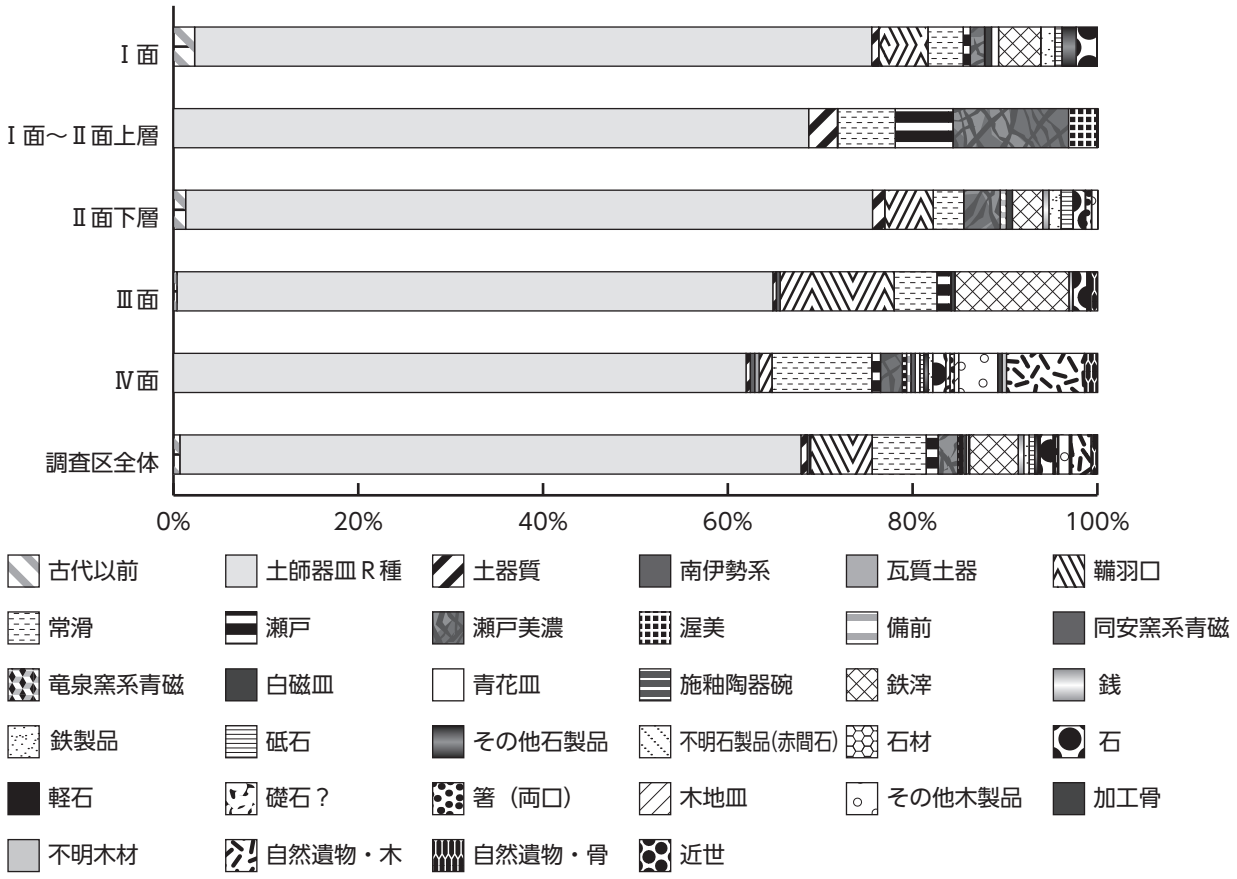


表６　鞴羽口面毎出土比

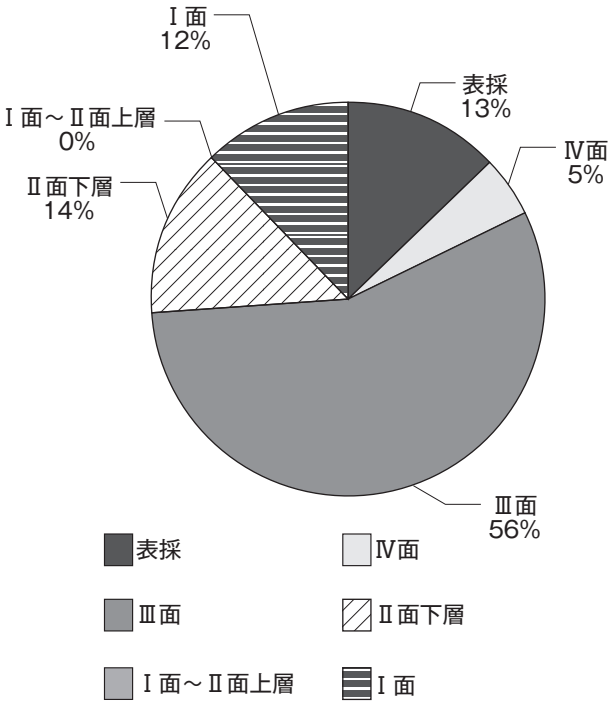
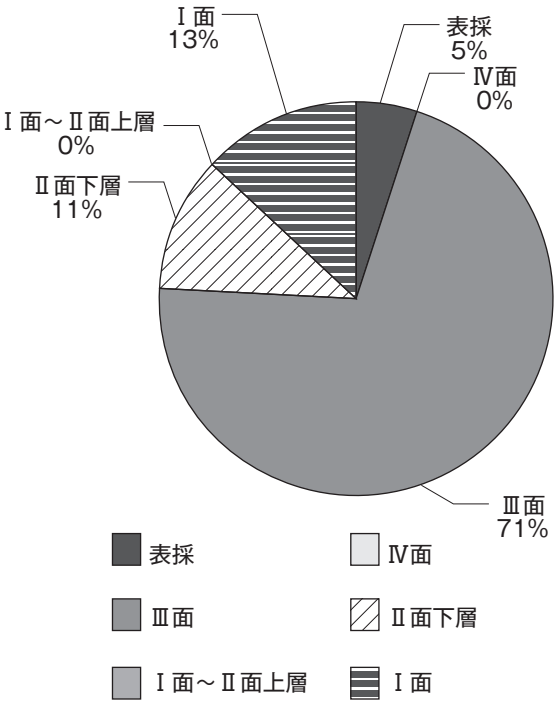


表７　鉄滓面毎出土比



第四章　まとめと考察

１．遺構の変遷と年代

１期

Ⅳ面が相当する。幅2.40ｍ、深さ0.85の断面逆台形をした中型溝（溝２）が山裾に走行し、平行した3本の中型溝（溝１・４・５）がそれに流れ込むように南北に通じる。該期の遺構としては、溝以外に少数の穴があるが、連結して掘立柱建物を形成するには至らなかった。

溝出土遺物からみて本期の年代は、15世紀代のものを含みつつ、溝４から大窯第３段階の擂鉢が出土していることから、16世紀後半まで存続していたものと思われる。下層遺構が存在しないため、正確な溝構築年代は不明だが、溝２の土層断面からも数度の掘り直しが認められ、一定の存続期間が考えられる。ほぼ後北条期全体に及ぶものと考えたい。

溝２と１・４・５は直交していないが、少なくとも溝１・４は溝２を超えて北には現われず、三者が同時存在であることを示している。溝２と同規模の溝は隣地の植木字植谷戸78-2ほか地点の調査（2000年度調査、未報告）でも検出されているが、両者は10ｍ強しか離れていないにもかかわらず、両溝の角度が大きく異なっているため、連続しているかどうかは不明である。山裾に沿ってつながっていた可能性も否定できない。

溝１・４・５に関しては、上述植谷戸78-2地点の溝とは直交する方位にあり、さらにその東の同地点２次調査（2001年度調査、未報告）検出の幅４ｍ近い大溝とは平行位置にある。後者と本地点とは30数ｍの距離があるが、玉縄城城下の区画のあり方を示している可能性がある。幅４ｍ近くの大溝から西の谷尻までは約130ｍの距離があり、この間に設けられた区画溝が本地点に現れたのかもしれない。ただ、先述したように本期の存続期間が長期に及ぶ可能性もあり、これらの溝が同時に存在したかどうかは不明である。

図19-14内耳土鍋は市内でもまだ数点の出土例にとどまっており、貴重な資料といえる。

２期

Ⅲ面が相当する。1区を中心に、建物１棟（建物１）・Ｌ字柱穴列１列を含む小穴81穴が検出された。２区ではこの面はⅡ面下層と結びつき、面そのものの検出がなかった。あるいはⅡ面下層の初期の一群と捉えることもできるが、破砕泥岩を敷いた面の下に存在するので、基本的には連続性よりも断絶を認めるべきであろう。柱穴列も建物の一部をなす可能性があるが、調査区内のみでは確認できなかった。また小穴の数からみてさらに１～２棟の建物の存在が予想されるものの、検討の限りでかなわなかった。建物１は主軸方位を下層の南北溝とほぼ同じくしているが、柱穴列は主軸方位を大きく異にしており、時代的な変遷を窺わせる。また、鞴羽口と鉄滓の出土が本期に集中することからも、当地点の土地利用が変わった可能性がある。

出土遺物から年代を考えてみると、15世紀末～16世紀初めの要素も含まれている点（図16- 1・3・4）に、下層の16世紀後半までの存続という遺物年代と齟齬がある。しかし、層位的に考えて、16世紀末葉以降と考えたい。

３期

Ⅱ面下層が相当する。部分的に泥岩による生活面をとどめ、柱穴らしき小穴もかなり検出できるが、建物等の明瞭な遺構像を結ぶわけではない。出土遺物は15世紀後半から16世紀前葉（図13－３～５）のものが含まれ、中には15世紀初頭前後（図13－7）のものもあるが、これも層位的にみて16世紀末葉

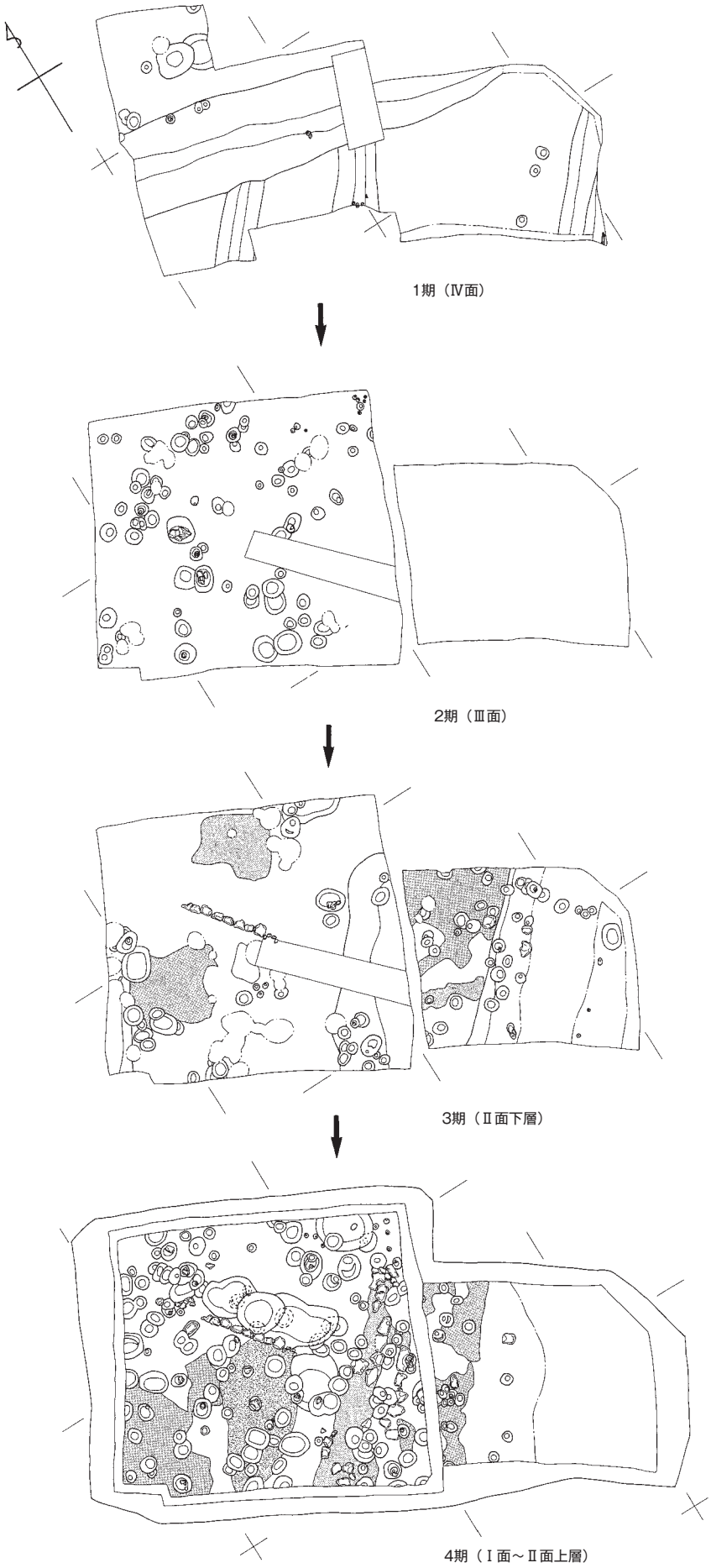


図23　遺構変遷図

以降と考えたい

４期

Ⅰ面～Ⅱ面上層が相当する。１区を中心に柱穴列９列を含む小穴154穴・土坑５基が検出された。柱穴列９列は相互に関連性を見出すことができなかったが、ほぼ直交する関係にあり、建物の建て替えが複数回行われた可能性を指摘できる。この柱穴列の主軸方位は１期の溝群とは全く異なっており、１期とは性格が変わっていることが考えられる。

出土遺物には15世紀初頭前後のもの（図８－５）から15世紀後半のもの（図８－９）が含まれているが、17世紀前半代のもの（図８－10）が出土していることから、当期は17世紀前半以降とみることができよう。

２．まとめ

１期の溝について

１期の溝２は人為的に埋められ、その上層に地形層とも解釈できる盛土が行われている。また、出土遺物からみて、１期は後北条期全般に及ぶ可能性がある。

これらのことから、溝の埋没は城破（しろわ）りに伴う可能性も考えられる。玉縄城の開城は天正十八年（1590）、元和の一国一条令は元和元年（1615）に出されている。城破りが行われているとすれば、天正十八年（1590）から元和元年（1615）年前後にかけてのいずれかの時期に該当すると考えられるが、今回の調査では溝の埋没年代を明確に特定できるような良好な

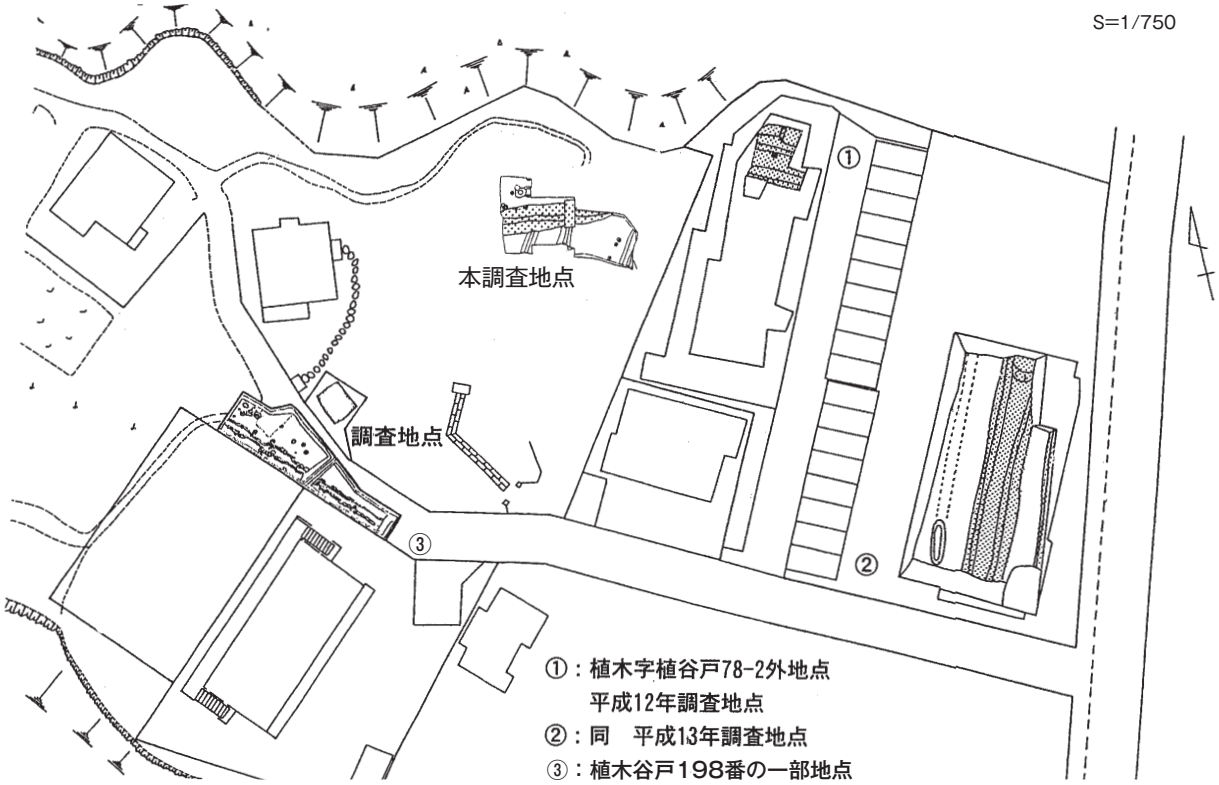


図24　調査地点及び周辺の遺構検出状況
（緊急調査報告20　2004年 継・伊丹 図13を加筆・改変）

資料を得ることができなかった。もっとも、溝を埋めること自体、平坦面を活用するための行為である可能性もあるため、人為的に溝が埋められているからといって城破りであると即断すること自体にも危険性がある。また、2期に鞴羽口と鉄滓の出土が集中することから、1期と2期で本地点の性格が変わったことにより、溝が埋められたことも考えられる。いずれにしろ出土遺物から求められる1期の最終時期が16世紀後半であり、後北条氏期全般に及ぶ可能性があることと、2期以降は徳川家康の関東入部以降である可能性が考えられることを挙げておく。

15世紀代の出土遺物が含まれることについて

一般に玉縄城の築城は永正九年（1512）のこととされている。しかし、「石川忠總留書」（『埼玉県史　資料編』8－6）に明応三年（1494）9月19日、「相州玉縄要害没落」とみえ、玉縄城築城以前の15世紀末葉に既になんらかの拠点が存在したことが窺われる。また、中丸和伯氏は、玉縄周辺が「鎌倉時代のはじめからあらゆる点で要地であった」といっており（中丸1958）、既に要地として認識されていたがゆえに玉縄の地に築城されたと考えることもできよう。玉縄の要地としての存在を考える上で15世紀代にも注視していく必要があろう。

（沖元）

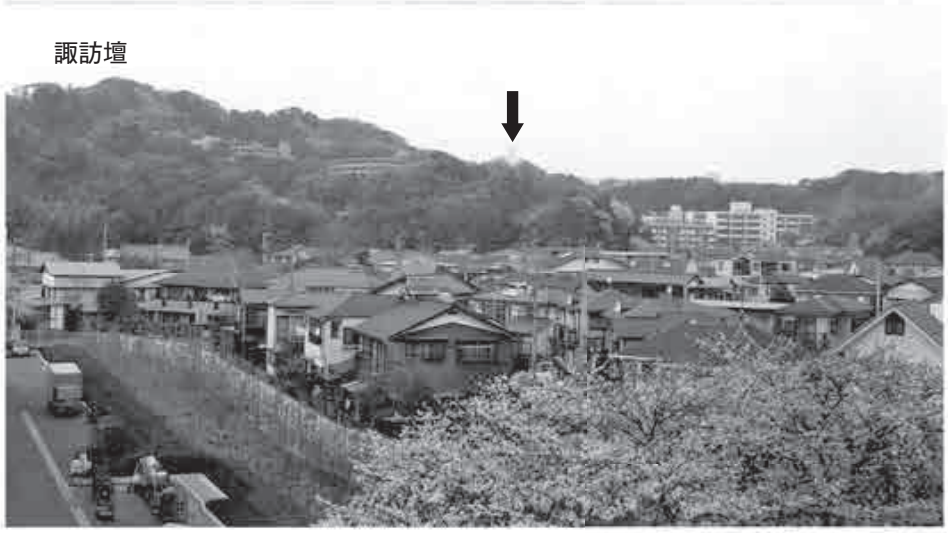
引用・参考文献

中丸和伯　1958「第二篇第三章　後北条時代」『横浜市史　第1巻』

図版１

１－１　昭和30年頃の玉縄城（白丸印が本調査地点）

１－２　調査地点遠景（矢印の下、南から）



１－３　本支谷に入る道（調査地点は右手奥）

２－１　１区Ⅱ面上層全景（東から）

２－２　１区Ⅱ面上層全景（南から）

２－３　１区Ⅱ面上層全景（西から）

図版３

３－１
１区Ⅱ面上層西南隅　盛り上り部分（北東から）

３－２
２区Ⅱ面上層全景（東から）

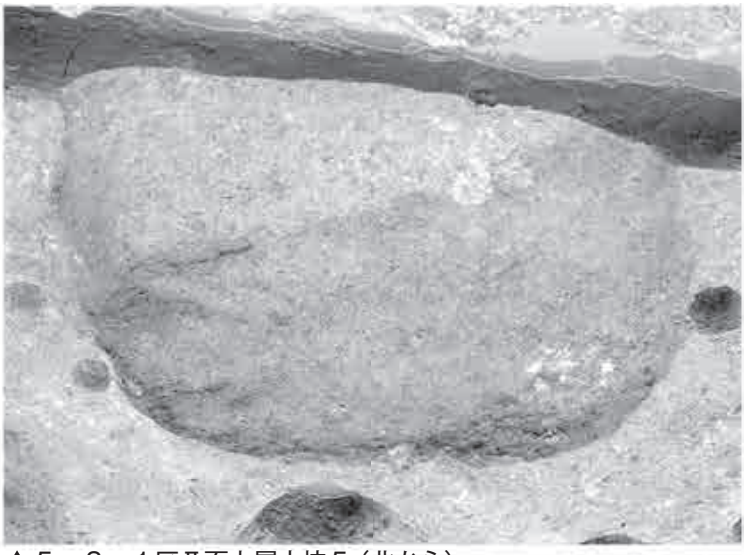
３－３
２区Ⅱ面上層全景（南から）

４－１　１区Ⅱ面下層全景（東から）

４－２　１区Ⅱ面下層全景（南から）

４－３　２区Ⅱ面下層全景（北から）

図版５



▲５－３　１区Ⅱ面上層土坑５（北から）

◀５－１　１区Ⅱ面上層調査区東切石列（東から）

５－２　１区Ⅱ面上層調査区東切石列
（南から）

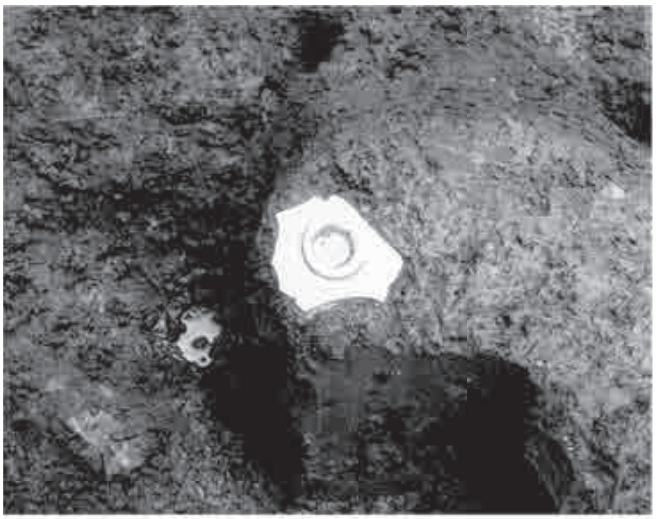
５－４　１区Ⅱ面下層中央深掘り土層断面
（南から）

6－1
1区Ⅲ面全景（東から）

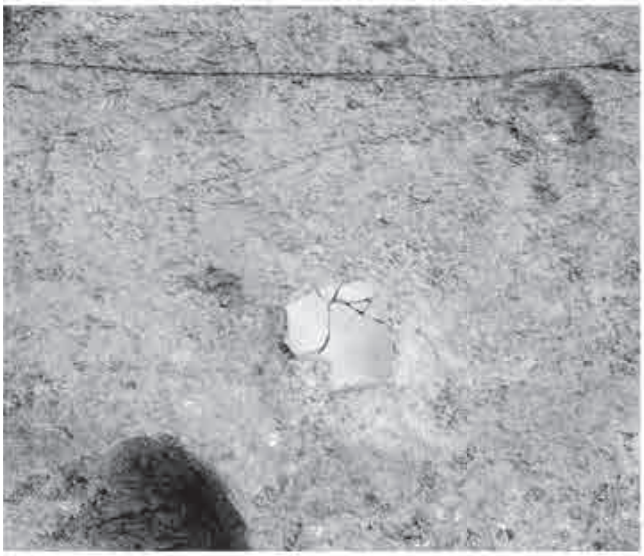
6－2
1区Ⅲ面全景（南から）

6－3
1区Ⅲ面
P.103
土層断面（南から）

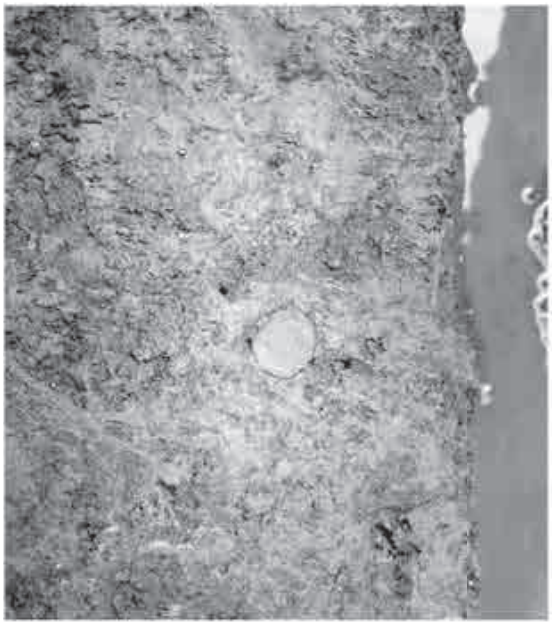
図版７



７－１　２区Ⅲ面下白磁皿（図15－12）出土状況（北から）



７－２　２区Ⅳ面溝２覆土内耳鍋（図19－14）出土状況（北から）



７－３　２区Ⅱ面下土師器皿（図15－４）出土状況（北から）

７－４　１区Ⅳ面全景（南から）

７－５　２区Ⅳ面全景（西から）

８－１　１区Ⅳ面溝２（西から）

８－２　Ⅳ面溝２全景（東から）

８－３　溝２中央部土層断面（西から）

８－４　２区溝２内土師器皿出土状況（東から）

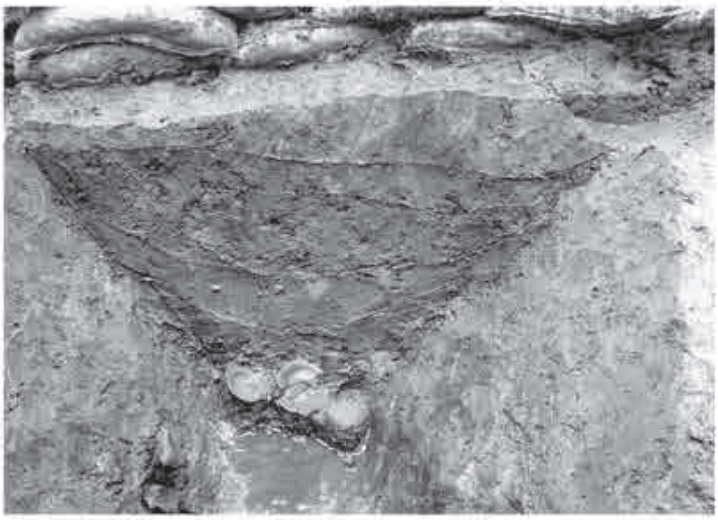
図版９

９－１　２区Ⅳ面溝４（南から）

９－２　溝４内角材（北から）

９－３　溝４南壁土層断面（北から）

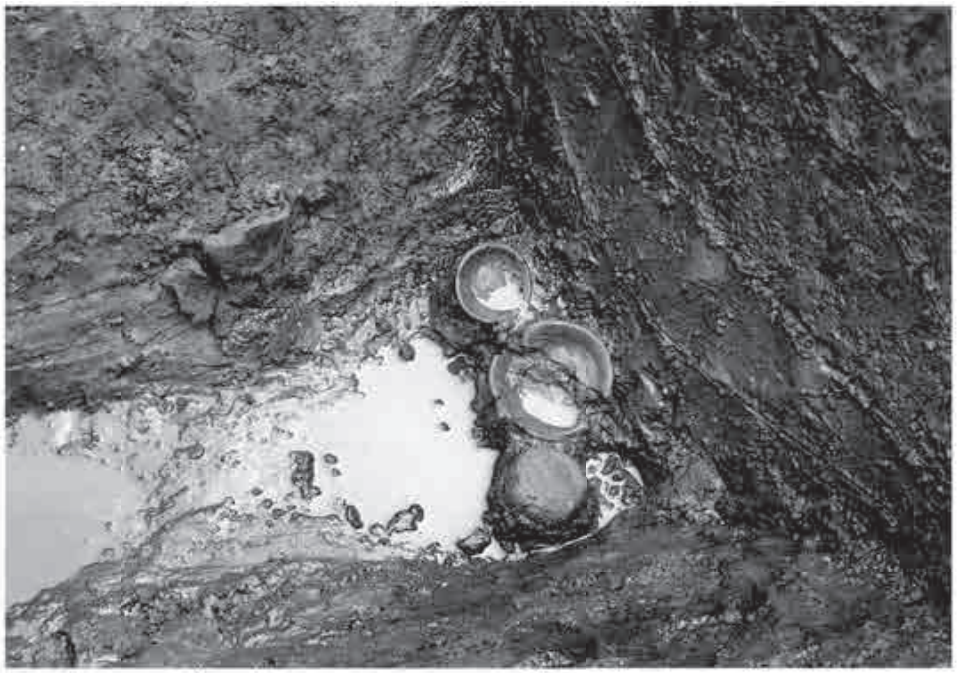
９－４　１区Ⅳ面溝５（北から）



９－５　１区溝５南壁際土層断面（北から）

10－1

1区Ⅳ面溝5内遺物出土状況（北東から）

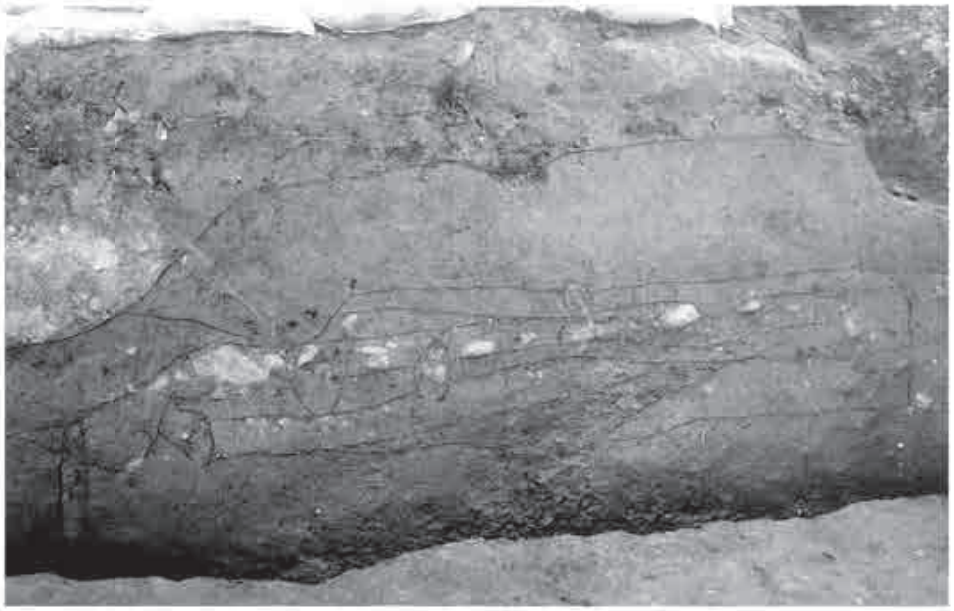


10－2

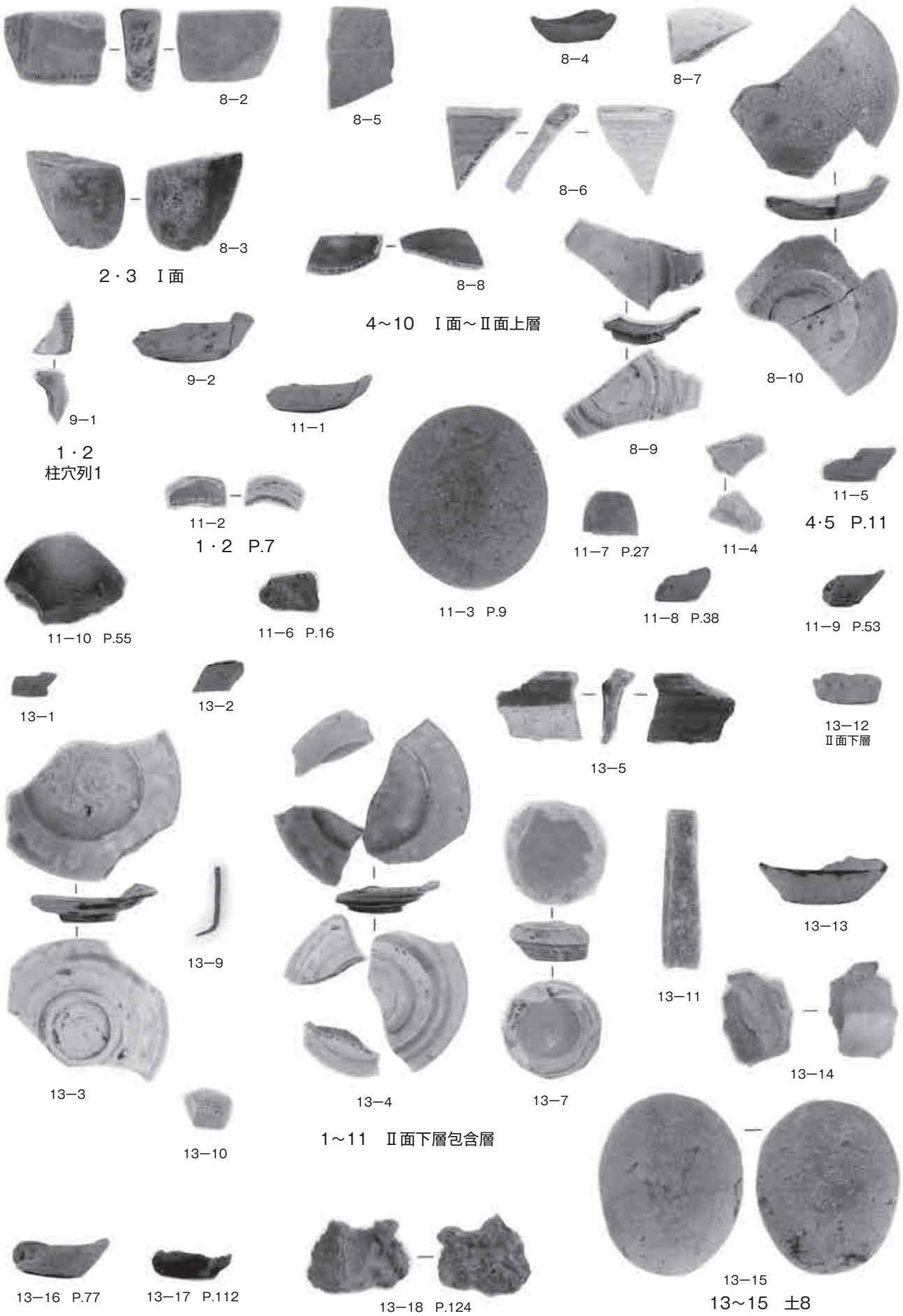
1区調査区東壁土層断面（西から）

10－3

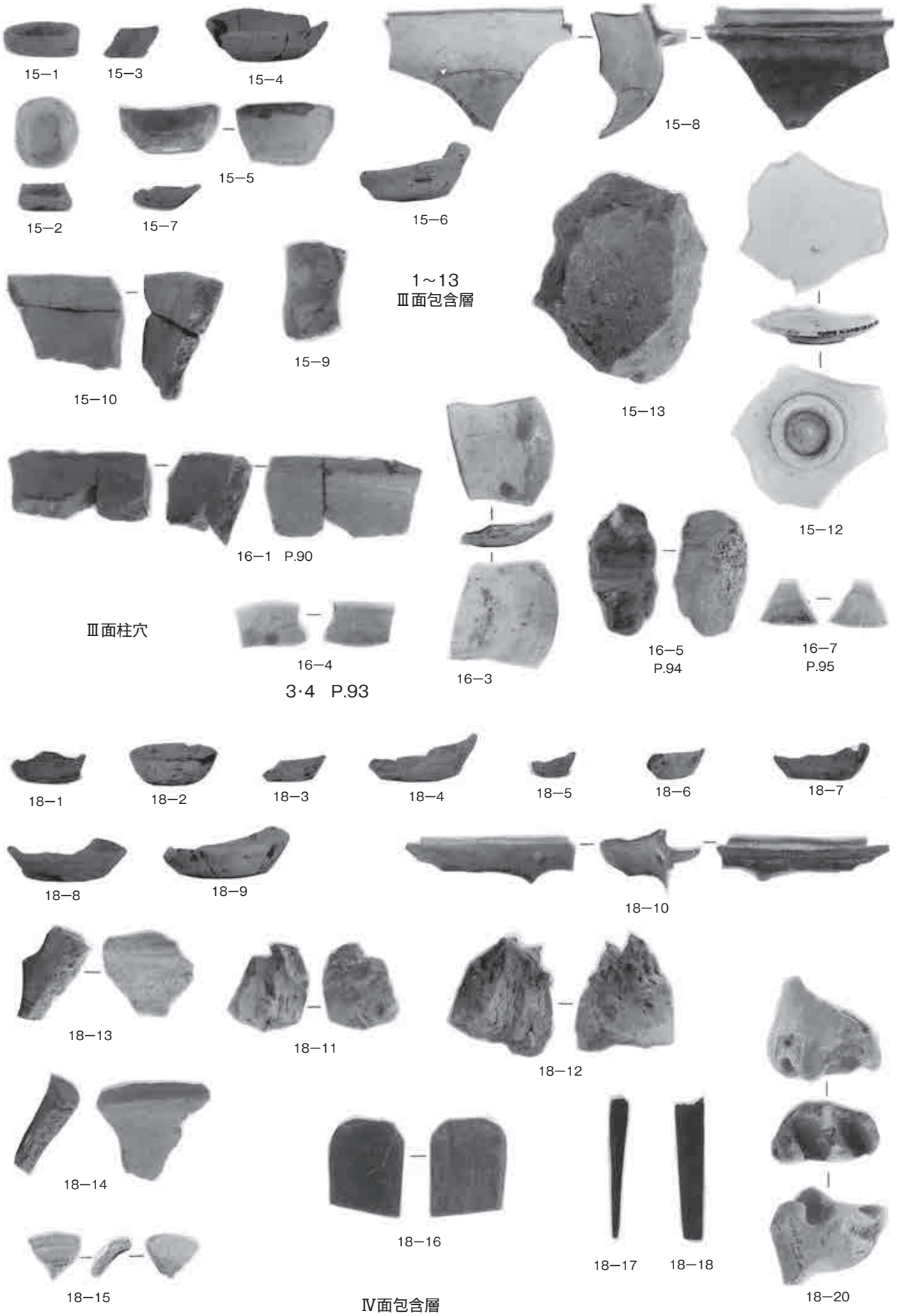
2区調査区南壁中央部土層断面（北から）



図版11

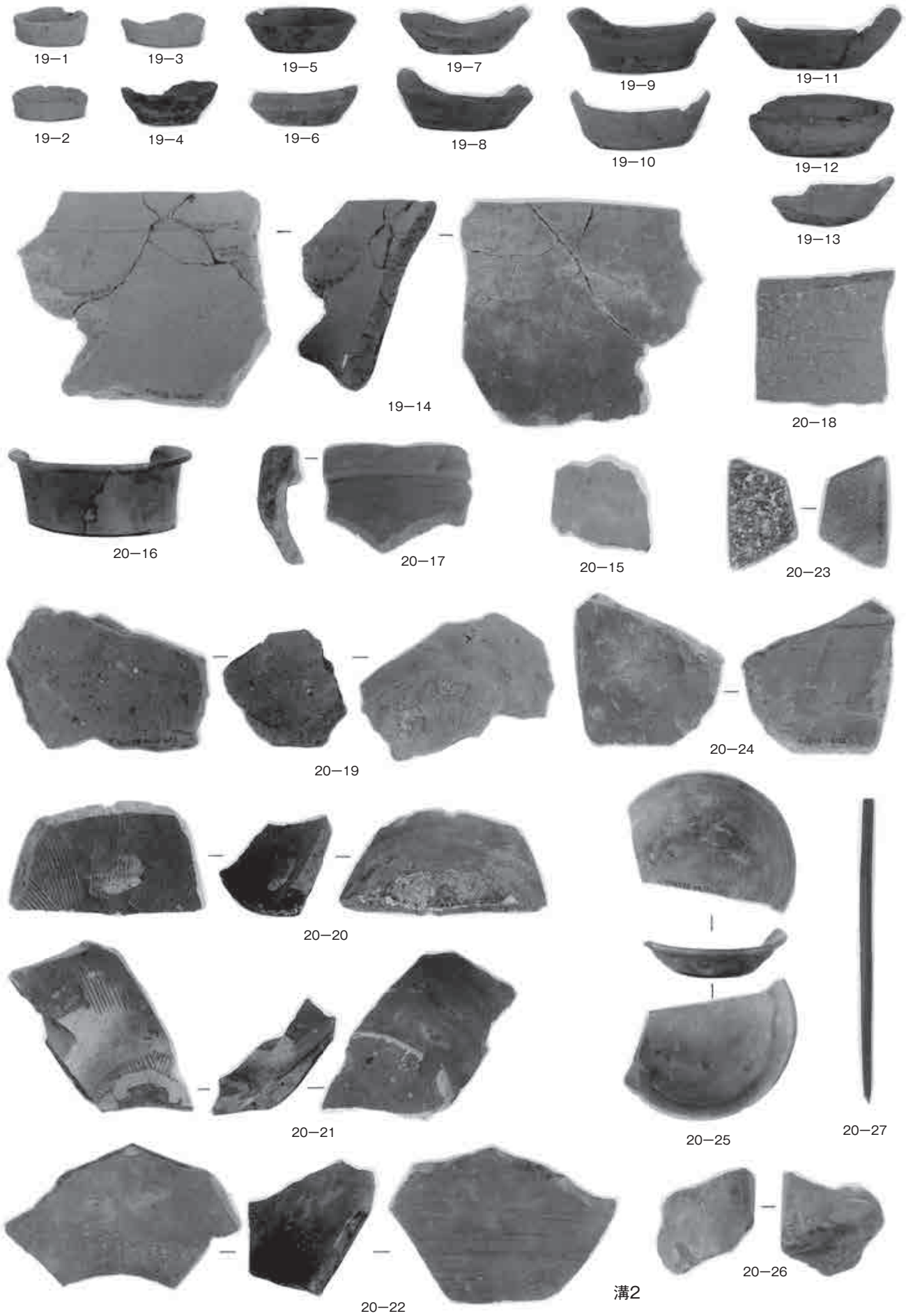

8−2
8−5
8−4
8−7
8−6
8−3
2・3　Ⅰ面
8−8
4～10　Ⅰ面～Ⅱ面上層
8−10
9−2
9−1
11−1
1・2
柱穴列1
8−9
11−5
11−2
1・2　P.7
11−7　P.27
11−4
4・5　P.11
11−3　P.9
11−10　P.55
11−6　P.16
11−8　P.38
11−9　P.53
13−1
13−2
13−12
Ⅱ面下層
13−5
13−13
13−9
13−11
13−14
13−3
13−4
13−7
13−10
1～11　Ⅱ面下層包含層
13−16　P.77
13−17　P.112
13−18　P.124
13−15
13～15　土8

出土遺物1

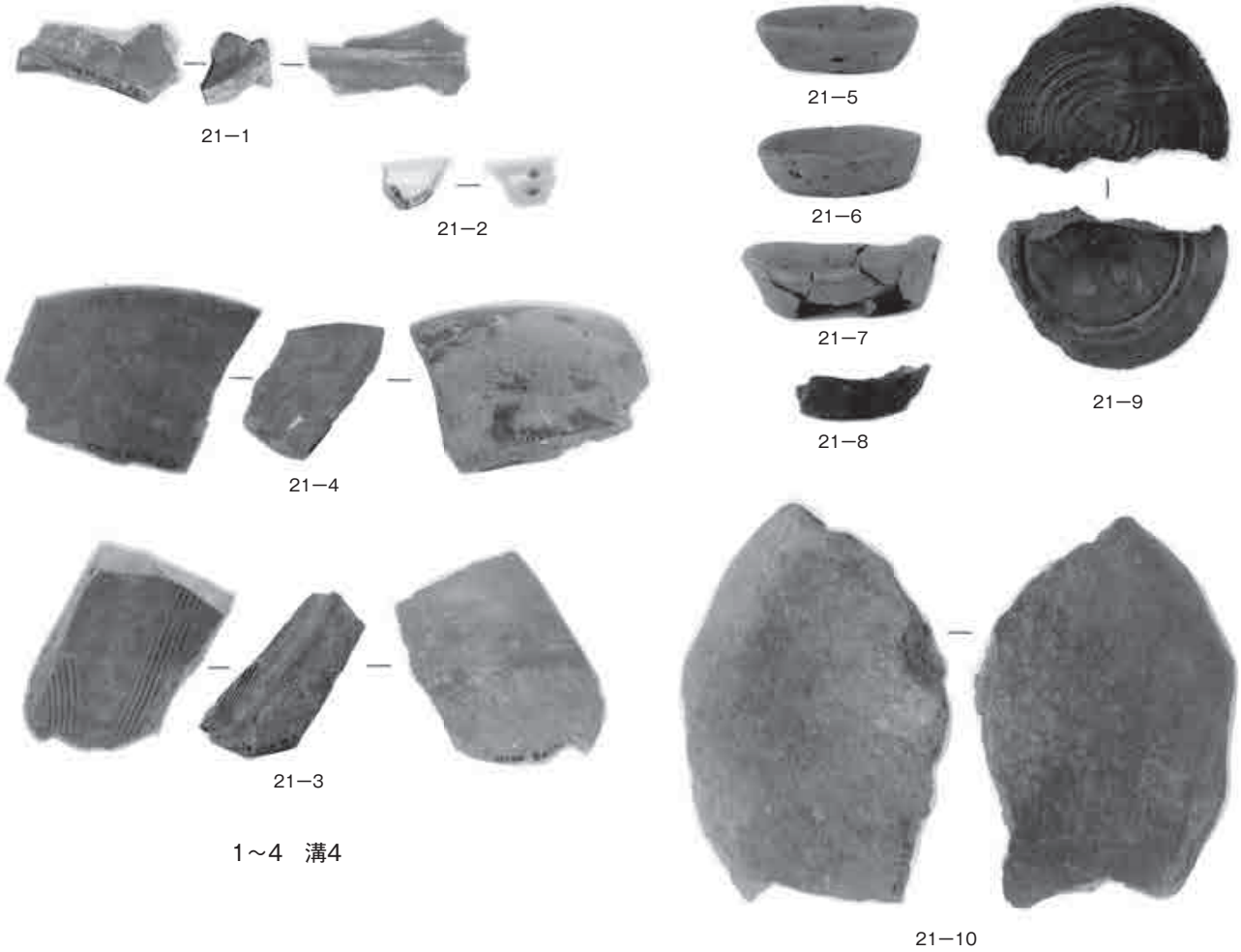

15−1
15−3
15−4
15−8
15−5
15−2
15−7
15−6
1～13
Ⅲ面包含層
15−9
15−10
15−13
15−12
16−1 P.90
Ⅲ面柱穴
16−4
3·4 P.93
16−3
16−5
P.94
16−7
P.95
18−1
18−2
18−3
18−4
18−5
18−6
18−7
18−8
18−9
18−10
18−13
18−11
18−12
18−14
18−16
18−17
18−18
18−15
18−20
Ⅳ面包含層

出土遺物2

図版13

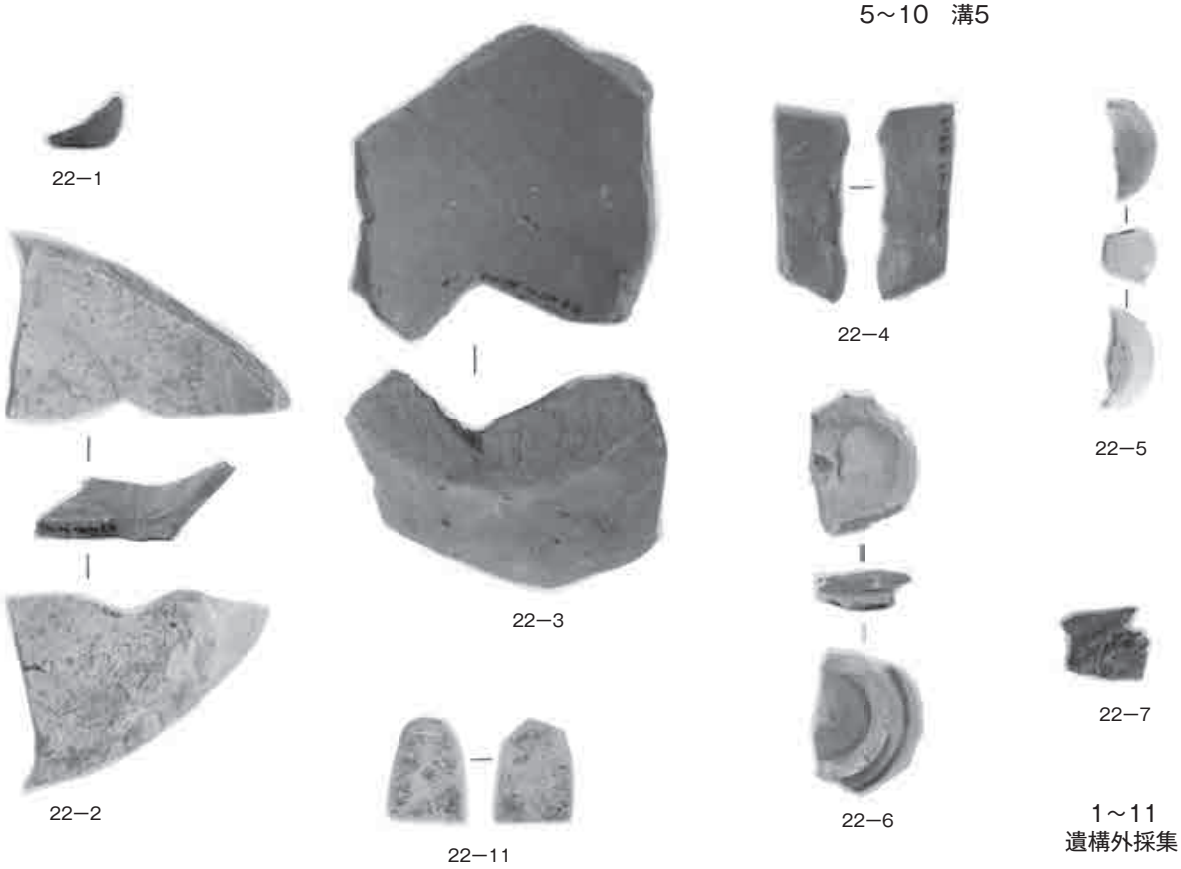

19−1
19−3
19−5
19−7
19−9
19−11
19−2
19−4
19−6
19−8
19−10
19−12
19−13
19−14
20−18
20−16
20−17
20−15
20−23
20−19
20−24
20−20
20−21
20−25
20−27
20−22
20−26
溝2

出土遺物3



1～4　溝4

5～10　溝5



1～11
遺構外採集

出土遺物4

笹目遺跡（No.207）

笹目町 316 番 10 地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2006年6月15日から7月24日、調査対象面積は42.50㎡である。出土遺物、図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

   調査の主体　　鎌倉市教育委員会
   調査担当　　森孝子
   現地調査参加者　渡辺美佐子・安達澄代・下江秀信・倉方尚子、
   　　石井清司・佐野吉男・中州洋二（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
   資料整理参加者　渡辺美佐子・栂岡ケイト・田畑衣理・赤堀祐子
4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

   遺構図　　1/60・1/40
   遺物実測図　　1/3・1/1（銭）
5. 本報の作成は以下の分担で行なった。

   遺構図版　　森・赤堀
   遺物図版　　渡辺・栂岡・田畑・赤堀
   観察表作成　　渡辺・赤堀
   写真撮影　　遺構：森　　遺物：赤堀
   執筆・編集　　赤堀
6. 現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。（敬称略・順不同）

   菊川英政・汐見一夫・原廣志・馬淵和雄・伊丹まどか・山口正紀・押木弘巳・沖本道・宇都洋平

目　次

本　文　目　次

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境（図1・2、表1）…… 63

第1節　遺跡の位置と歴史
第2節　周辺の調査

第二章　調査の概要 …… 67

第1節　調査の経過
第2節　グリッド設定・国土座標との合成（図3）
第3節　調査地の堆積土層（図4）

第三章　発見された遺構と遺物 …… 71

第1節　中世第1面（図5～8）
第2節　中世第2面（図9～11）
第3節　中世第3面（図12～15）
第4節　中世第4面（図16～18）
第5節　中世第5面（図19～24）
第6節　調査第6面（図25～27）
第7節　古代以前の遺物（図28）

第四章　まとめ …… 97

第1節　古代以前
第2節　中世

挿　図　目　次

図1　本調査地点と周辺の遺跡 ……64
図2　遺跡位置図 ……66
図3　グリッド設定図 ……68
図4　調査地の堆積土層 ……70
図5　1面遺構配置図 ……71
図6　1面検出遺構 ……72
図7　1面・表採出土遺物 ……74
図8　1面遺構出土遺物 ……75
図9　2面遺構配置図・検出遺構 ……76
図10 落ち込み1出土遺物 ……76
図11 2面・3a面出土遺物 ……77
図12 3面（2面）遺構配置図 ……78
図13 3面検出遺構 ……79
図14 3面遺構出土遺物 ……82
図15 3b面出土遺物 ……83
図16 4面遺構配置図 ……84
図17 4面出土遺物 ……86
図18 4面遺構出土遺物 ……87
図19 5a面遺構配置図・土坑10 ……88
図20 5a面出土遺物 ……89
図21 土坑10出土遺物 ……89
図22 5b面遺構配置図 ……90
図23 5b面検出遺構 ……91
図24 5b面・5b面遺構出土遺物 ……93
図25 6面遺構配置図 ……94
図26 6面検出遺構 ……95
図27 6面出土遺物 ……96
図28 古代以前の遺物 ……96

表　目　次

表１　周辺の遺跡……65
表２　１面ピット表……72
表３　３面ピット表……81
表４　４面ピット表……85
表５　5a面ピット表　……89
表６　5b面ピット表　……92
表７　６面ピット表……95
表８　遺物集計表……98
表９　遺物観察表……99

図　版　目　次

図版１…… 107
　Ａ．Ⅰ区１面（東から）
　Ｂ．Ⅱ区１面（北から）
　Ｃ．Ⅱ区１面（東から）
図版２…… 108
　Ａ．Ⅰ区２面（東から）
　Ｂ．Ⅱ区２～３面（北から）
図版３…… 109
　Ａ．Ⅰ区３面（東から）
　Ｂ．Ⅱ区３面（北から）
図版４…… 110
　Ａ．Ⅰ区４面（東から）
　Ｂ．Ⅱ区４面（北から）
　Ｃ．Ⅱ区5a面（北から）
図版５…… 111
　Ａ．Ⅰ区５面（南から）
　Ｂ．Ⅱ区５面（東から）
　Ｃ．Ⅱ区５面（北から）
図版６…… 112
　Ａ．Ⅰ区６面（東から）
　Ｂ．Ⅰ区６面（南から）
　Ｃ．Ⅱ区６面（北から）
図版７…… 113
　Ａ．Ⅰ区西壁土層
　Ｂ．Ⅱ区北壁土層
　Ｃ．Ⅱ区西壁土層
図版８　出土遺物（１）…… 114
図版９　出土遺物（２）…… 115
図版10　出土遺物（３）…… 116

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境（図１・2、表１）

第１節　遺跡の位置と歴史

本調査地点は鎌倉市笹目町316番10に位置し、笹目遺跡（県遺跡台帳No.207）として周知の遺跡の内に所在する。笹目遺跡は桔梗山から南に延びる細尾根が形成する谷戸・「笹目ヶ谷」およびその周辺を範囲とし、現在の行政上の名称「笹目町」とほぼ一致する辺りである。笹目ヶ谷の開口部から南は県道鎌倉・葉山線まで、西は吉屋信子記念館付近、東側は笹目ヶ谷を形成する支尾根を挟んで佐助ヶ谷の開口部・佐助川が東へ流れを変える所から県道鎌倉・葉山線を結ぶ道路までが含まれる。

「笹目」の地名は「佐々目」として『金沢文庫文書』『吾妻鏡』など中世期の文書にも見られ古来よりの名称であることがわかっている。中世期には遺身院・長楽寺という寺院があったとされ、『金沢文庫文書』には「佐々目遺身院」とみえるほか、「佐々目禅房」・「佐々目御坊」・「佐々目御房」・「佐々目禅洞」・「佐々目禅房」・「佐々目殿」・「佐々目房」などの名が見られる。また、遺身院については、建物の内外の様子が描かれた永仁六年（1298）と元享三年（1323）の法灌頂図３点が金沢文庫に所蔵されている。長楽寺は現在大町にある安養院長楽寺の前身とされ、『新編鎌倉志』・『鎌倉攬勝考』等の近世地誌に佐々目谷にあったと記されているが、現在「長楽寺ヶ谷」伝えられるのは笹目ヶ谷の西側に位置する鎌倉文学館が建つ谷で、この地に長楽寺が所在したとの意見が多い。

『吾妻鏡』には北条経時（鎌倉幕府第４代執権）に関するものと、火災に関する記事が見られる。北条経時は寛元四年（1246）閏４月に「佐々目山麓」に埋葬されたとあり、三年仏事と十三年仏事が「佐々目谷」で行われたとの記事がある。火災に関するものは建長三年（1251）２月10日条と文永三年（1266）１月25日条に佐々目谷が焼亡したとの記事が見える。その他、文献に残る火災は『見聞私記』に永仁五年（1297）佐々目谷口より発生したものが上げられる。

第２節　周辺の調査

笹目遺跡内では、戦前に行われた赤星直忠氏の踏査により、谷奥の２カ所（△A・B）で横穴墓が確認されている。地点Aで開口していた1穴は平面形撥形、羨道と玄室の境のない終末期の形態を採るもので、奥壁に接して高棺座を付帯する。地点Bでは４穴が開口、こちらも高棺座を付帯するものが含まれる。いずれも平面形は撥形だが、羨門付近の形状は後世の削平で失われており不明である。横穴には中世期に利用があったと思われる状況を示すものも含まれるようで、棺座上面に長方形の穴を穿ち、火葬骨を納めた上に五輪塔の地輪がのっていたとされている。(赤星直忠　1959「鎌倉市史考古編」・鎌倉文化研究会　1972「鎌倉史蹟めぐり会記録」)

本格的な発掘調査は12地点で行われている。地点６では14世紀前半～中頃にかけての雛壇地形が確認され、上段平場では掘立柱建物１棟が発見されている。地点２の調査では背後の山際岩盤を掘削して平場を確保する一方、前面を土丹を利用して埋め立て造成する様子が伺われる。中世は13世紀後葉～15世紀前葉までの遺構が発見され、基壇を伴う礎石建物や玉砂利敷きの庭、石垣など寺院跡を想定させる内容である。前掲・金沢文庫所蔵の遺身院法灌頂図との比較・照合を試みた上で、「同一建物とは確認出来ないものの、必ずしも遺身院と係わりがないとは断定出来ない」との所見が報告されている。地点10では13世紀後葉～14世紀中頃までの４時期の生活面が検出され、建物址を含む柱穴、土坑などが発見されている。地点12では14世紀代～15世紀前半代の２時期の強固な土丹地形面が検出され、土塁状遺構とされる土丹列による区画が確認されている。また、谷中央の道路を隔てて30m程に位置する地

図１　本調査地点と周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡

No.	地点地番	担当者	文献／刊行年	
1	笹目町 316 番 10 地点	森　孝子	本報掲載	
2	笹目町 330 番 1 地点	大河内勉	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 6 笹目遺跡発掘調査報告書	1990 年　3 月 1991 年　7 月
3	笹目町 324・311 番 3 地点	田代郁夫 原　廣志	昭和 63 年度鎌倉市内急傾斜崩落対策事業に伴う発掘調査報告書	1994 年　3 月
4	笹目町 425 番 1 地点	田代郁夫 継　実	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 10	1994 年　3 月
5	笹目町 302 番 5 地点	田代郁夫 継　実	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 11	1995 年　3 月
6	笹目町 360 番 1 地点	宮田　眞	笹目遺跡発掘調査報告書	2000 年 12 月
7	笹目町 285 番 1 外地点	齋木秀雄 伊丹まどか	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 17	2001 年　3 月
8	笹目町 286 番 1 外地点	齋木秀雄 伊丹まどか	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 17	2001 年　3 月
9	笹目町 302 番 11 地点	継　実 土屋浩美	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 18	2002 年　3 月
10	笹目町 330 番 11 外地点	原　廣志	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 20	2004 年　3 月
11	笹目町 287 番 1 外地点	田代郁夫	鎌倉の埋蔵文化財 8 平成 14・15 年度発掘調査の概要	2005 年　3 月
12	笹目町 415 番 21 他地点	原　廣志 山口正紀	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 24	2008 年　3 月
13	笹目町 423 番 2 他地点	齋木秀雄 降矢順子	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 26	2010 年　3 月

点10との中世生活面の標高の比較から、地点10では14世紀中頃以降の遺構が削平されている可能性を明らかにした。以上4カ所が笹目ヶ谷内の調査である。

谷開口部では、西側山裾の地点3で2基のやぐらが調査されている。東尾根先脇の地点13では岩盤上に砂質土、市街地の中世地山に類似する粘質土の順に自然堆積層があり、その上に土丹などを利用した造成が行われる。13世紀中頃～14世紀中頃の4枚の生活面が調査され、社を想定させる基壇遺構やイヌの埋葬体の発見などから、何らかの宗教的な空間が想定されている。

谷外では、6カ所で調査が行われている。谷開口部南東の2カ所は、いずれも中世地山を砂質土とし、地点5では、六地蔵から延びる路地に近い軸方向を示す道路状遺構と、その南に展開する方形竪穴・土坑などが確認されている。地点9は方形竪穴と溝が濃密に存在する。地点4は、笹目ヶ谷から尾根を隔てた地域となり今回調査地とは関連が薄いと思われる。南北方向の道路と見られる版築面が確認されている。遺跡南方の県道寄り、地点7・8では13世紀後半～14世紀前半を中心とした時期の遺構が発見されている。この辺りは黄褐色砂が中世の基盤層となる地域で、方形竪穴や中世以前と考えられる仰臥屈伸葬が検出されるなど、南接する長谷小路周辺遺跡に連続する内容である。地点7では方形竪穴の床面標高を周辺調査の事例と比較して、この付近が砂丘の最高部に相当する可能性を上げている。地点11では方形竪穴や井戸などが確認されている。

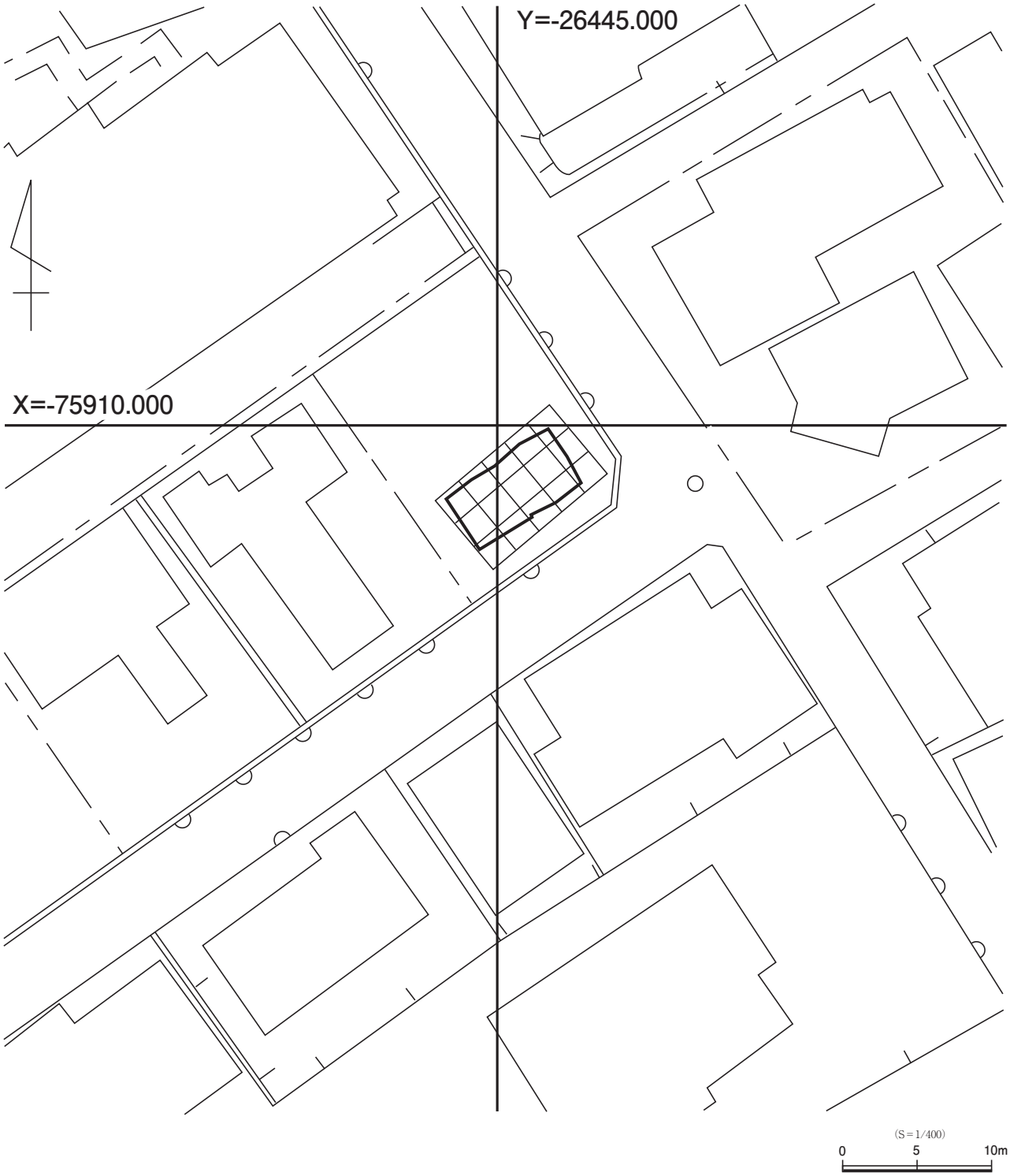


図２　遺跡位置図

第二章　調査の概要

第１節　調査の経過

調査は廃土置場を確保するため､調査区を西半（Ⅰ区）と東半（Ⅱ区）に分割し､2回に分けて実施した。確認調査の結果に基づき、現況の地表面（標高11.4 ～ 11.6m）下130 ～ 140㎝の近現代の堆積土層を重機により掘削・除去し、その後人力による遺構調査を開始した。調査区内に遺存する最も新しい生活面は現地表下150 ～ 180㎝で検出された。以下、大きく5枚の中世面の調査を行い、溝、土坑、ピット等の遺構を検出した。途中安全を確保できる深度を超えたため、中世4面からは犬走りを設けて、調査範囲を縮小した。中世の地形層下では周辺地域で古代の遺構確認面とされる黒色弱粘質土層（現地表下約320㎝）で調査を行なった（調査6面）。調査6面では、溝、土坑、ピットが検出された。中世面で見逃された掘り込みと思われるものが多い中で、Ⅰ区で検出された溝2は古代以前の人為的な遺構である可能性が高い。出土遺物は整理箱にして約3箱で、中世期の土器・陶磁器、石製品、鉄製品、銅製品、獣骨の他、古代以前の土器・陶器が少量含まれている。
以下に作業経過を記した。

2006年　6月15日　Ⅰ区調査開始。重機による表土掘削作業。
　　6月16日　人力による調査開始。
　　6月19日　調査グリッドの設定作業。
　　7月 3日　Ⅰ区遺構調査終了。図面作成、全景写真撮影。
　　7月 4日　鎌倉市3級基準点（53123）より 調査区内に海抜高を移動。
　　Ⅰ区調査区壁土層の記録作業。
　　7月 6日　鎌倉市4級基準点より国土座標値の移動。
　　7月10日　重機によるⅠ区の埋め戻し作業、及びⅡ区の表土掘削。
　　7月11日　人力による遺構調査開始。
　　7月24日　調査終了。機材撤収。

第２節　グリッド設定・国土座標との合成（図３）

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の北西隅に基準点（X0,Y0）を設置、南側・東側に向かい数値を増すこととした。国土座標との関係は調査グリッドのX0,Y0が国土座標のX＝－75915.0211, Y＝－26449.1486と、X0,Y4.964が国土座標のX＝－75911.8487, Y＝－26445.3466と一致し、調査グリッドのX軸は国土座標のY軸より39° 50′ 30″西へ振れている。

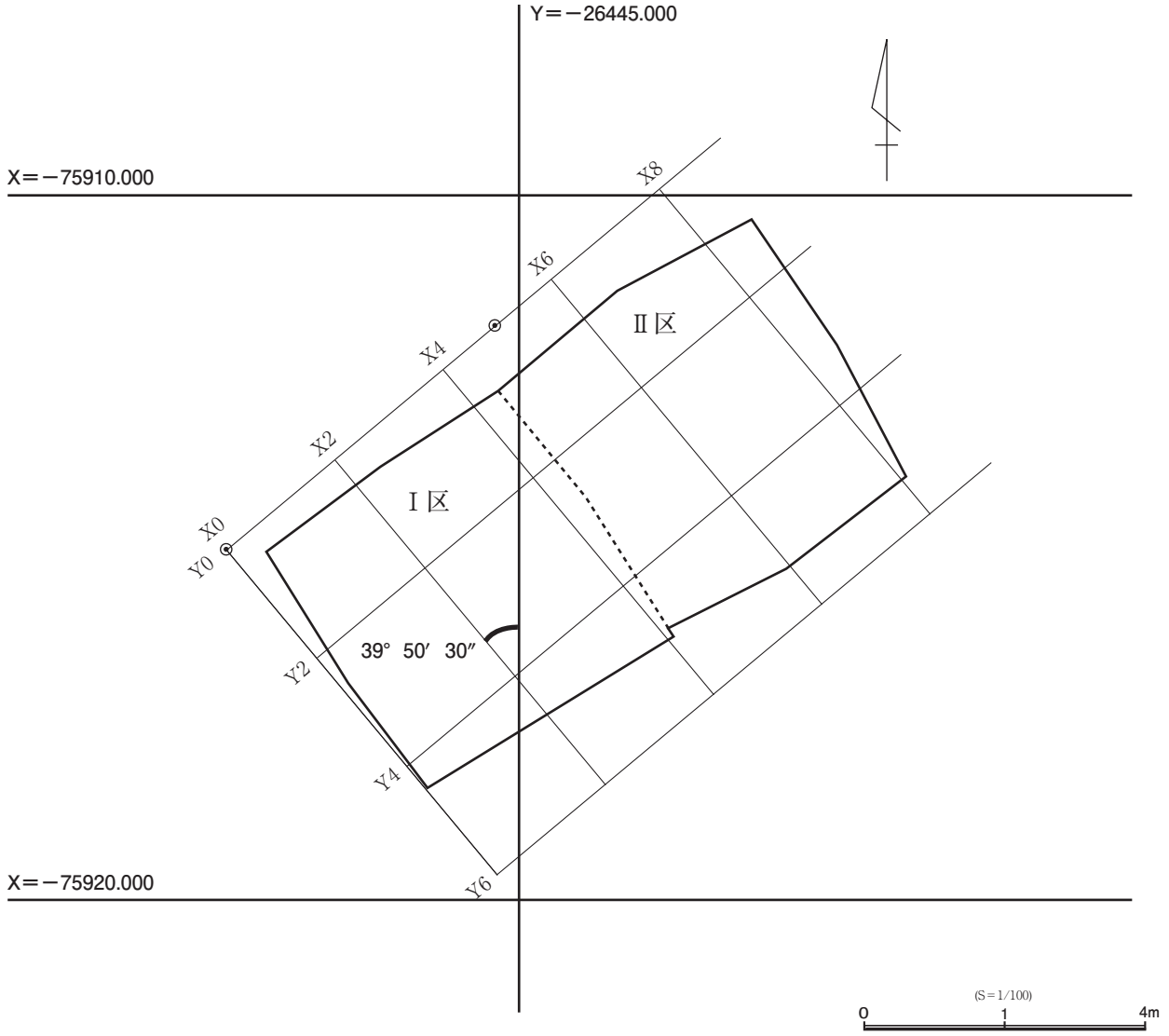


図３　グリッド設定図

第３節　調査地の堆積土層（図４）

遺跡の堆積土層はⅠ区北壁・西壁、Ⅱ区北壁・東壁・西壁で採取した。図中トーンで示した部分は土丹地形層である。１～４層は近現代の堆積土層である。５・６層は土丹粒子を混入する粘質土で遺物を包含している。８層（土丹地形）上が本遺跡に遺存する最も新しい生活面・中世第１面である。８層は土丹を密につき固めた整地層で、Ⅱ区南側を除き、調査区内に安定した広がりを見せている。第２面から第３面にかけては部分的な土丹地形（10・12・14・17・21層）が重なって検出されており、ほぼ同時期に小規模な造成が連続して行なわれたものと思われる。層序の上では、２枚の土丹地形（14・17層）が途切れる比較的軟弱な南側部分に10・12層が貼り増しされたものと理解される。10・12層上を第２面、14層上を第3a面、17層上を第3b面とした。平面的には各々の地形面と検出遺構の時間的な対応関係の把握が困難であったため、ある程度まとめて調査している。第４面は23・24層により構成される強固な土丹地形面である。本層下から土層採集地点が変更されたため、層厚が薄く記録されているが、径が数10㎝を超える大型土丹塊による地形層である。第５面は土丹地形（27～30層）上を5a面、地形下を5b面として調査している。中世の最終生活面と考えられる5b面構成土の下は、Ⅱ区に堆積する33層にかわらけ片・炭化物等が含まれていることから、中世の堆積土層と思われる。33～35層下の第６面とした調査面は古代の遺構確認面である黒色弱粘質土層の上面である。

土層説明

１層		現代の盛り土。（表土層）
２層	茶褐色粘質土層	1～5㎝大の土丹が混入する。（表土層）
３層	灰色粘土層	水田耕作土（表土層）
４層	茶色シルト層	混入物をほとんど含まない。しまりなし。（表土層）
５層	茶褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ細片・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりなし。（包含層）
６層	茶褐色粘質土層	3～10㎝大の土丹をまばらに含む。しまりなし。
７層	茶褐色粘質土層	混入物を含まない。シルト気味。
８層	土丹地形層	
９層	茶褐色シルト層	
10層	土丹地形層	
11層	灰茶色シルト層	土丹粒子・炭化物を含む。しまりあり。
12層	土丹地形層	
13層	灰茶色シルト層	混入物を含まない。しまりあり。
14層	土丹地形層	
15層	灰茶色シルト層	土丹粒子・炭化物を含む。しまりあり。
16層	灰黄色粘質土層	土丹粒子・炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。
17層	土丹地形層	
18層	灰黄色シルト層	混入物を含まない。しまりあり。
19層	茶黄色粘質土層	粉砕土丹・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりあり。
20層	茶色砂質土層	かわらけ細片・炭化物を含む。しまりなし。
21層	土丹地形層	
22層	茶黄色粘質土層	粉砕土丹・炭化物を混入する。粘性ややあり。しまりあり。
23層	土丹地形層	
24層	土丹地形層	
25層	茶色砂質土層	7～8㎝大の土丹、炭化物・貝粒子を含む。粘性なし。良くしまる。
26層	茶褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ片・炭化物を含む。粘性あり。しまりに欠ける。
27層	土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
28層	暗茶褐色シルト層	
29層	土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
30層	土丹地形層	比較的弱い地形層。土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。良くしまる。
31層	灰褐色粘質土層	土丹粒子・かわらけ細片を混入する。粘性あり。しまりややあり。
32層	茶色砂質土層	黄褐色砂を帯状に混入する。
33層	茶褐色砂質土層	土丹粒子・かわらけ片・炭化物を含む。粘性あり。しまりに欠ける。
34層	茶色砂質土層	黒色粘土を少量混入する。黒色砂・貝粒子を多く含む。粘性なし。しまり強い。
35層	茶色砂質土層	土丹粒子・貝粒子・炭化物を含む。粘性なし。しまりあり。

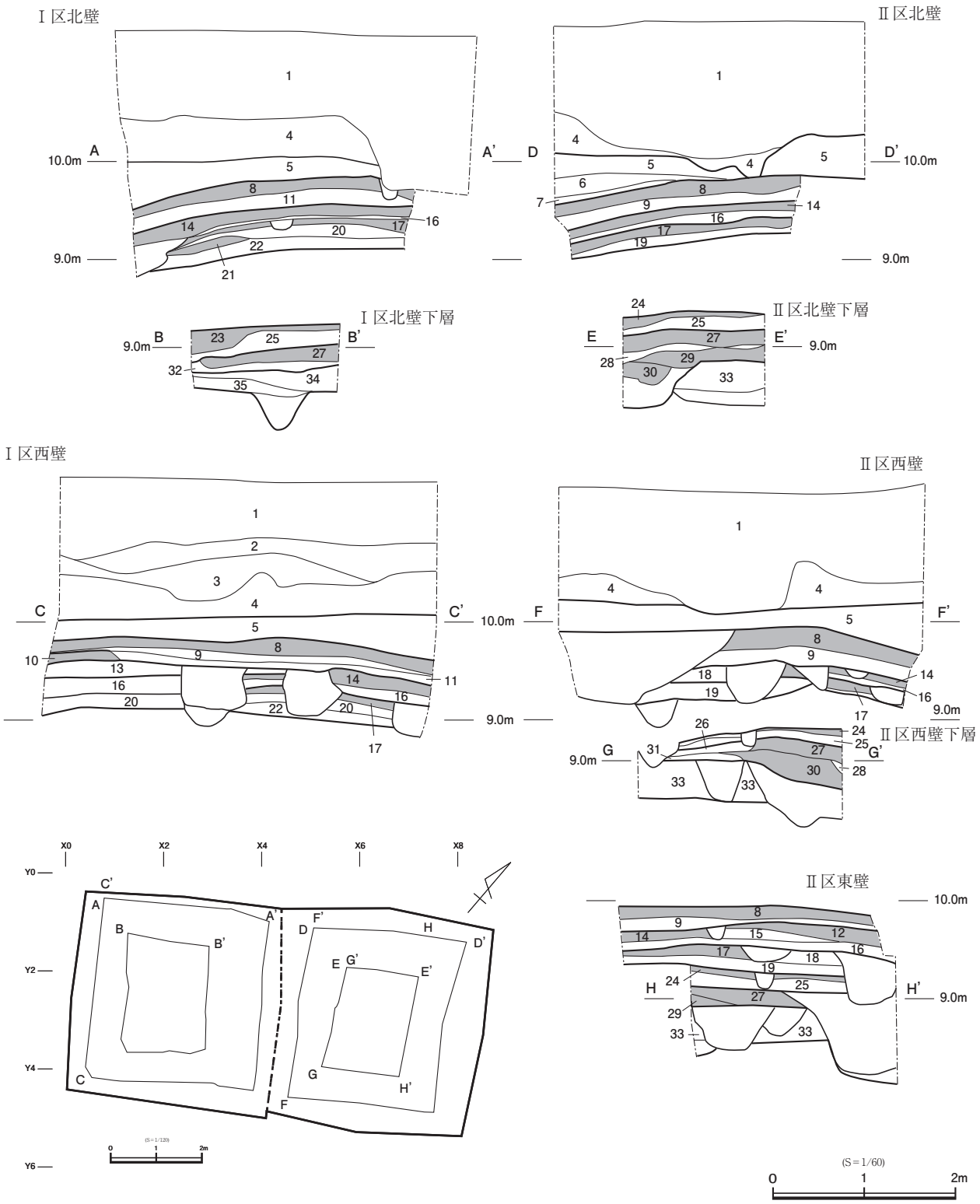

Ⅰ区北壁
Ⅱ区北壁
Ⅰ区北壁下層
Ⅱ区北壁下層
Ⅰ区西壁
Ⅱ区西壁
Ⅱ区西壁下層
Ⅱ区東壁
10.0m
9.0m
(S＝1/60)
0
1
2m

図４　調査地の堆積土層

第三章　発見された遺構と遺物

第１節　中世第１面（図５～８）

第1面は土丹を密につき固めた地形層を構成土とする。海抜9.80～9.95m付近に比較的平坦で安定した地盤を広げるが、Ⅰ区・Ⅱ区とも調査区の北西角付近が緩く落ち込んでいる。Ⅰ区9.60m、Ⅱ区9.66mと周囲より20～30cmほど低くなっており、この傾向はさらに下層に位置する生活面から踏襲されている。この付近は4面以下では調査範囲から外れてしまったために確認はできなかったが、5面以下の砂質土が基盤となる層辺に何らの落ち込み(遺構)が存在し、その影響で地盤が沈下したものかもしれない。Ⅱ区南側は構成土中の土丹の量が疎らでやや軟弱である。検出された遺構は土坑2基、ピット13口である。

土坑１（図６）

X4,Y2付近に位置する。東側は調査区外に続く。検出された規模は70×34cmまで、深さは20cmで底面高は9.73mである。

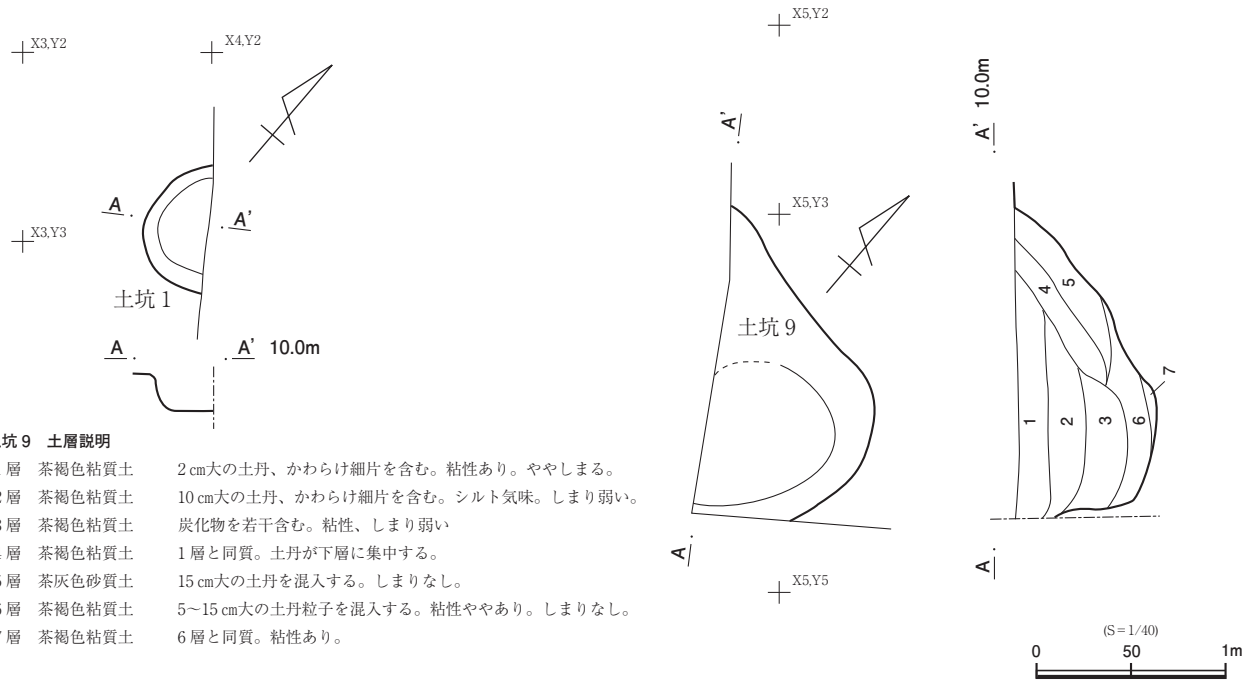
土坑９（図６）

X5,Y4付近に位置する。西側は調査区外に続く。検出された規模は167×89cmまで、深さは75cmで底面高は9.15mである。

ピット（図５）

13口検出されている。P106は形態的に不安があるが、複数柱穴の重複かもしれず、性格不明の小穴としてピットに含めた。P101・P1・P107・P109は、西から順に200cm・190cm・193cmの距離でほぼ直線上に位置するが、明確なセット関係とは言い切れない。個々の概要は1面ピット表を参照されたい。

図５　１面遺構配置図



土坑 9　土層説明

1 層	茶褐色粘質土	2 ㎝大の土丹、かわらけ細片を含む。粘性あり。ややしまる。
2 層	茶褐色粘質土	10 ㎝大の土丹、かわらけ細片を含む。シルト気味。しまり弱い。
3 層	茶褐色粘質土	炭化物を若干含む。粘性、しまり弱い
4 層	茶褐色粘質土	1 層と同質。土丹が下層に集中する。
5 層	茶灰色砂質土	15 ㎝大の土丹を混入する。しまりなし。
6 層	茶褐色粘質土	5～15 ㎝大の土丹粒子を混入する。粘性ややあり。しまりなし。
7 層	茶褐色粘質土	6 層と同質。粘性あり。

図６　１面検出遺構

表２　１面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（㎝）	底面標高（m）	備考
P　1	40×25×29	9.56	
P　2	27×27×36	9.50	
P　3	43×35～×33	9.55	P4 との新旧不明
P　4	46×38～×29	9.54	P3 との新旧不明
P101	32×29×14	9.76	
P102	37×19×27	9.54	
P103	26×22×11	9.71	
P104	18×16～×21	9.69	
P105	13×8～×　?	?	
P106	66×18×36	9.46	2 口以上の重複？
P107	48×35×12	9.74	
P108	26×25×7	9.88	
P109	44×36×33	9.60	

1面・表採出土遺物（図7）

1・2は調査区内で採集されたものである。1は龍泉窯系の青磁碗で線刻により幅広の蓮弁文が描かれている。施釉は薄く、乳白色の微粒子が残る。13世紀初頭以前の所産である。2は白磁の口兀皿で、内底周縁の圏線は比較的深く明瞭である。

3～36は1面検出までに出土した遺物である。3～6はロクロ成形のかわらけである。混入物が多めの紛質胎土で、器壁が厚く直線的に開いている。5は体部中位に弱い稜を持ちやや丸みがある。内外口唇部にススの付着が見られる。6は焼成後に口縁部を鋭利な工具で削り加工している。内外体部から底面にかけてススが付着している。7はロクロ成形の白かわらけで、11図9と同一個体かもしれない。外面はロクロナデの痕跡が明瞭に残る。8は青磁双魚文鉢で龍泉窯系の製品。見込みの貼付け文は尾ひれ部分のみ遺存する。施釉は厚く、表面は摩耗し失透。高台畳付は露胎である。9は青磁筒型香炉の口縁部片で、龍泉系の製品と思われるが特定はできない。内面口縁部下から外面にかけて施釉されている。10は白磁の口兀皿で、底面の釉は拭き取られている。11～14は瀬戸窯の製品で、11は卸皿、12～14は折縁深皿である。胎土はいずれも黄色味のある弱砂質土で比較的軟質。12は漬け掛けと思われる濃緑色を呈する灰釉が厚く施釉されている。外面体部下半は露胎である。口縁部内面の抉り込みは深く鋭い。13は底径18㎝を超えそうである。施釉は薄く、ハケ塗りされたものと思われる。内底は回転を利用した櫛描文が巡っている。外面体部から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。14の施釉も薄くハケ塗りと思われる。外面体部から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施されている。15～20は常滑窯の製品で、15は片口鉢Ⅰ類、16・17は甕、18～20は片口鉢Ⅱ類である。17は甕の胴部片で菊花文が押印されている。18は口縁部横ナデ、体部は斜位のヘラナデが施されており、外面のヘラナデはケズリ気味で粗い。19は内外面とも丁寧にナデ調整され平滑に仕上がる。20は底径14㎝程度になると思われる。調整は内面が強い横ナデ、外面体部は縦位のヘラナデのち指頭ナデで底部脇は指頭痕が残る。底面は離れ砂が付着。内面は使用により、よく摩滅している。21・22は備前窯のすり鉢である。21は丁寧な作りで器表面平滑、22はやや雑な作りで焼成も軟質気味である。23は土器質火鉢で、器表面は暗褐色を呈し、いぶし焼き風。口縁部内面から外面にかけて横ナデ、内面は斜位のナデ調整が施されている。24は輪花型の瓦器質火鉢で、内外面とも縦位のミガキが施されている。25は丸瓦である。胎土は白色粒子を混じえる砂質精良土で硬質に焼き上がる。凸面は細かい縄目叩きで、一部縦方向にナデ消されている。凹面には布目痕・布引痕が残る。凹面側縁・側端・側端凸側角は面取りされている。26・27は常滑窯の甕片を転用したもの。26は全面に擦痕が認められ、側縁部上半と上縁はよく使い込まれている。表裏面周縁は敲打ぎみの使用があったと思われ剥離している。27は欠損面以外の全面に擦痕が認められる。28・29は滑石加工品である。28の左側は中央に突起を残して表裏から削り落とされている。折り切ること意図したものか。右側は斜めに落とされた端部の1箇所を棒状工具で穿っている。上下端は平滑である。29は何らの形状を意図したものとは思われない。表裏面、及び下端に擦り窪めたような工具痕が認められる。30はチャートである。裏面は自然面で、他はほとんどが自然剥離した面と思われる。石材とすべきものかもしれないが表面右側縁に一部敲打したような痕跡が認められる。31～34は鉄製品・釘、35・36は銅銭である。35は楷書で熙寧○寶と読める。熙寧元寶ならば初鋳1068年。36は遺存状態が悪く判読できない。

その他、1面検出までに龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、景徳鎮窯製と思われる青白磁で何らの蓋の取手部分（写真図版10－⑤）、瓦器小片、軽石、獣骨、が出土している。

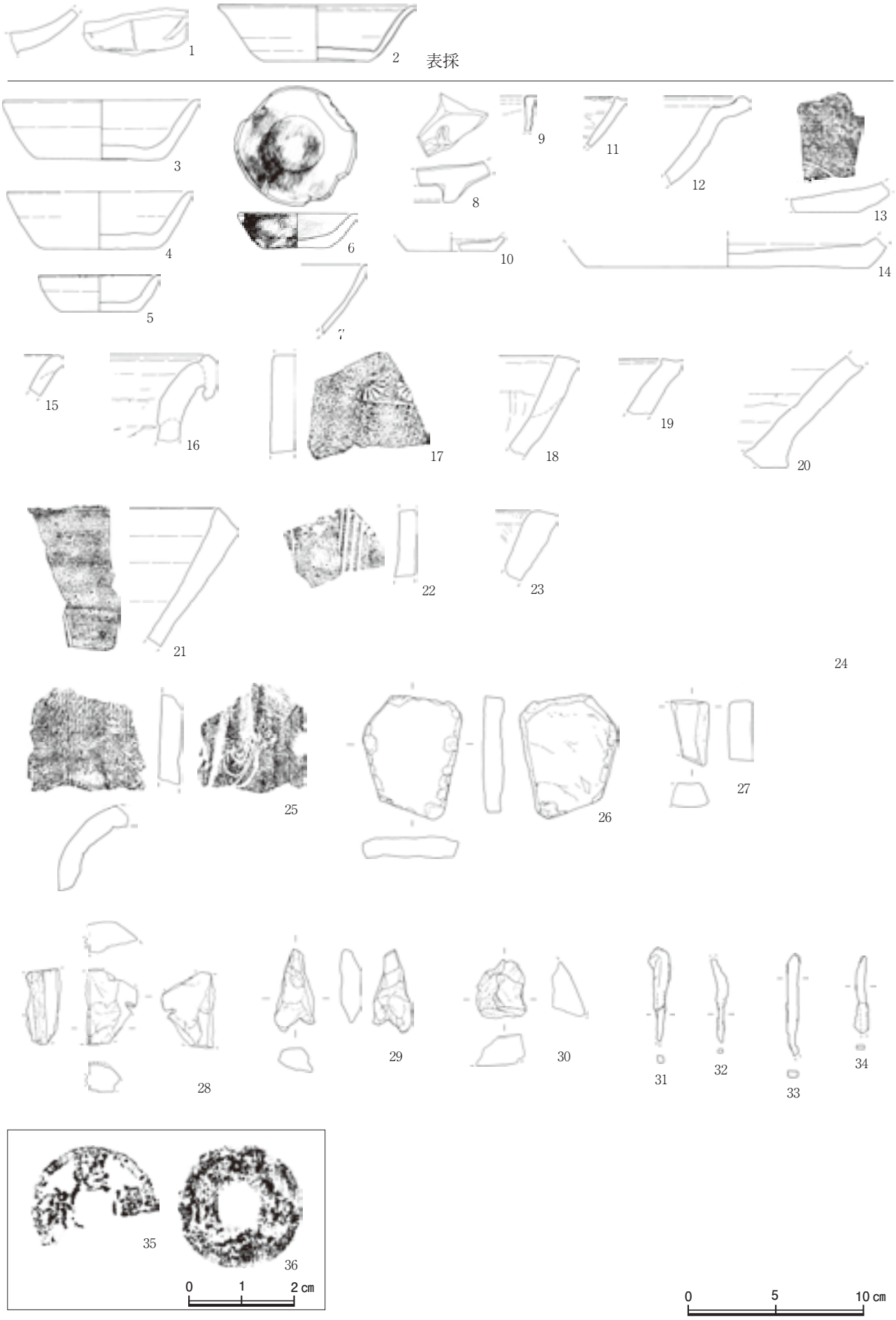


図７　１面・表採出土遺物

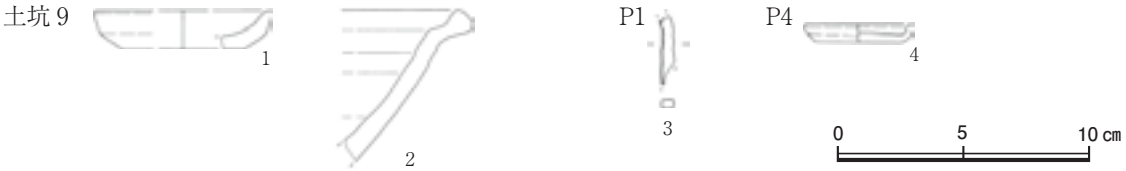


図８　１面遺構出土遺物

１面遺構出土遺物（図８）

１・２は土坑９から出土したもの。１はロクロ成形のかわらけで、器壁厚く背低。体部中位に稜を持っている。２は瀬戸窯の折縁深皿で、口径25cmを超えるものと思われる。胎土は緻密で焼き上がりは比較的硬質、体部下半は回転ヘラケズリが施されている。

３はP1から、４はP4から出土した。３は鉄製品・釘、４は内折れかわらけである。

第２節　中世第２面（図９～11）

調査区南側のみで検出された土丹地形面である。3面上の貼り増し部分と思われる。平面的な調査はⅠ区でのみ行なわれている。Ⅱ区では確実に本期に属する地形や遺構を把握できなかったため3面とともに報告する。

Ⅰ区南側の１面直下、海抜9.7m付近で検出された。土丹の量は少なめで比較的弱い地形である。落ち込み１基、土坑１基、ピット１口が検出されている。

落ち込み１（図９・10）

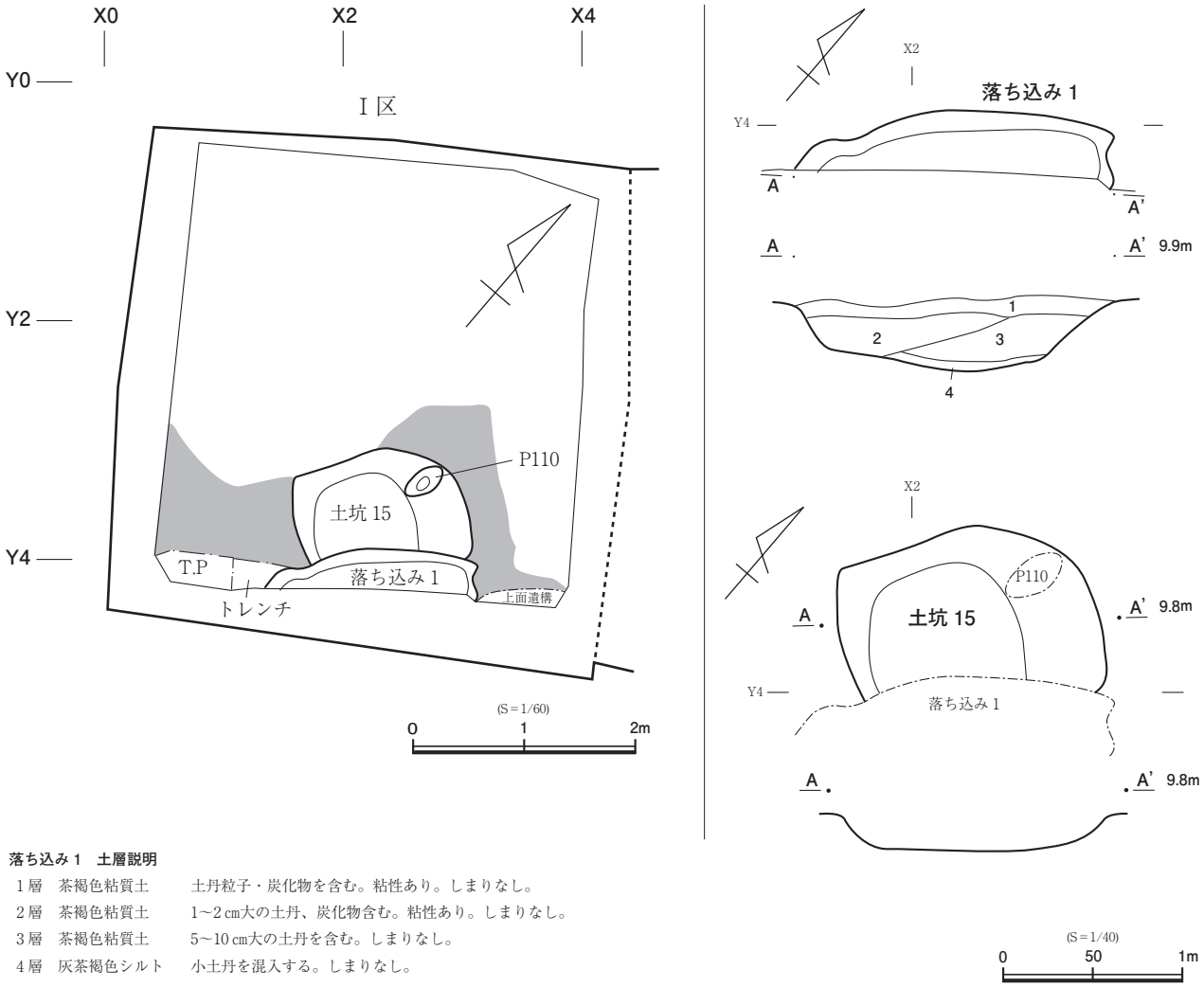
X2,Y4付近に位置する。南側の大半は調査区外へ続く。土坑15を切る。検出された規模は178×36cmまで、深さは40cmで、検出できた底面高は最深部で9.26mである。隣接するトレンチ・遺構と共に掘り上げてしまったため平面不整形となったが、本来は整った円形を呈するものであったと思われる。

土坑15（図９）

X2,Y4付近に位置する。南側を落ち込み１に切られる。P110との新旧関係は不明。検出された規模は146×94cm、深さは19cmで、底面高は9.48mである。後述する3面検出の土坑2とほぼ重なる位置にあることから、掘り直し、あるいは土坑2廃絶後の凹地を利用したゴミ穴の可能性がある。あるいは同一の遺構として扱うべきかもしれない。

ピット（図９）

１口検出されている。P110は土坑15覆土中で確認された。土坑15との新旧関係は不明である。検出された規模は40×16cm、深さは19cmで、底面高は9.50mである。



落ち込み１　土層説明

１層	茶褐色粘質土	土丹粒子・炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。
２層	茶褐色粘質土	1～2㎝大の土丹、炭化物含む。粘性あり。しまりなし。
３層	茶褐色粘質土	5～10㎝大の土丹を含む。しまりなし。
４層	灰茶褐色シルト	小土丹を混入する。しまりなし。

図９　２面遺構配置図・検出遺構

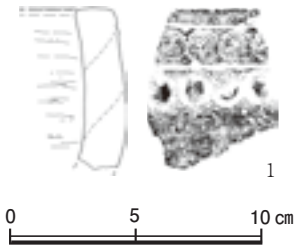


図10　落ち込み１出土遺物

落ち込み１出土遺物（図10）

１は瓦質火鉢である。内外面とも横位のミガキ調整が施され、外面の文様は、ヘラ描き沈線区画内に梅を象った重圏文のスタンプを押印、その下へ連珠文を型押し貼付している。その他、かわらけ小片、常滑窯産の甕胴部片が出土している。

2面・3a面出土遺物（図11）

以下は1面構成土、及び2面・3a面上包含層から出土した遺物である。1～8はロクロ成形のかわらけである。1～6は底径が広く背低気味のものが多い。3は器壁が薄く内湾しながら立ち上がる。7・8は底径が狭い。7は丸みを持って開き、8は器壁薄く碗型の深い器形を採る。9はロクロ成形で底部回転糸切りの白かわらけである。内底周縁は強いロクロ目が残る。内底中央には菊花文のスタンプが押されている。図7－7に胎土、作りが良く似ており、同一個体である可能性が高い。10は白磁の底部片である。小壺など袋物の類と思われる。施釉薄めで内面体部及び高台から底面にかけては露胎である。削り出し高台で底面は回転ヘラケズリが施されている。11・12は瀬戸窯の製品である。11は卸皿で青灰色を呈する灰釉が口縁部内面から外面にかけてハケ塗りされている。外面下半に重ね焼きにより生じたと思われる釉着痕が見受けられる。12は折縁深皿である。外面は口縁部下の一部を除き釉が剥離している。13は常滑窯の甕である。口縁部上向側は灰を被っている。14は平瓦である。胎土は白色粒子を混じえる砂質土で焼き上りはやや軟質。凹面はナデ調整が施されるが側縁に離れ砂が若干残る。凸面はX字状斜格子叩きで表面の離れ砂はよく残る。側端及び側端の凹面側角は面取りされている。また凹面狭端側の端をわずかにナデ落としているよう見受けられる。15は伊予産の中砥である。両端の欠損部を除く5面全てに使用の痕跡が見られる。16～21は鉄製品・釘である。

その他、2面および3a面検出までに、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、白磁口兀皿、景徳鎮窯青白磁梅瓶（写真図版10－③）、獣骨が出土している。

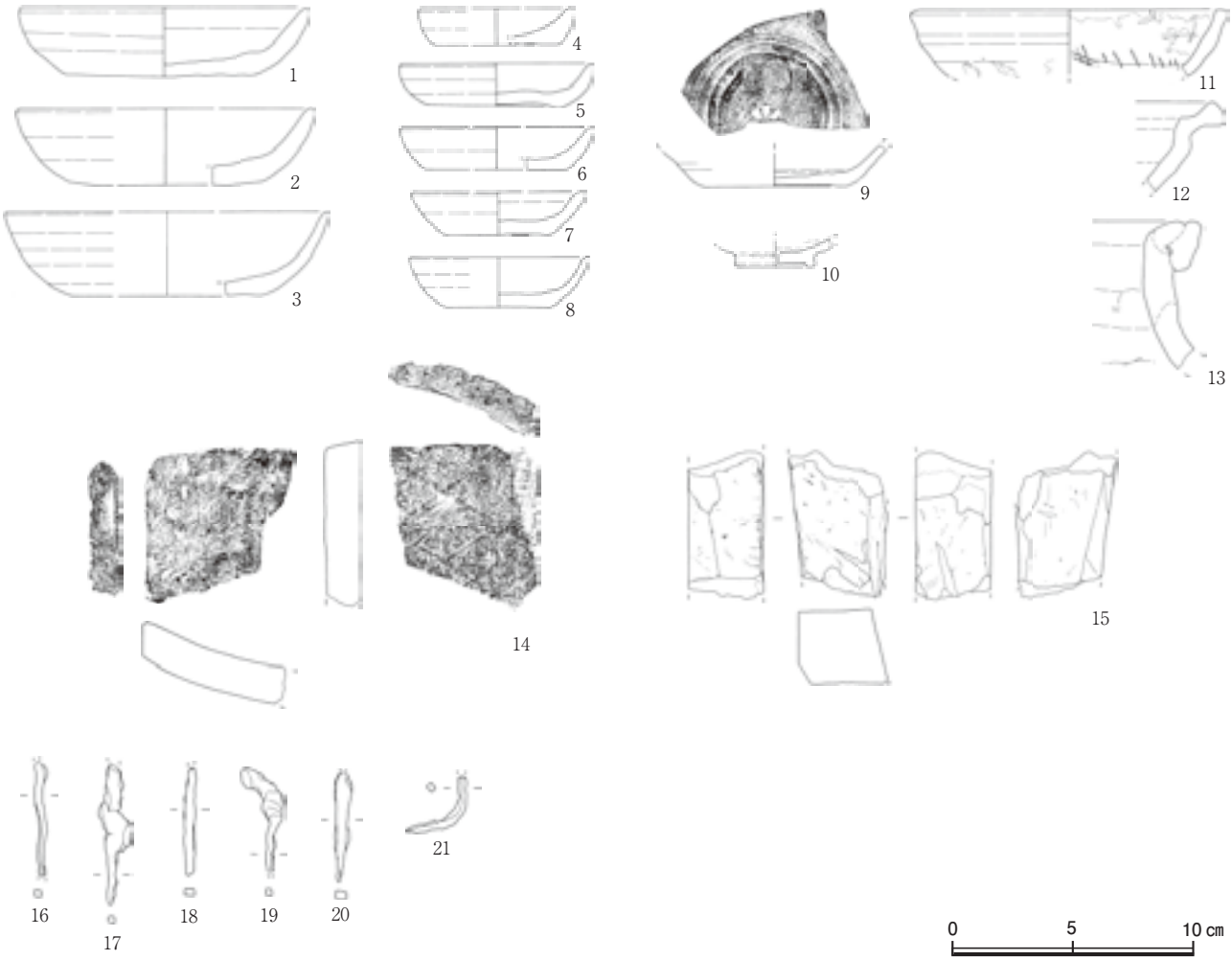


図11　2面・3a面出土遺物

第３節　中世第３面（図 12 ～ 15）

3面では2枚の土丹地形層を主体として構成される新旧2時期の面が確認されている。土丹地形が途切れる調査区南側は、砂質土層・シルト層が基盤になる。上層に位置する新しい面が3a面、下層に位置するより旧い面が3b面である。掘り込み面を明確にできない遺構が含まれるため、a・b面をまとめて図示した。トーンで示した土丹地形面のうちⅡ区の点線より南側の範囲は、2面とするべき貼り増し部分と思われるが、3面と切り離すことが困難なため、この時期に含めた。２面と考えられる地形面上の海抜は9.7 ～ 9.8mである。3a面はⅠ区で海抜9.34 ～ 9.64m、Ⅱ区で9.40 ～ 9.70m付近に位置する。3b面はⅠ区で海抜9.14 ～ 9.34m、Ⅱ区で9.30 ～ 9.54m付近に位置し、a･b面とも１面同様Ⅰ区･Ⅱ区とも、それぞれの調査区の北西角付近が緩く落ち込んでいる。3面で検出された遺構は、溝1条、溝状遺構1基、土坑6基、ピット21口である。

Ⅰ区では北側で検出された溝1が3a面の遺構である。P7･P115は3b面から掘り込まれている。その他、Ⅰ区北東角から土坑3に接して土坑4まで達する段差があり、段差遺構として調査されているが、3a面相当の土丹地形が緩んだ部分を剥がして3b面に達してしまったものと判断した。この段差より南側で検出された遺構のうち、土坑4・5は調査区壁の土層で3a面からの掘り込みが確認出来る。土坑3は北側の段差の本址プランと同心を描く部分が、本来の上端と考え3a面の遺構とした。Ⅰ区で段差の南に位置するそれ以外の検出遺構の掘り込み面は不明である。

Ⅱ区では南側土丹地形上で開口しているP112は2面の遺構と思われる。土坑8、P27・111・132は3a面の遺構である。それ以外は3b面で検出されている。

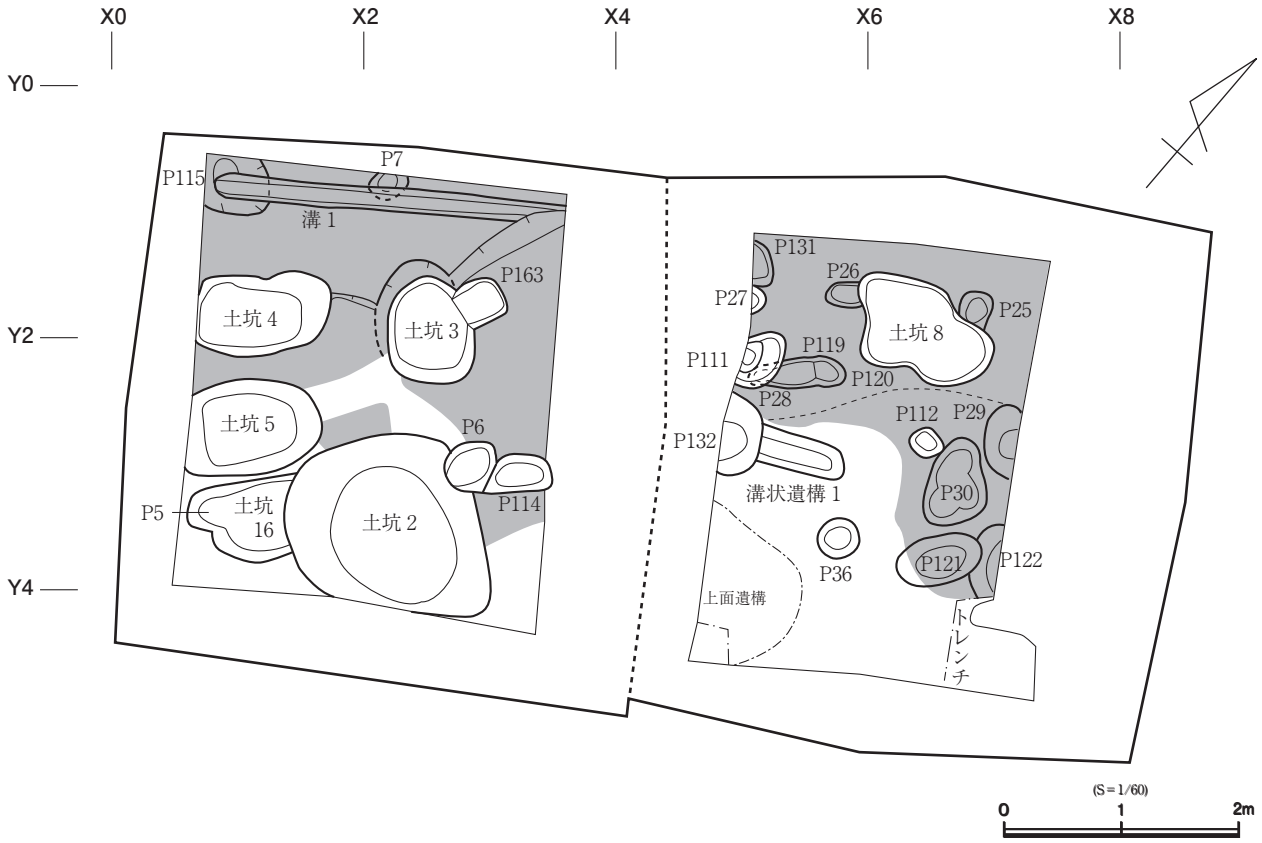
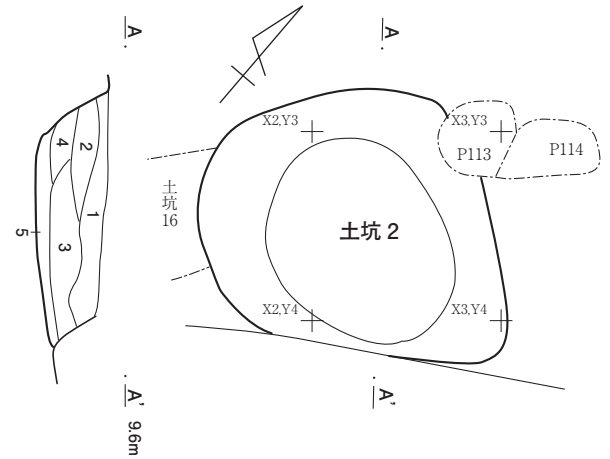
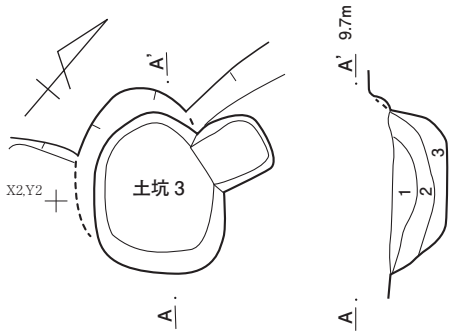


図12　3面（2面）遺構配置図



土坑２　土層説明

１層	黄褐色粘質土	10～15 ㎝大の土丹多く混入。粘性あり。しまりなし。
２層	黄褐色砂質土	かわらけ細片を若干含む。しまりなし。
３層	黄褐色砂質土	黄褐色粘土塊・かわらけ細片・炭化物を含む。しまりなし。
４層	黄褐色シルト	5～7 ㎝大の土丹・炭化物を混入。しまりなし。
５層	暗茶褐色シルト	炭化物を混入する。しまりなし。

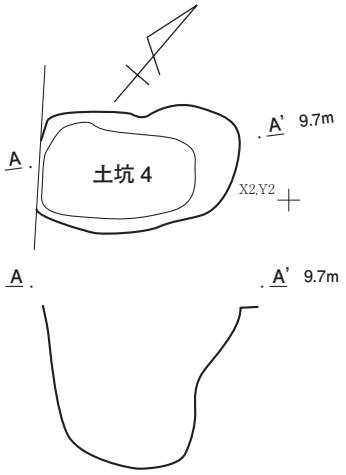


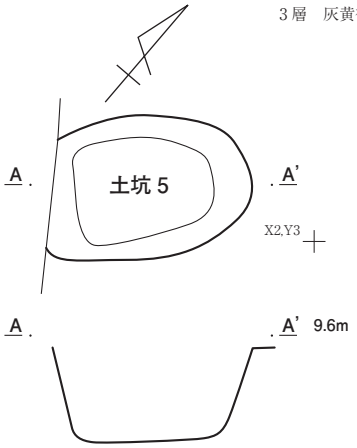
土坑３　土層説明

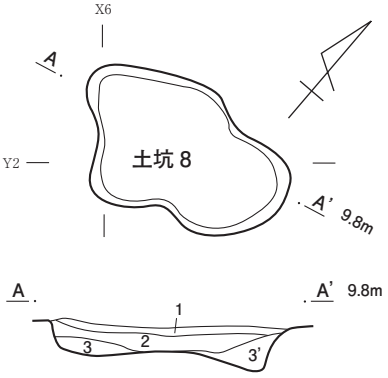
１層	暗茶褐色粘質土	炭化物・土丹粒子を混入。粘性あり。しまりなし。
２層	暗茶褐色粘質土	１層と同質。褐鉄分が強い。
３層	暗茶褐色粘質土	１層と同質。ややしまる。

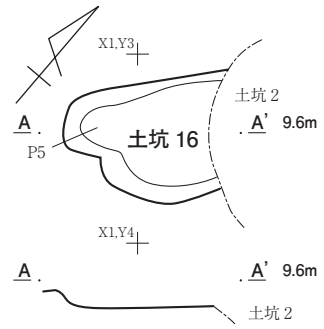
土坑８　土層説明

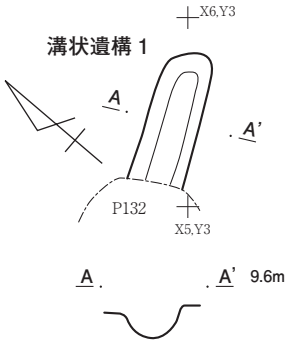
１層	灰黄褐色粘質土	炭化物・２㎝大の土丹粒子を混入。しまりなし。
２層	灰黄褐色粘質土	かわらけ片・炭化物・1～2 ㎝大の土丹粒子を非常に多く含む。しまりなし。
３層	灰黄褐色粘質土	混入物がほとんどなく、シルト気味。しまり弱い。











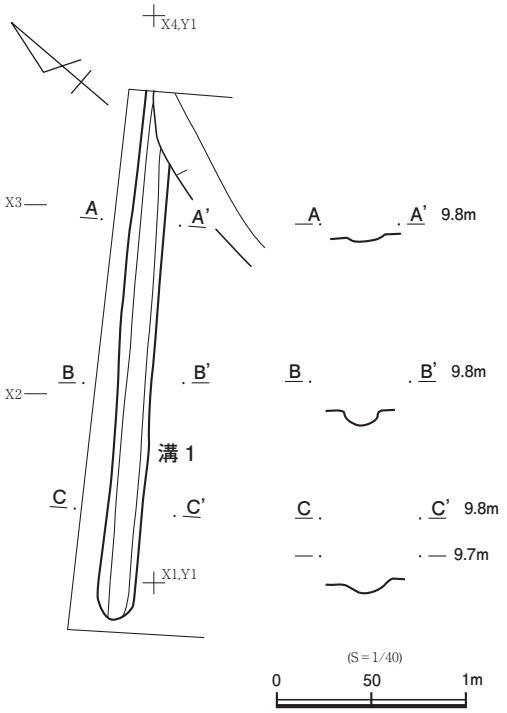


図13　３面検出遺構

溝１（図13）

Ⅰ区北側3a面で検出された。東側は段差により失われているが調査区外へ延びている。西側は調査区内で途切れており、西壁土層でも確認できない。軸方向はＮ－54°－Ｅで、検出された規模は長さ279㎝まで。上端幅は17～20㎝、下端幅は7～10㎝、深さは3～7㎝で、底面高は東側で9.63m、西側で9.41mと西側へ傾斜している。本址は土丹面上に穿たれたきわめて浅い掘り込みである。排水を目的とした窪み、あるいは何らの材を据えた跡かもしれない。

溝状遺構１（図13）

X5,Y3付近で検出された。確認面は3b面である。P132に切られる。軸方向はＮ－62°－Ｅで、検出された規模は長さ74㎝、上端幅は29㎝、下端幅は12㎝である。断面U字状を呈し、深さは15㎝、底面高は9.34mでほぼ一定している。

土坑２（図13）

X2,Y3付近に位置する。土坑16とP6との新旧関係は不明である。検出された規模は182×152㎝、深さは40㎝で、底面高は9.14mである。2面検出の土坑15とほぼ重なって位置しており、同一遺構の可能性がある。

土坑３（図13）

X2,Y2付近に位置する。北側の段差部分上（3a面）が本来の掘り込み面と思われる。北東側で重複するP163との新旧関係は不明。検出された規模は86×68㎝、深さは29㎝だが、段差上の掘り込みを含めれば、101×68㎝で、深さ42㎝。底面高は9.23mである。

土坑４（図13）

X1,Y2付近に位置する3a面からの掘り込みである。検出された規模は105×63㎝まで、深さは86㎝で、底面高は8.72mである。覆土は概ね3層に分けられ、上層はかわらけ細片・炭化物等を含むしまりのない粘質土で、中層は径20cmを超える土丹塊を投げ込んで埋めた層。下層はかわらけ片を含む茶褐色シルト層である。

土坑５（図13）

X1,Y3付近に位置する3a面からの掘り込みである。検出された規模は115×75㎝まで、深さは50㎝で、底面高は9.05mである。覆土は暗茶褐色粘質土を基調とする。覆土中から、ほぼ完形と言えるかわらけが5枚出土しているが、検出状況は不明である。

土坑８（図13）

X6,Y1付近に位置する3a面からの掘り込みである。P25・26切る。検出された規模は120×83㎝、深さは25㎝で、底面高は9.45mである。

土坑16（図13）

X1,Y3付近に位置する。西側をP5に切られる。土坑2との新旧関係は不明である。検出された規模は74×65㎝まで、深さは9㎝で、底面高は9.46mである。

ピット（図12）

ピットは21口検出されているが、セット関係が明確な並びは見出せない。個々の概要は3面ピット表を参照されたい。

表３　３面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（㎝）	底面標高（m）	備考
P　5	31～×33×10	9.44	掘り込み面：不明／土坑 16 との新旧不明
P　6	44～×39～×22	9.29	掘り込み面：不明／土坑 2、P114 との新旧不明
P　7	25～×23×11	9.39	掘り込み面：3b 面／溝 1 より旧
P 25	40×27×15	9.37	掘り込み面：3b 面／土坑 8 より旧
P 26	38×19×16	9.30	掘り込み面：3b 面／土坑 8 より旧
P 27	22×11～×9	9.37	掘り込み面：3a 面
P 28	14×（12）×9	9.41	掘り込み面：3a 面／ P111 より旧、P119 との新旧不明
P 29	57×22～×22	9.25	掘り込み面：3b 面
P 30	73×50×11 ？	9.37	掘り込み面：3b 面／ 3 口のピットが重複・新旧不明
P 36	33×32×20	9.28	掘り込み面：3b 面
P111	44×34～×14	9.46	掘り込み面：3a 面／ P28 より新
P112	26×21×12	9.59	掘り込み面：2 面
P114	46×30×16	9.35	掘り込み面：不明／ P6 との新旧不明
P115	48～×345～×23	8.82	掘り込み面：3b 面／溝 1 より旧
P119	23×（37）×10	9.40	掘り込み面：3a 面／ P28・120 との新旧不明
P120	23×（24）×11	9.39	掘り込み面：3a 面／ P119 との新旧不明
P121	67×39×10	9.35	掘り込み面：3b 面／ P122 と新旧不明
P122	60～×22～×53	8.95	掘り込み面：3b 面／ P121 と新旧不明
P131	35×16～×15	9.15	掘り込み面：3b 面
P132	61×31～×20	9.29	掘り込み面：3b 面／溝状遺構 1 との新旧不明
P163	35～×36×29（40）	9.25	掘り込み面：3a 面？／土坑 3 と新旧不明　※（）内は 3a 面からの深さ

３面遺構出土遺物（図１４）

土坑８

1はロクロ成形のかわらけである。2は白磁の口兀皿で、外底面は露胎である。器表面には細かいキズが多く見られる。3は常滑窯の片口鉢Ⅰ類である。口縁部周辺の内外は厚く灰を被っている。4は鉄製品・釘である。その他、白磁口兀皿の体部片、常滑窯の甕の胴部片が出土している。

土坑２

5 ～ 16はロクロ成形のかわらけである。底径が広く背低のものが多い。5・6の見込みは折れて立ち上がり、外面体部中位に強い稜を持つ。口縁部は肥厚して外反気味で、口唇部は丸く収まる。7・8は開いて立ち上がる。8は器壁が薄い。9・10は器壁薄く内湾して立ち上がる。11は器壁が厚く口縁部は外反し、外面のロクロ目は強い。12 ～ 14は背低で直立気味、15・16は丸みを持って開いている。17は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、18は龍泉窯系青磁無文碗で、18の高台畳付は釉を掻き取られている。19は常滑窯の甕である。20は土錐、21は鉄製品・釘である。その他、瓦の小片が1点出土している。

土坑３

22は鉄製品・釘である。その他、かわらけ小片、常滑窯片口鉢Ⅰ類の小片が1点づつ出土している。

土坑４

23はロクロ成形のかわらけである。底径が広く背低で、体部は直線的で口唇部を尖らせながら外反する。24は瀬戸窯の卸皿である。胎土は灰色を呈し緻密で硬質に焼き上がる。外底面は回転糸切り後、ヘラないし指頭によるナデ調整が施されている。

土坑５

25 ～ 30はロクロ成形のかわらけである。いずれも底径が大きく背低で、25 ～ 27は体部に稜を持ち、

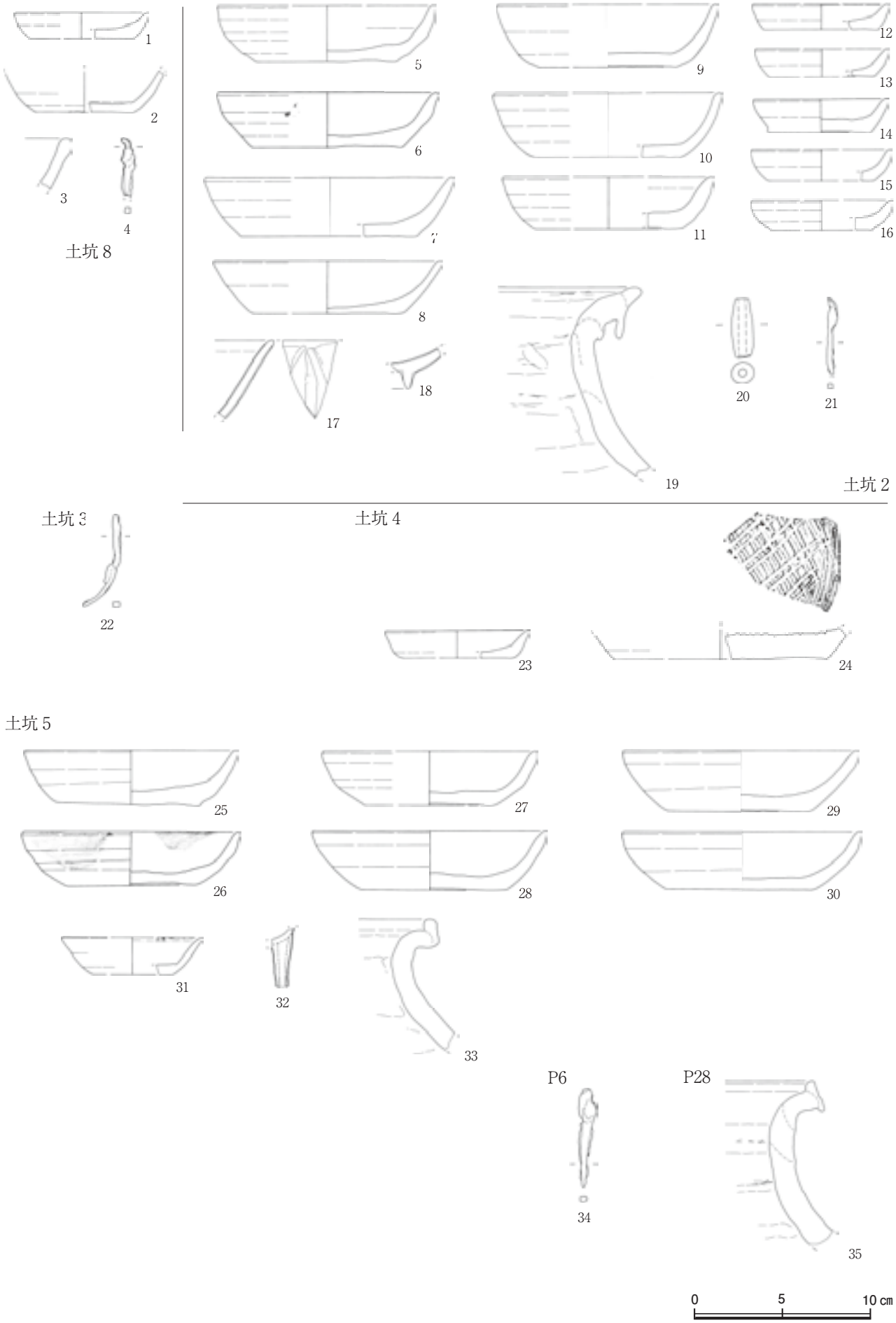


図14　３面遺構出土遺物

外面のロクロ目が強い。26は口縁部から内外体部にかけて、ススが付着している。ススは外面側が濃く、内面側は薄く疎い。28～30は口縁部下に稜を持ち、28・29は開いて立ち上がる。30は器壁が薄めで内湾気味、口縁部は外反して尖る。31は白磁の口兀皿で、底面は露胎である。口唇部内面にタールが付着している。32は磁器で何らの足である。器種は特定できない。胎土は白色を呈し比較的粗い。外面は足設置部まで全面施釉され、内面は露胎である。釉調は鈍い緑灰色で白濁気味、色調から青磁とも思えるが、青磁では類例を知らない形態のため、青白磁の焼成不良品の可能性を提示しておく。33は常滑窯の甕である。胎土は緻密で丁寧にナデ調整され器表面は平滑に仕上げられている。その他、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の小片、獣骨が出土している。

ピット

34はP6から出土した鉄製品・釘、35はP28から出土した常滑窯の甕である。

3b面出土遺物（図15）

以下は3a面構成土、及び3b面上包含層から出土した遺物である。1～16はロクロ成形のかわらけである。1・4・5は見込みが折れて立ち上がる。体部中位下に強い稜を持ち、4・5は外面のロクロ目が強い。6・7は口縁部下に稜を持って口唇部を尖らせながら外反する。7は器壁が薄く、背低で開いている。8は背低で直立気味、9～11は外反して立ち上がり体部中位に稜を持つ。12～15は体部に丸みを持って緩く開いている。16は底径が小さく背高で、器形は「薄手丸深」に似るが胎土が精製されていない。17・18は常滑窯の製品で17は甕、18は片口鉢Ⅱ類である。18は内面から外面口縁部下にかけて横ナデ、外面体部は縦方向にヘラでナデ上げているようだが不明瞭である。19は土器質火鉢である。内外面横ナデ、外面底部脇はヘラによるケズリ気味のナデ、底面は板状の工具が当たった痕跡が見受けられる。20は常滑窯の陶片を転用したもの。器裏面を図示した。全面に擦痕が認められる。21は鉄製品・釘である。

その他、龍泉窯系青磁酒会壺（写真図版10－①）、瀬戸窯の皿類、常滑窯片口鉢Ⅰ類、獣骨が出土している。青磁酒会壺は、灰色味のある白色を呈するやや粗い素地で、施釉は非常に厚く、釉調は緑青色透明で細かい貫が入っている。

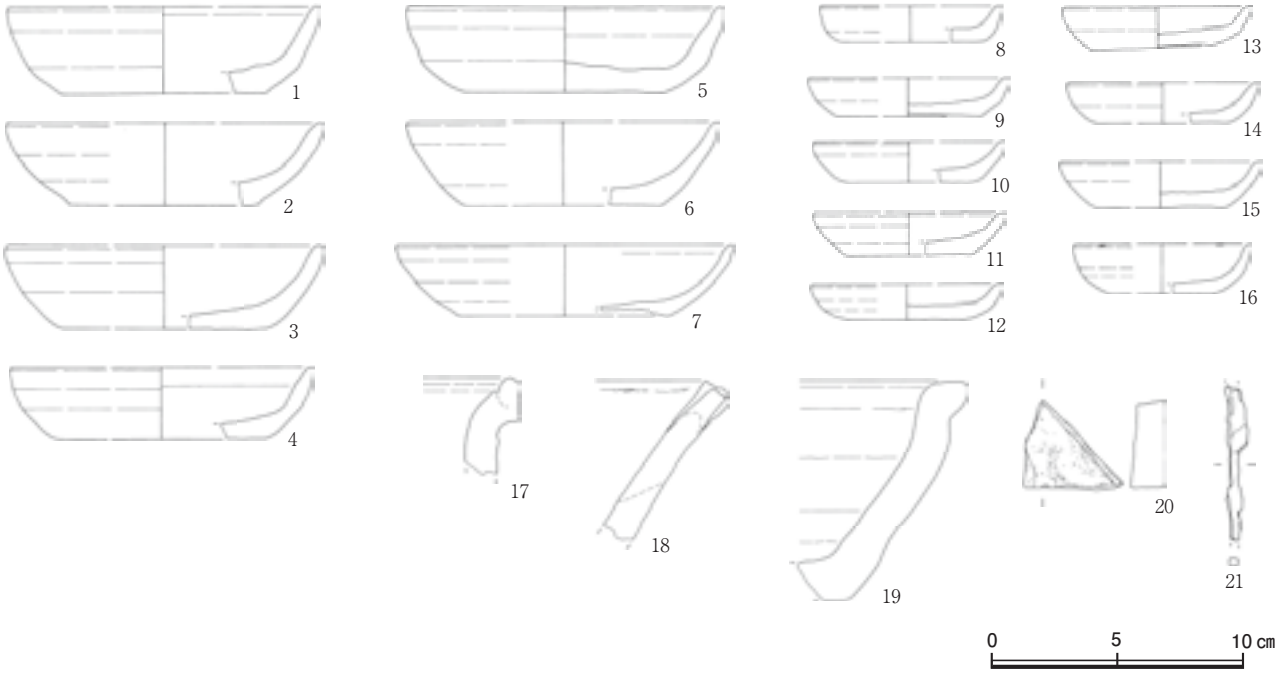


図15　3b面出土遺物

第４節　中世第４面（図 16 ～ 18）

第４面は径数10cmを超える大型土丹塊による地形層を主体として構成され、Ⅰ区で海抜8.97 ～ 9.25m、Ⅱ区で9.28 ～ 9.40m付近に位置する。Ⅰ区南側は上面遺構による削平のため土丹地形面を失ったものと思われる。Ⅱ区は北側が大型土丹塊、南側は土丹を混じえる砂質土が基盤となっている。検出された遺構はピット32口である。

ピット（図17）

検出されたピットからセット関係が明確な並びは見出せない。個々の概要は3面ピット表を参照されたい。

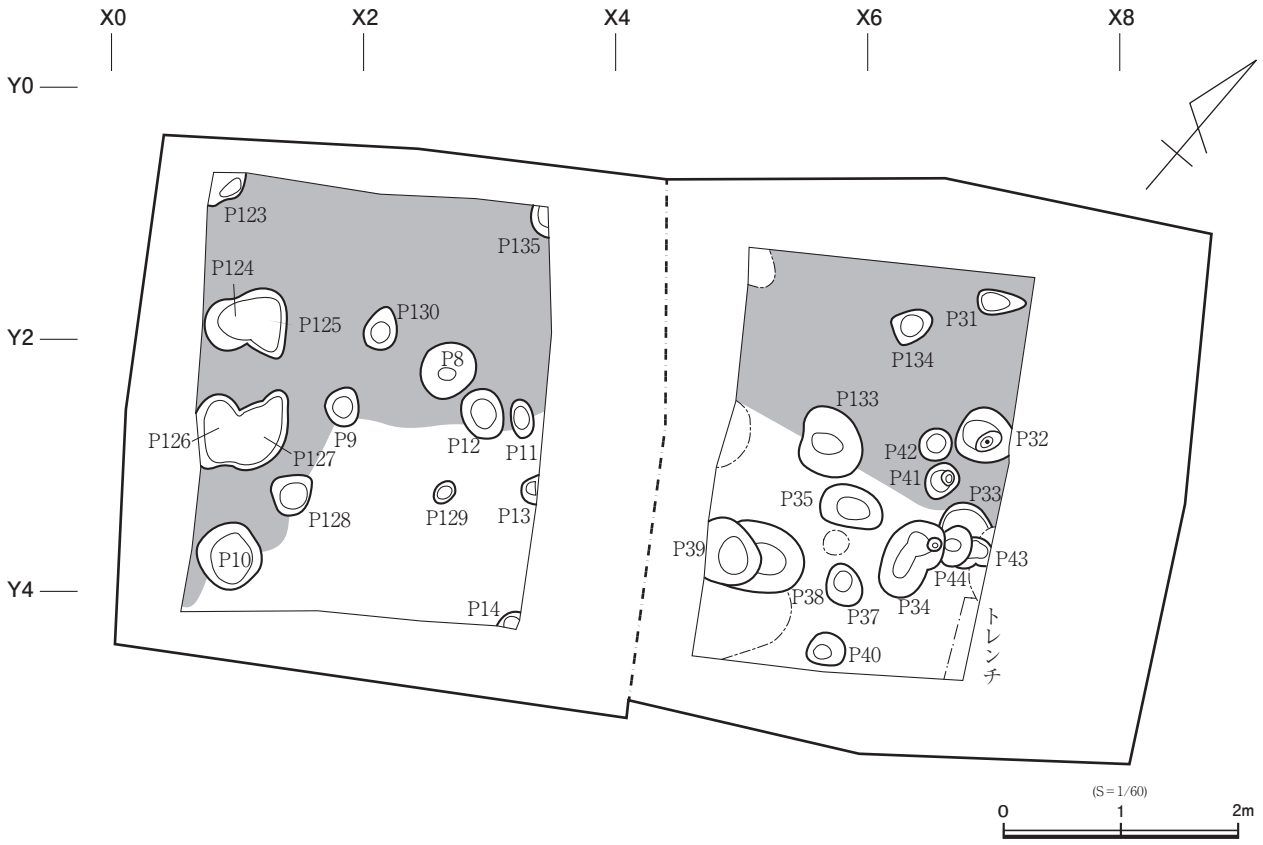


図16　４面遺構配置図

表４　４面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考
P　8	47×43×38	8.86	
P　9	29×26×18	9.01	
P 10	51×49×37	8.80	
P 11	30×16×12	9.08	
P 12	42×34×30	8.87	
P 13	22×11～×8	9.10	
P 14	15～×13～×12	8.97	
P123	25～×25～×17	8.83	
P124	40×36～×30	8.72	P125 との新旧不明
P125	48×30～×44	8.68	P124 との新旧不明
P126	60×28～×20	8.94	P127 との新旧不明
P127	70×42～×20	8.98	P126 との新旧不明、北側別ピットと重複か
P128	32×28×12	9.02	
P129	17×15×15	9.03	
P130	34×25×11	9.08	
P135	23×15～×23	8.94	
P 31	36×19×21	9.17	
P 32	46～×44×43	8.91	
P 33	44～×24～×16	9.24	P43・44・161 との新旧不明
P 34	36×38～×33	8.96	P161 との新旧不明
P 35	50×32×31	8.89	
P 37	30×29×16	9.15	
P 38	60～×54×31	8.89	P39 に切られる
P 39	53×43～×37	8.89	P38 を切る
P 40	29×25×14	9.17	
P 41	28×24×29	9.04	
P 42	25×24×15	9.13	
P 43	20×16～×11	9.20	P33・44 との新旧不明
P 44	33×23～×27	9.04	P33・44・161 との新旧不明
P133	54×51×27	9.00	
P134	32×25×21	9.13	
P161	43×30～×35	8.94	P34・44 との新旧不明

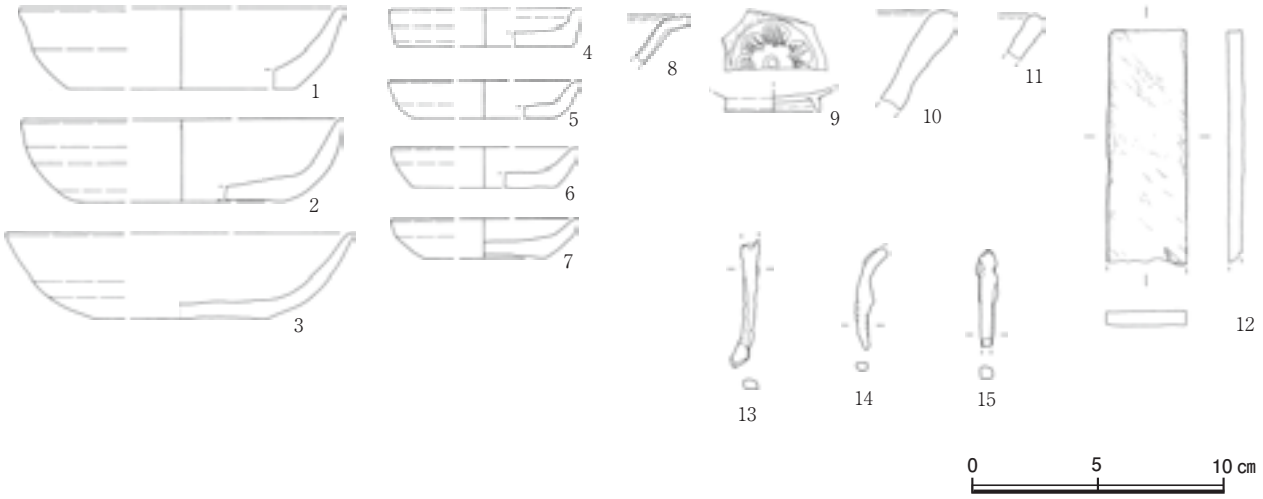


図17　４面出土遺物

４面出土遺物（図17）

以下は3面構成土、及び4面上包含層から出土した遺物である。1～7はロクロ成形のかわらけである。1・2は底径が大きく背低で体部中位に稜を持ち、1は口縁部が外反する。3は器壁薄く、浅く開いた碗型を呈する。4は底径大きく背低で、直立して立ち上がる。5・6も底径大きく、5の見込みは折れて立ち上がる。6は外反して立ち上がり、体部上位に稜を持つ。7は体部上位に強い稜を持ち、口縁部はやや外反する。8は龍泉窯系青磁折縁鉢である。釉調は緑青色半透明で、厚く施釉されている。9は白磁印花文皿で、内底中央に陽刻された梅文を配し、円形の陽刻圏線から外へ放射線が延びている。施釉は薄く、高台畳付と外底面中央の釉は拭き取られている。10・11は常滑窯の片口鉢Ⅰ類である。10は丁寧なロクロナデが施され、口縁部は肥厚している。11は長石粒が多い粗胎で、器表面は濃緑色の自然釉を被っている。口唇端は浅い沈線が巡っている。12は鳴滝・中山産の仕上砥である。下端は欠損、上端・両側縁は制作時の成形痕が残る。表面が砥面として使用されている。裏面は剥離しているが、剥離後も設置面として継続使用されており摩滅している。13～15は鉄製品・釘である。

その他、4面までに龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、渦巻文を陰刻された景徳鎮窯青白磁梅瓶の胴部小片（写真図版10－②）、常滑窯甕、土器質火鉢、獣骨が出土している。

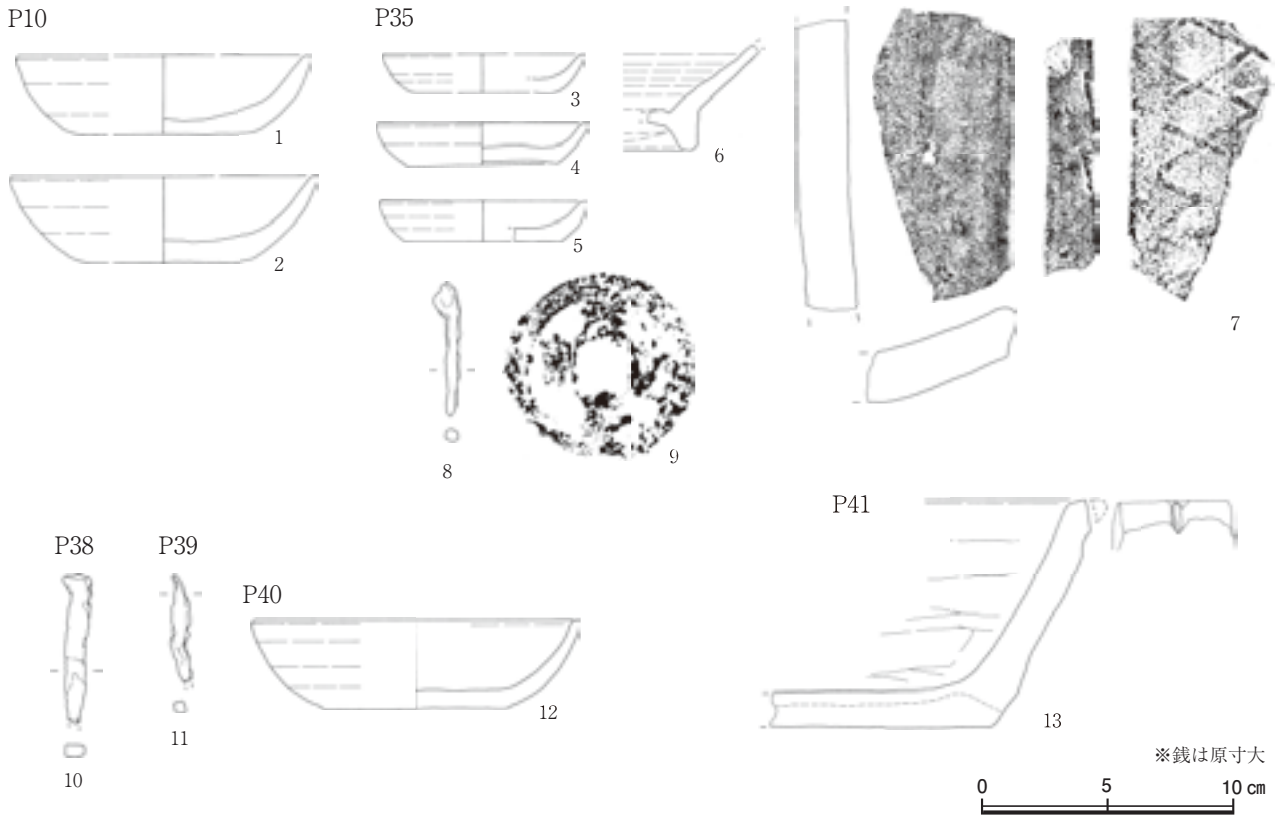


図18　４面遺構出土遺物

４面遺構出土遺物（図18）

1・2はP10から出土したロクロ成形のかわらけである。いずれも浅い碗型を呈し口縁部は弱く外反、2は口縁部下が摘まれて外反している。3～9はP35から出土したもの。3～5はロクロ成形のかわらけで、底径が大きく背低で、3・4は直線的に開き、5は器壁厚手で体部中位に弱い稜を持っている。6は青白磁で水注の底部片と思われる。外面を薄く施釉している。器表面は失透気味で細かいブクが出ており、2次焼成を受けているかもしれない。高台畳付より内側は露胎である。高台畳付は内外から削り込まれて面取りされ、断面三角形を呈する。内面のロクロ目は強い。7は平瓦で、胎土は白色粒子を混じえる砂質土で焼き上りは硬質。凹面はナデ調整が施されている。凸面はX字状斜格子叩きで表面の離れ砂がよく残る。側端から凹面の端にかけては丁寧にナデ調整され、角は丸く収まる。8は鉄製品・釘。9の銭は篆書で元○○寶と読めるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。10はP10から、11はP39から出土した鉄製品・釘である。12はP40から出土したロクロ成形のかわらけで、器壁薄めで浅い碗型を呈する。13はP41から出土した土器質火鉢で、口唇端を欠損するが、焼成後に穿たれた孔が遺存している。被熱により爆ぜたものか、内底面は剥離している。内外面横ナデ、外面体部底部脇は横位のヘラケズリ、底部は中心付近に回転糸切りと思われる痕跡が残る。

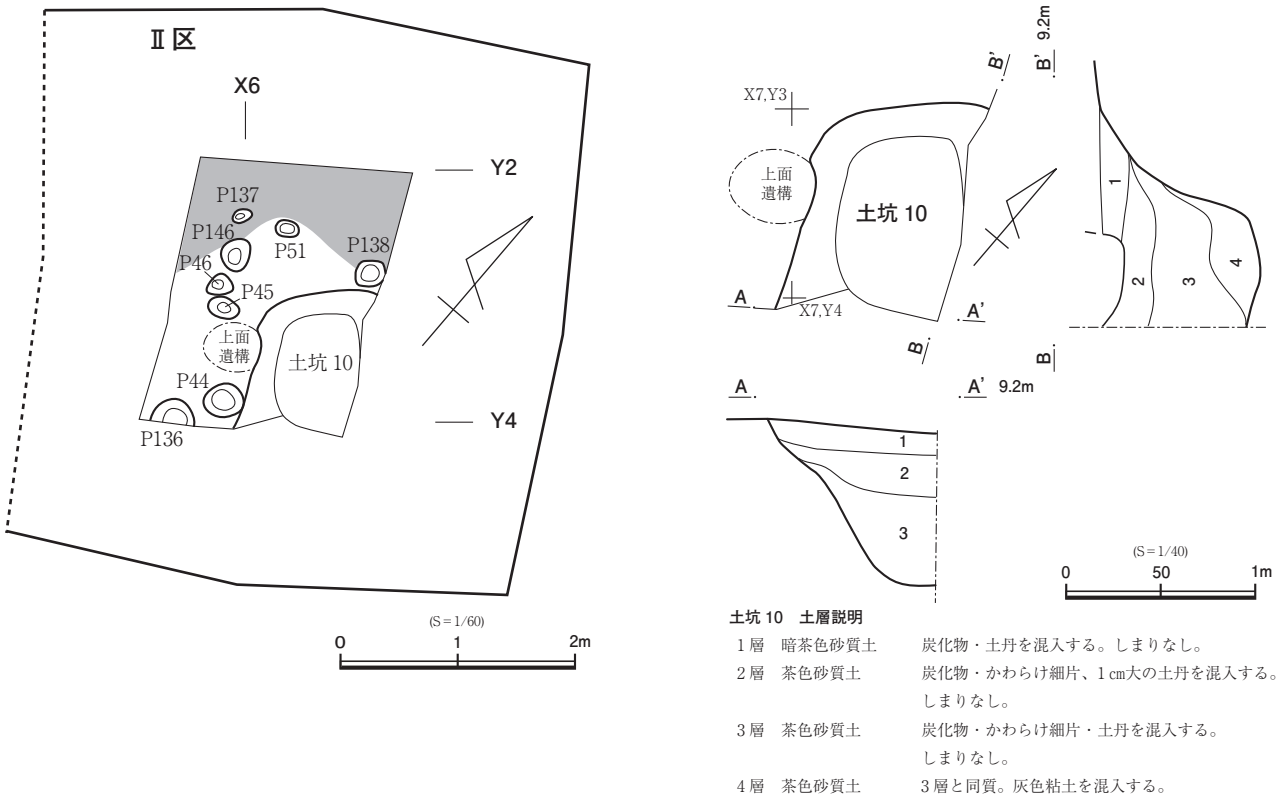
その他、P34から龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗が出土している。

第５節　中世第５面（図 19 ～ 24）

第5面では2時期の遺構検出面を確認している。土丹地形層を主体に構成される上位の面を5a面、土丹地形下の茶褐色砂質土を基盤とする面を5b面とする。

・5a面（図19）

Ⅰ区では海抜8.9 ～ 9.0m付近に位置するが、北壁際のわずかな範囲で検出されているにすぎず、平面的な調査は行なわれていない。Ⅱ区では海抜9.05 ～ 9.19m付近に位置し北側は土丹地形面、南側は土丹粒子･かわらけ片等を混じえる粘質土が基盤となる。検出された遺構は土坑1基、ピット8口である。



土坑 10　土層説明

1 層	暗茶色砂質土	炭化物・土丹を混入する。しまりなし。
2 層	茶色砂質土	炭化物・かわらけ細片、1 cm大の土丹を混入する。しまりなし。
3 層	茶色砂質土	炭化物・かわらけ細片・土丹を混入する。しまりなし。
4 層	茶色砂質土	3 層と同質。灰色粘土を混入する。

図19　5a面遺構配置図・土坑10

土坑10（図19）

X7,Y3付近に位置する5a面からの掘り込みである。検出された規模は118 × 87cmまで、深さは90cmで、底面高は8.08mである。覆土は茶色砂質土を基調とする。

ピット（図19）

ピットは8口検出されているが、セット関係が明確な並びは見いだせない。個々の概要は5面ピット表を参照されたい。

表５　5a面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考
P 44	31×35×33	8.73	
P 45	25×15×15	8.78	
P 46	21×15×17	8.79	
P 51	17×13×19	8.98	
P136	35×19～×7	8.98	
P137	38×19×27	9.54	
P138	23×22×10	9.00	
P146	28×23×27	8.89	

5a面出土遺物（図20）

以下は4面構成土、及び5a面上包含層から出土した遺物である。1はロクロ成形のかわらけで、見込みは折れて立ち上がり、外面体部中位に稜を持つ。2～4は常滑窯の製品である。2は片口鉢Ⅰ類で、口唇部はわずかに灰を被る。3は甕で、胎土中に長石粒が非常に多く含まれる。4は壺類の底部片で、内底面は厚く降灰している。外底面は高台貼付け後周縁ナデ、中央は未調整で目跡が残る。外面高台脇には板状の工具が当たった痕跡が見受けられる。

その他、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗の小片が1点出土している。

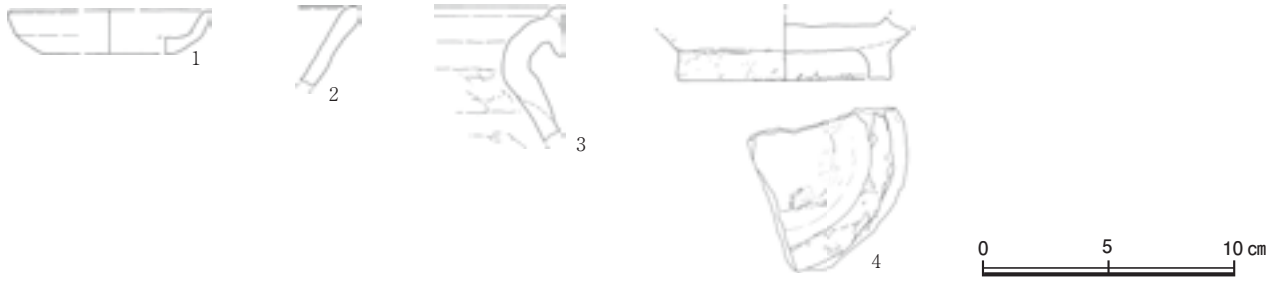


図20　5a面出土遺物

土坑10出土遺物（図21）

1～3はロクロ成形のかわらけである。1は器壁が比較的薄く体部中位に弱い稜を持つ。2・3は底径が大きく背低で、2は丸みを持ち、3は外反気味に立ち上がる。4は常滑窯の甕胴部片で外面には格子文が押印されている。5は加工痕のある滑石鍋の口縁部残欠である。欠損面に一部擦痕が認められる。欠損前の加工痕は、外面口縁部下に削り痕、鍔の上下基部に先端の尖った工具による線状の痕跡、鍔端を刃物で穿った痕跡が認められる。その他、常滑窯の片口鉢Ⅰ類の小片が出土している。

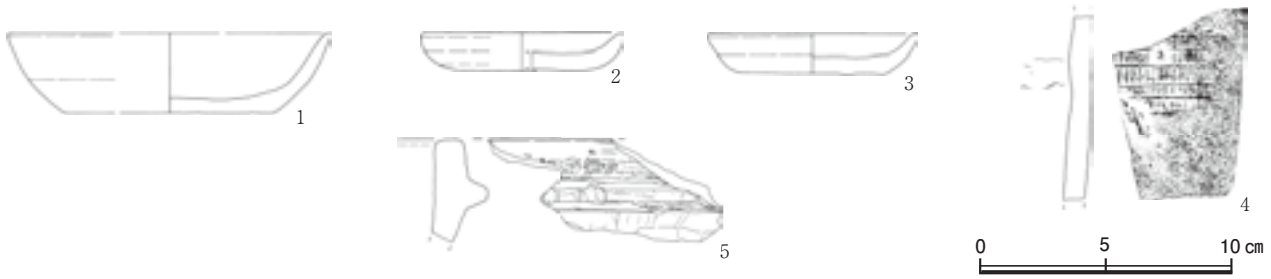


図21　土坑10出土遺物

・5b面（図22）

Ⅰ区で海抜8.74 ～ 8.82m、Ⅱ区で8.76 ～ 8.81m付近に位置する。茶褐色砂質土を基盤層とする生活面である。検出された遺構は土坑5基、ピット20口である。

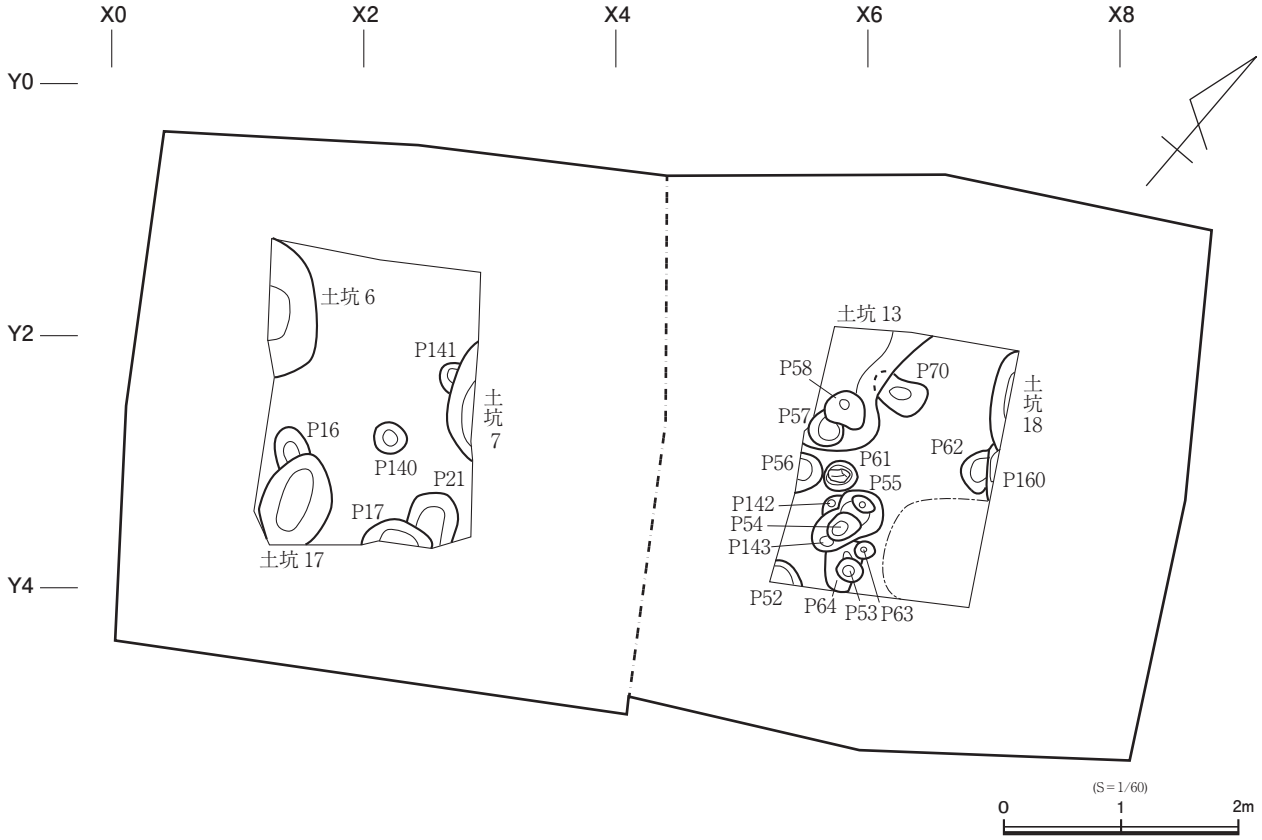


図22　5b面遺構配置図

土坑6（図23）

X1,Y1付近に位置する。検出された規模は110 × 39cmまで、深さは69cmで、底面高は8.19mである。

土坑7（図23）

X3,Y2付近に位置する。P141を切る。検出された規模は96 × 22cmまで、深さは60cmで、底面高は8.23mである。

土坑13（図23）

X6,Y2付近に位置する。検出された規模は102 × 80cmまで、深さは80cmで、底面高は8.28mである。覆土上の窪地は5a面を構成する土丹層で埋められている。

土坑17（図23）

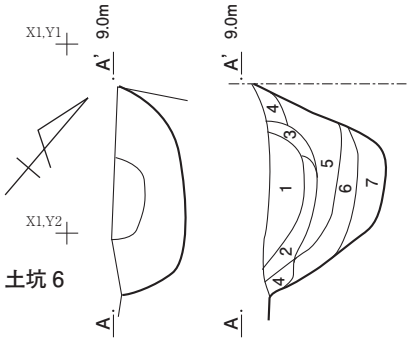
X1,Y3付近に位置する。検出された規模は80 × 56cmまで、深さは42cmで、底面高は8.46mである。

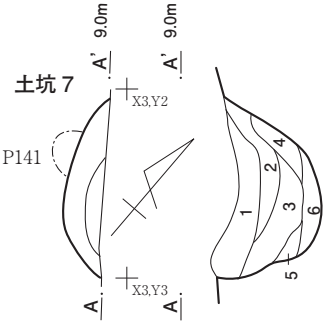
土坑18（図23）

X7,Y2付近に位置する。検出された規模は83 × 15cmまで、深さは48cmで、底面高は8.45mである。

ピット（図22）

ピットは20口検出されているが、セット関係が明確な並びは見いだせない。個々の概要は5面ピット表を参照されたい。



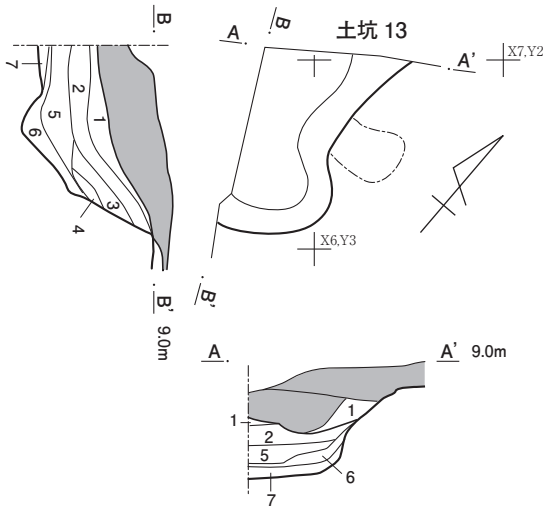


土坑 6　土層説明

1層	灰黄色粘質土	3～5㎝大の土丹、炭化物を混入する。粘性弱い。しまりなし。
2層	灰黄色砂質土	鉄分を含む。しまりなし。
3層	暗灰色砂質土	2～3㎝大の土丹を混入する。しまりなし。
4層	黒茶色砂質土	混入物を含まない。しまり弱い。
5層	灰茶色砂質土	1㎝大の土丹を混入する。しまりなし。
6層	灰色粘土	3㎝大の土丹を混入する。粘性あり。しまりなし。
7層	黒灰色砂質土	貝殻片、炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。

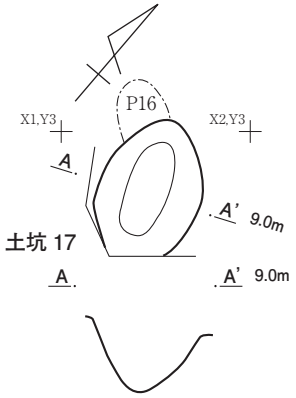
土坑 7　土層説明

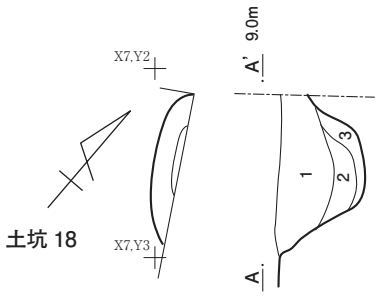
1層	茶色砂質土	貝粒子・土丹粒子を含む。粘性なし。ややしまる。
2層	茶色砂質土	黄砂が若干混入する。しまりなし。
3層	茶色砂質土	灰色粘土・炭化物を含む。粘性ややあり。しまりなし。
4層	茶色砂質土	3層と同質だが、粘性に欠ける。
5層	茶色砂質土	3層と同質だが、炭化物の量が多い。
6層	茶色砂質土	混入物を含まない。しまりなし。



土坑 13　土層説明

1層	暗灰茶色砂質土	炭化物、かわらけ細片を含む。粘性なし。しまりなし。
2層	暗灰茶色砂質土	1層と同質。褐鉄分が多い。
3層	暗灰茶色砂質土	1層と同質。褐鉄分が多い。炭化物を多く含む。
4層	暗灰茶色砂質土	1層と同質。
5層	暗灰茶色砂質土	1層と同質。褐鉄分が多い。灰色粘土を混入する。
6層	暗灰茶色砂質土	5層より灰色粘土が多い。
7層	暗灰茶色砂質土	5層より灰色粘土が多く、灰茶色砂を含む。





土坑 18　土層説明

1層	茶色砂質土	15㎝大の土丹を混入する。粘性なし。しまりなし。
2層	茶色砂質土	灰色粘土を混入する。しまりなし。
3層	暗茶色砂質土	2層と同質。灰色粘土の量が多い。

(S＝1/40)
0　50　1m

図23　5b面検出遺構

表６　5b面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（㎝）	底面標高（m）	備考
P 16	30～×28×15	8.58	土坑 17 との新旧不明
P 17	57×22～×12	8.63	P21 を切る
P 21	40～×38×30	8.44	P17 に切られる
P 52	22～×17～×21	8.59	
P 53	20×20×10	8.70	P64 を切る
P 54	27×19×38	8.42	P143 との新旧不明
P 55	38×30～×31	8.49	P64 を切る。P54・142・143 との新旧不明
P 56	30×19～×26	8.55	
P 57	25×24～×22	8.53	P58 との新旧不明
P 58	33×30×28	8.44	P57 との新旧不明
P 61	25×25×30	8.45	礫（20×10×　？）
P 62	28×26～×13	8.57	P160 との新旧不明
P 63	16×14×8	8.72	P64 を切る
P 64	35～×31×48	8.33	P53・55・63・143 に切られる
P 70	42×39×54	8.19	土坑 13 との新旧不明
P140	25×24×13	8.70	
P141	24×14～×8	8.84	土坑 7 に切られる
P142	21～×13～×　？	？	P55・143 との新旧不明
P143	33～×31×25	8.54	P64 を切る。P54・55 との新旧不明
P160	43～×10～×14	8.57	土坑 18、P62 との新旧不明

5b面出土遺物（図24－1 ～ 10）

1 ～ 10は5a面構成土から出土した遺物である。1から6はロクロ成形のかわらけで、1 ～ 4は底径広めで背低の器形を採る。1は直線的に立ち上がり口縁部は外反、2は体部に丸みがあり口縁部は弱く外反する。3・4は外反して立ち上がり体部上位の弱い稜を経て口唇部は尖る。5・6は丸みを持って浅く開く器形で、6は底径が比較的小さい。7は白磁の口兀皿である体部下半に丸みを持ち、上位は外面口縁部下を沈線状に削り込んで屈曲し外反する。8は常滑窯の片口鉢Ⅱ類で、底径17㎝程度になると思われる。内外面横ナデ、外面体部底部脇は縦位のヘラが当たっている。内面は使用により、よく摩滅している。9は土器質火鉢で口唇内側端は凸帯状を呈する。10は平瓦で、胎土は粘質気味できめ細かい。焼き上がりは気孔多く酸化気味でやや軟質。凹面は斜位のナデ調整で、糸切り痕が残る。凸面はX字状斜格子叩きが施され、表面の離れ砂は粒子が細かい。

その他、龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗、青白磁の瓜型水注（写真図版10－④）の取手基部小片、常滑窯の片口鉢Ⅰ類・甕、獣骨が出土している。龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗は細めの蓮弁を陽刻した体部片で、素地は白色から灰白色を呈し比較的粗め、釉調は明緑青色透明で細かい貫入が入る。青白磁の瓜型水注は遺存する取手部に沈線が3条刻まれており、素地は白色を呈し緻密で粘性がある。釉調は薄青色透明で施釉は比較的薄い。器表面には細かい傷が多く見られる。

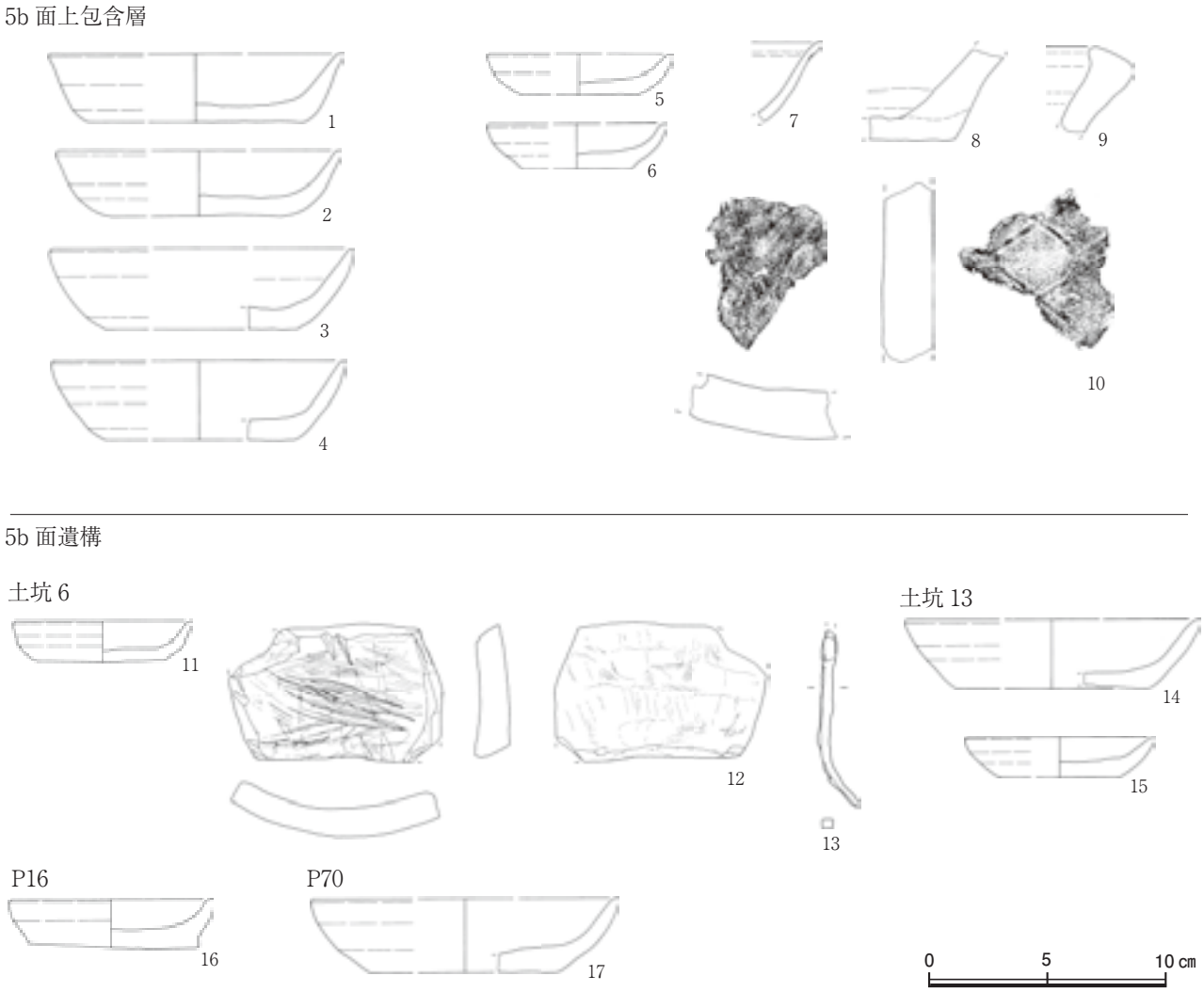


図24　5b面・5b面遺構出土遺物

5b面遺構出土遺物（図24－11 ～ 17）

11 ～ 13は土坑6から出土したもの。11はロクロ成形のかわらけである。見込みは折れて立ち上がり、体部中位に強い稜を持つ。口唇部は外反しながら尖っている。12は滑石鍋片が転用されたもの。側縁は欠損部を除く全周に擦痕が認められ、よく摩滅している。器裏面は擦痕の他、鋭利な工具による線状の痕跡が重なっている。砥石として使用したものか。器表面側には疎い擦痕が認められる。13は鉄製品・釘である。その他、常滑窯の片口鉢Ⅰ類、獣骨が出土している。

14・15は土坑13から出土したロクロ成形のかわらけである。14は体部下半が強いロクロナデのために凹み気味となる。15は丸みを持って浅く開いている。

16はP16から、17はP70から出土したロクロ成形のかわらけである。16は底部が厚く切り残されて高台状となる。底径が大きく、体部は丸みを持つが直立気味である。17も底部が切り残り厚い。体部は丸みを持って浅く開いている。

第６節　調査第６面（図 25 ～ 27）

第6面は古代の遺構確認面である。海抜8.5 ～ 8.6m付近に位置し、黒色弱粘質土層を基盤とする。検出された遺構は溝1条、土坑2基、ピット16口である。溝2は調査区壁土層で確認できる掘り込み面や覆土の状態から古代以前の遺構である可能性が高い。土坑20は古代以前の所産と思われるが、人為的な遺構かどうかは不明である。土坑14は上層に重なる遺構に攪乱されるため掘り込み面が曖昧である。ピットは、P19・20・22 ～ 24・67・69から中世の遺物が出土している。他ピットも古代以前の所産と見なしうる理由が見つからない。この面で検出されたピットのほとんどが上層の中世生活面で掘り込みを見逃した遺構と思われる。

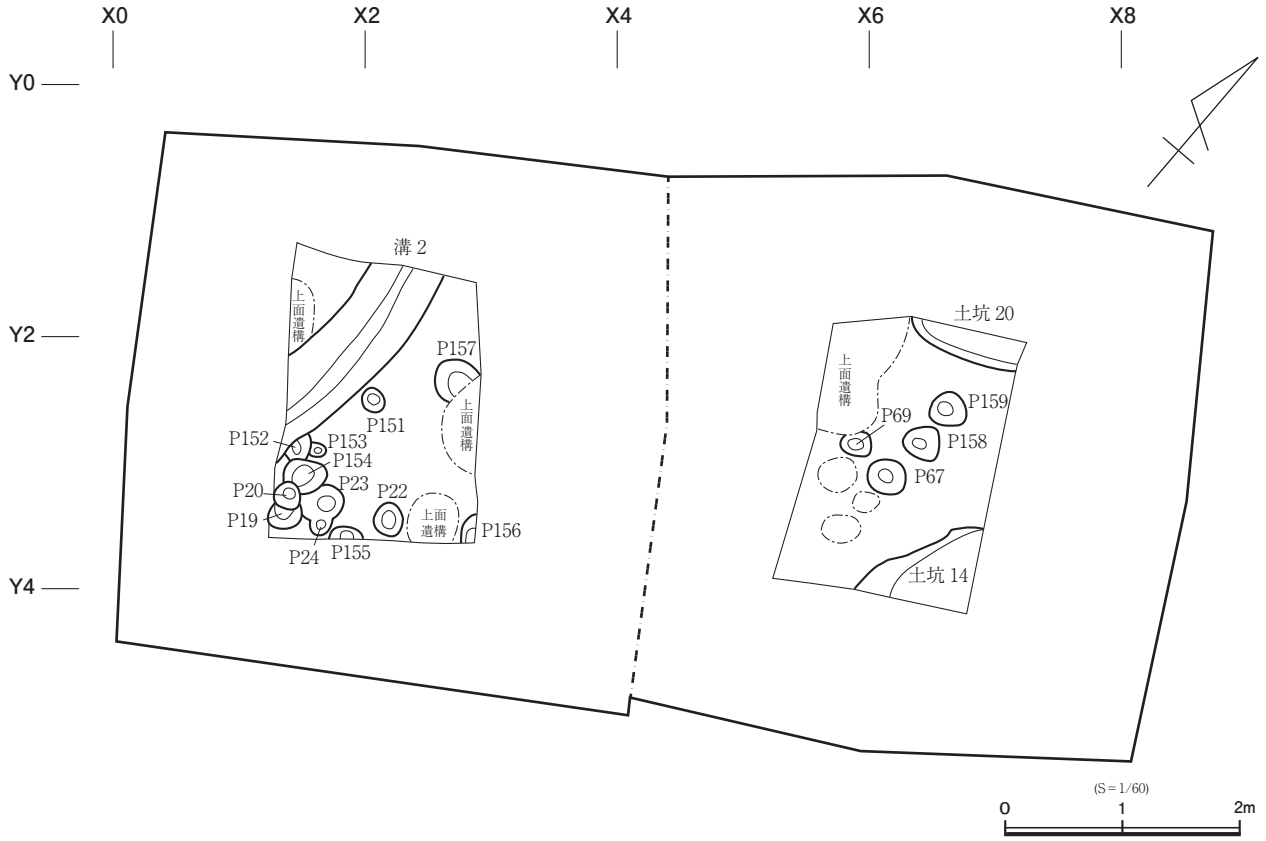


図25　６面遺構配置図

溝２（図26）

X2,Y2付近に位置する。Ⅰ区北西を緩い弧を描いて横切っている。検出された規模は、外周の直線距離で208cmまで。上端56 ～ 58cm、下端7 ～ 13cmで、深さは36cmである。底面高は8.17mで一定している。

土坑１４（図26）

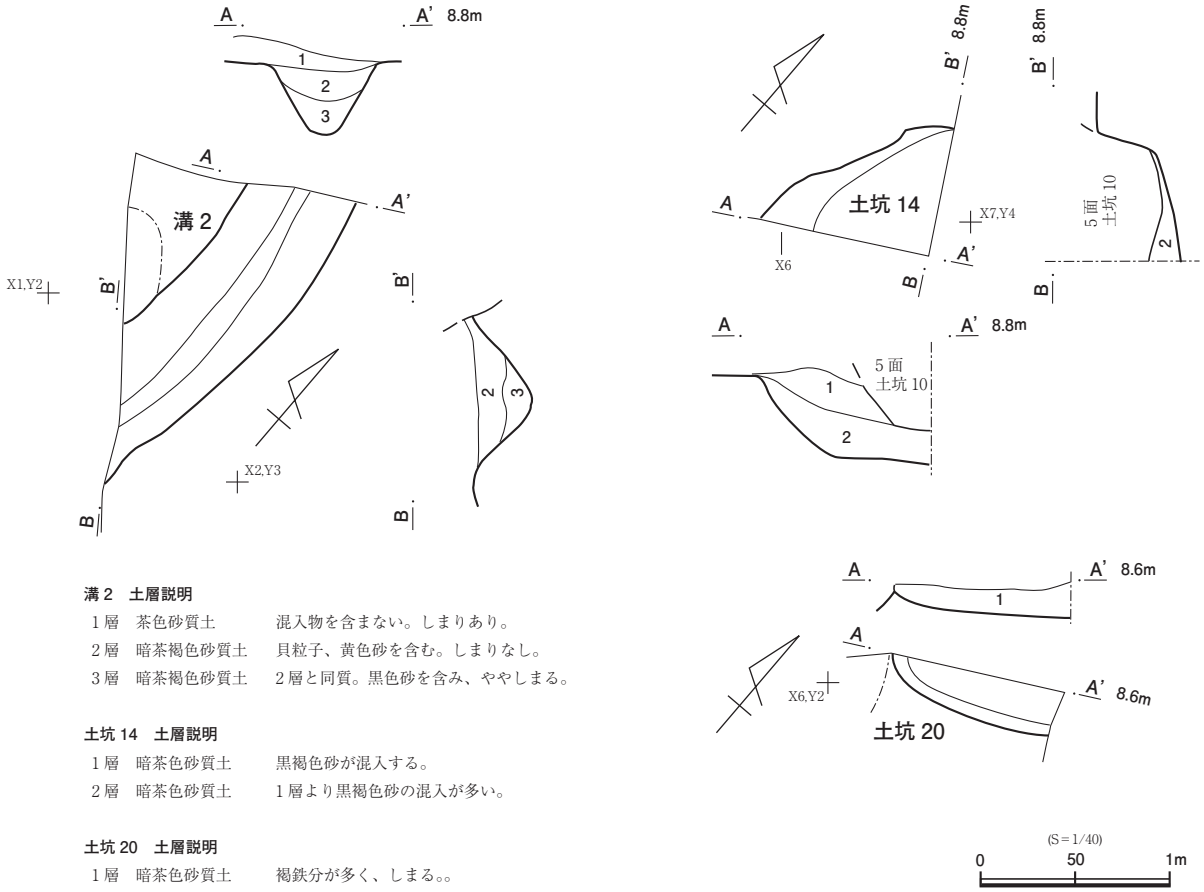
X6,Y4付近に位置する。5a面の遺構・土坑10に覆土を削平されている。検出された規模は93×68cmまで、深さは45cmで、底面高は8.12mである。

土坑20（図26）

X7,Y2付近に位置する。検出された規模は94×26cmまで、深さは16cmで、底面高は8.40mである。

ピット（図25）

個々のピットの概要は6面ピット表を参照されたい。



溝 2　土層説明

1 層	茶色砂質土	混入物を含まない。しまりあり。
2 層	暗茶褐色砂質土	貝粒子、黄色砂を含む。しまりなし。
3 層	暗茶褐色砂質土	2 層と同質。黒色砂を含み、ややしまる。

土坑 14　土層説明

1 層	暗茶色砂質土	黒褐色砂が混入する。
2 層	暗茶色砂質土	1 層より黒褐色砂の混入が多い。

土坑 20　土層説明

1 層	暗茶色砂質土	褐鉄分が多く、しまる。。

図26　6面検出遺構

表7　6面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	備考
P 19	25～×25～×35	8.16	P20・23 との新旧不明
P 20	23～×21×35	8.16	P19・23・154 との新旧不明
P 22	26×23×10	8.40	
P 23	32～×（28）×23	8.27	P24 との新旧不明
P 24	17×14～×22	8.28	P23 との新旧不明
P 67	33×29×17	8.37	
P 69	25×19×20	8.35	
P151	19×17×6	8.43	
P152	23～×22～×8	8.46	P153・154 との新旧不明
P153	13～×12×8	8.46	P152 との新旧不明
P154	35×25×8	8.46	P20・23・152 との新旧不明
P155	26～×9～×17	8.39	
P156	23～×7～×12	8.46	
P157	35×28～×12	8.47	
P158	28×28×8	8.43	
P159	29×27×5	8.48	

６面出土遺物（図27）

１・２は5b面下で6面検出までに出土した遺物である。１はロクロ成形のかわらけで、底径が大きく背低。体部は外反しながら直立気味に立ち上がる。２は鉄製品で上端から下端に向かい厚さを減じるもの。裏面・上端は平坦に仕上げられている。表面・側縁は遺存状態が悪く、本来の形状を明確にできない。用途は不明である。

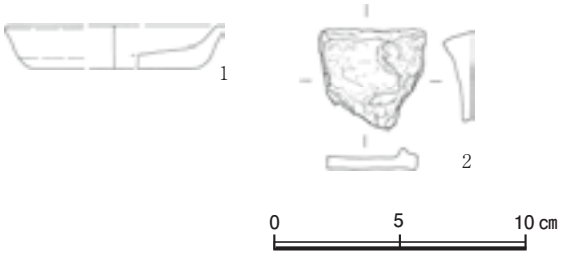


図27　６面出土遺物

第７節　古代以前の遺物（図 28）

中世期の土層、遺構覆土に混入していたものから実測可能なものを抽出した。1･2はロクロ土師器坏で、10世紀代の所産と思われる。3もロクロ土師器坏と思われるが、器表面の摩滅が著しく詳細は不明である。その他、古墳時代後期以降と思われるの土師器･須恵器が少量出土しているが、小片のため図示できない。

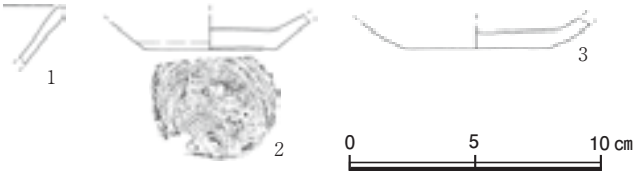


図28　古代以前の遺物

第四章　まとめ

第１節　古代以前

古代の遺構確認面である調査第6面で確認された遺構の大半が中世期の生活面で見逃された掘り込みと思われる中で、溝2は層位的に古代以前の所産である可能性が高い。平面プランは緩く円形の軌跡を描いて調査区外へ続くもので、規模の大きい遺構に付帯するもの、何らを囲う性格のものかもしれない。出土遺物がなく年代は不明であるが、調査区内では7世紀後半から10世紀代の遺物が採集されている。

第２節　中世

笹目遺跡はこれまでの発掘調査の成果により、「笹目ヶ谷」の谷内と谷外となる区域とでの、土地利用の違いが指摘されていた。「笹目ヶ谷」内の調査では、山際の岩盤、谷部に堆積した黒色土上に土丹を利用した地形が繰り返され、屋地・寺院域と考えられる遺構の発見が報告されている。遺跡南部の県道鎌倉・葉山線沿い辺りは砂丘上に営まれる生活圏で、方形竪穴の検出など県道南の長谷小路周辺遺跡と連続する様子が伺え、浜地と同様の「場」を想定されている。今回の調査地点は笹目ヶ谷の開口部の南方40m辺りに位置し、砂質土層上に開発された遺跡である。中世以前の地形を復元するの手がかりとして、古代の土層・遺構に注目すれば、地点7で検出されている古代の埋葬遺構が海抜9.9mであるのに対し、本調査地点では古代の遺構確認面とされる黒褐色弱粘質土の検出レベルが海抜8.5 ～ 8.6mとかなり低いことがわかる。現況の地図を読み取ると、県道鎌倉・葉山線から北西方向に延びて本調査地点の東脇を通り、笹目ヶ谷奥まで達する道路付近の標高は、県道上で10.8m、本調査地脇で10.6mを測る。その先は谷開口部で11.2m、谷奥へ向かい13.4m、17.2m...と標高を増しており、本調査地周辺が最も標高の低い地域となっている。この辺りは砂丘背後の低地となり、砂質土を基盤とする北限に近いものと思われる。

今回調査の大要は、土丹地形を繰り返し、生活面を嵩上げしていく土地利用の様子をよく示すものであった。土丹の利用は5a面の造成時に始まり、3面まで土丹地形の検出範囲は山寄りとなる調査区北側に偏っている。その後、部分的な造成（2面）を経て、調査区のほぼ全面に土丹地形が施行される1面へ至る地形範囲の拡張は、海浜部へ造成開発が進出していく様子を表すものかもしれない。中世の造成以前の細かな地形は、5a面の造成や5b面から掘り込まれた遺構による削平ため、明らかではないが、検出された生活面が北下がりの傾向を示すことなどから、砂丘背後の緩傾斜が今少し続く辺りではなかったかと仮定している。砂丘と山稜の間で最も標高の低い地点が、本調査地よりも北側であれば、調査区北側に偏る土丹地形を、低地に向かう部分をより強く固める目的でなされたものと説明できよう。5a面から3面にかけて土丹地形が途切れた南側は、シルト土による軟弱な整地層となり、同一生活面上で硬軟の地盤が利用される調査結果である。地盤の境界に変化を求めたいが、土丹地形の途切れる辺りに何らの施設を想定できる様子は見受けられない。検出された遺構群にも立地による明確な差異は見いだせず、南側の軟弱な地盤側に比較的規模の大きい土坑が存在することが、わずかな違いと言える。調査結果から、遺跡の立地を踏まえ、やや不自然と思える土丹地形のあり方について、種々の可能性を探ってみたが、明瞭な答えを導きだすことはできなかった。報告者の力不足により整理しきれなかった部分は反省したい。

出土した中世期の遺物から層位ごとに年代の指標となり得る遺物を拾っていく。表9には調査で出土した中世遺物の集計を示した。5面以前は年代を特定出来る移入品に乏しく、出土遺物のほとんどを占める在地系のかわらけには、手づくね成形のものが含まれていない。5a面（4面構成土・5a面上包含層）

表８　遺物集計表

		～1 面	1 面遺構	1～3a(2) 面	3a(2)～3b 面	3(2) 面遺構	3b～4 面	4 面遺構	4～5 面	5 面遺構	5～6 面	6 面遺構
かわらけ		ロクロ 43	ロクロ 10	ロクロ 51	ロクロ 69	ロクロ 128	ロクロ 74	ロクロ 48	ロクロ 52	ロクロ 160	ロクロ 37	ロクロ 26
白かわらけ		ロクロ 1		ロクロ 1						手づくね 1		
常　滑	甕・壺	53		25	12	16	12	4	12	9	7	
	片口鉢Ⅰ類	2			4	2	2		2	2	1	
	片口鉢Ⅱ類	9			4				1			
瀬　戸		5	1	5	1	2						
備　前		3		1								
亀　山						1						
土製品	瓦	1		1		1		1	1			
	土器質火鉢	2			2		1	1	1			
	瓦質火鉢	1				2						
	瓦器	1										
	土錘					1						
貿易陶磁	青磁	5		1		3	5	2	3			
	青白磁	1			2	1		1	2			
	白磁	3		1		3	2		3			
石製品	砥石			1					1			
	滑石	加工品 2								鍋加工品 1		
	石材？	チャート 1 軽石 1										
金属製品	銅銭	2						1				
	釘	9 +32.9g	1	12 +25.8g	4 +9.6g	14 +17g	6	7	1	6	4	
	不明鉄製品										1	
自然遺物	獣骨	2		3		1	1	4	3	2		2

と4面（3b面構成土・4面上包含層）からは13世紀後半の常滑窯の製品（図20－2・3、図17－10・11）が出土している。また貿易陶磁器は4面構成土からの出土が初現となる。3面では、土坑2から14世紀前半の常滑窯の製品（図14－19）が出土している他、瀬戸窯の製品が組成に加わっている。土坑4出土の瀬戸窯・卸皿（図14－24）は胎土や底部の調整などに旧い要素が見られるが、詳細な年代はわからない。2面・3a面（1面構成土・2・3a面上包含層）・1面土坑9では14世紀前半代の瀬戸窯・常滑窯（図11－11～13・図8－2）の製品が出土している。1面検出までに出土した遺物には14世紀代の移入品の他、15世紀まで下るかわらけ（図7－3～6）が含まれていた。以上に各面の地形の様子を加味して整理すると、本遺跡の開発年代は13世紀中頃以降と思われ、土丹による地形が始まる5a面から4面までを13世紀後半代と考えたい。4面は広範囲の土丹地形が始まる時期で、大型の土丹塊が使用されていることや、貿易陶磁器の出土などから、ある程度経済的な基盤を持った階層による施行と想定出来るかもしれない。貿易陶磁器には市内遺跡でさほど出土が多いとは言えない酒合壺・水注ほか袋物の類や、印花文の押された白磁皿など良品が含まれており、3面以降出現する瀬戸窯製品のほとんどが鉢・皿といった日常雑器で占められるのとは異なる器種構成である。3面から2面は小規模地形が連続する時期で、遺物の質の変化と連動しているようにも見受けられる。14世紀前半代までをあてられる。1面は前代から引き続き土丹地形面に土坑・ピットが掘り込まれる構成で、2・3面からさほど隔たる時期とも思われず、14世紀代と考えたい。より新しい遺物は1面上に堆積する包含層ないし、近現代に削平された生活面の時期を示すものと思われる。

表９　遺物観察表

図	Ｎｏ	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・（重さ）・備考
7	1	表採	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	体部片		素地：灰色精良 釉調：青緑色・半透明・白濁気味
7	2	表採	白磁　口兀皿	口1/5 底3/5	口（11.2）　底6.0　高3.2	素地：白色精良 釉調：乳白色半透明・光沢あり
7	3	1面	かわらけ	口1部欠損	口11.0　底7.0　高3.4	淡橙色・混入物多め粉質土
7	4	1面	かわらけ	口2/5 底全	口（10.4）　底6.2　高3.3	淡橙色・混入物多め粉質土
7	5	1面	かわらけ	略完形	口6.6　底4.4　高2.1	橙色・混入物含む粉質土 口唇部スス付着
7	6	1面	かわらけ	略完形	口6.6　底3.8　高2.0	淡橙色・混入物含む粉質土 口縁部２次加工・内外面スス付着
7	7	1面	白かわらけ	口縁部片		黄色味白色・弱粉質精良土
7	8	1面	龍泉窯系 青磁双魚文鉢	底部片		素地：灰白色・やや粗 釉調：青緑色失透・貫入あり
7	9	1面	龍泉窯系 青磁筒型香炉	口縁部片		素地：淡黄色 釉調：草緑色半透明・貫入あり
7	10	1面	白磁　口兀皿	底1/6	底（5.0）	素地：灰白色精良 釉調：灰白色半透明・貫入あり
7	11	1面	瀬戸窯 卸皿	口縁部片		素地：淡黄色・弱砂質土 釉調：灰褐色灰釉・ハケ塗り
7	12	1面	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：濃緑色灰釉
7	13	1面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片		素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：緑灰色灰釉
7	14	1面	瀬戸窯 折縁深皿	底1/5	底16.0	素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：淡灰褐色灰釉
7	15	1面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰色・長石粒多く硬質
7	16	1面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒含み堅緻 器表：茶色
7	17	1面	常滑窯 甕	胴部片		暗灰色・長石粒含み堅緻 器表：灰茶色
7	18	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		淡褐色・長石粒、小礫含む粗土・軟質
7	19	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		暗灰色・長石粒少なく緻密 器表：暗赤色
7	20	1面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片		橙褐色・長石粒多め粗土
7	21	1面	備前窯 擂鉢	口縁部片		赤色・白色粒子含む弱砂質良土 器表：暗茶色
7	22	1面	備前窯 擂鉢	体部片		灰色・粘質土　器表：暗赤色
7	23	1面	土器質火鉢	口縁部片		黒色・透明粒多い砂質土 器表：暗褐色

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
7	24	1面	瓦質火鉢	口縁部片		灰白色・小礫含む砂質土・気孔多い 器表：暗灰色
7	25	1面	丸瓦	残欠	長6.5～　幅5.5～　厚1.2	灰色・白色粒含む砂質精良土・硬質
7	26	1面	研磨痕のある 陶片		高6.7　幅5.4　厚1.2	常滑甕転用/灰白色・長石微粒多く緻密 器表：褐色
7	27	1面	研磨痕のある 陶片		高3.6　幅2.1～　厚1.4	常滑甕転用／橙褐色・弱粘質土・軟質
7	28	1面	滑石加工品		長4.3　幅2.9～　厚1.7	
7	29	1面	滑石加工品		長4.5　幅2.0　厚1.2	
7	30	1面	チャート		長3.2　幅2.7　厚1.6	
7	31	1面	鉄製品 釘		長5.4～　幅0.35　厚0.4	重さ7.8ｇ
7	32	1面	鉄製品 釘		長4.7～　幅0.25　厚0.25	重さ2.9ｇ
7	33	1面	鉄製品 釘		長5.8～　幅0.55　厚0.35	重さ4.5ｇ
7	34	1面	鉄製品 釘		長4.4～　幅0.45　厚0.2	重さ3.0ｇ
7	35	1面	銅製品 銭		外径2.41　孔径0.67　厚0.1	重さ1.7ｇ　／熙寧元寳？　楷書　初鋳 1068年
7	36	1面	銅製品 銭		外径2.35　孔径0.67　厚0.1	重さ2.9ｇ　／○○○寳
8	1	1面 土坑9	かわらけ	口～底1/5	口（6.8）　底（4.8）　高1.5	橙色・混入物多い砂質土
8	2	1面 土坑9	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地：黄色味白色・砂質土・緻密 釉調：淡緑灰色灰釉ハケ塗り
8	3	1面　P1	鉄製品 釘		長2.5～　幅0.45　厚0.3	重さ1.9ｇ
8	4	1面　P4	内折れかわらけ	略完形	口4.0　底3.4　高0.7	淡橙色・混入物少なめ弱砂質土
10	1	2面 落ち込み1	瓦質火鉢	口縁部片		灰白色・混入物多い砂質土・気孔多い
11	1	2面・3a面	かわらけ	口1/5 欠損	口11.8　底7.8　高2.9	橙色・混入物含む砂質土
11	2	2面・3a面	かわらけ	口～底1/4	口（12.1）　底（8.1）　高3.2	淡褐色・混入物多い弱砂質土
11	3	2面・3a面	かわらけ	口1/4 底1部	口（13.3）　底（7.8）　高3.5	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
11	4	2面・3a面	かわらけ	口～底1/4	口（6.2）　底（5.0）　高1.5	淡橙色・混入物含む弱粉質土
11	5	2面・3a面	かわらけ	口1/6 底1/4	口（7.8）　底（6.0）　高1.8	淡褐色・混入物少ない粉質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
11	6	2面・3a面	かわらけ	口1/4 欠損	口7.8　底5.3　高1.8	淡橙色・混入物含む弱粉質土 体部スス付着
11	7	2面・3a面	かわらけ	口1/5 底1/2	口(7.0)　底4.2　高1.8	橙色・混入物含む弱砂質土
11	8	2面・3a面	かわらけ	口1/3 底全	口(7.3)　底4.2　高2.1	橙色・混入物少ない弱粉質良土
11	9	2面・3a面	白かわらけ	底1/2	底5.8	黄色味白色・弱粉質精良土 内底スタンプ押印
11	10	2面・3a面	白磁　袋物？	高台1/5	高台(3.3)	素地：灰白色緻密　釉調：灰白色透明
11	11	2面・3a面	瀬戸窯 卸皿	口1/4	口(12.3)	素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：緑灰色灰釉／外面釉着痕
11	12	2面・3a面	瀬戸窯 折縁深皿	口縁部片		素地：黄色味灰白色・弱砂質土 釉調：緑灰色灰釉
11	13	2面・3a面	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石微粒含む砂質良土・気孔ある　器表：暗赤色
11	14	2面・3a面	平瓦	残欠	長6.5～　幅6.～0　厚1.5	明灰色・白色粒含む砂質土・やや軟質
11	15	2面・3a面	石製品 砥石	上下端欠損	長5.3～　幅3.5～　厚3.0	伊予産中砥　流紋岩質凝灰岩
11	16	2面・3a面	鉄製品 釘		長4.8～　幅0.28　厚0.28	重さ2.1ｇ
11	17	2面・3a面	鉄製品 釘		長5.7～　幅0.25　厚0.3	重さ4.9ｇ
11	18	2面・3a面	鉄製品釘		長4.5～　幅0.4　厚0.25	重さ2.1ｇ
11	19	2面・3a面	鉄製品釘		長4.7～　幅0.25　厚0.28	重さ4.3ｇ
11	20	2面・3a面	鉄製品釘		長4.5～　幅0.45　厚0.35	重さ2.1ｇ
11	21	2面・3a面	鉄製品釘		長4.0～　幅0.3　厚0.28	重さ1.1ｇ
14	1	3a面 土坑8	かわらけ	口～底1/4	口(7.4)　底(5.8)　高1.5	淡褐色・混入物含む砂質土
14	2	3a面 土坑8	白磁　口兀皿	底1/3	底(5.4)	素地：白色・精良　釉調：乳白色透明
14	3	3a面 土坑8	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰色・長石粒多い粗土
14	4	3a面 土坑8	鉄製品釘		長3.2～　幅0.3　厚0.35	重さ1.8ｇ
14	5	3面 土坑2	かわらけ	口1/3 底3/4	口(12.2)　底8.0　高3.2	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	6	3面 土坑2	かわらけ	口1/7 底1/2	口(12.4)　底8.4　高3.1	淡褐色・混入物少ない弱粉質土
14	7	3面 土坑2	かわらけ	口1部 底1/4	口(13.9)　底(10.1)　高3.3	褐色・混入物少なめ弱砂質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
14	8	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口 (12.8)　底 (8.4)　高3.0	褐色・混入物少ない弱粉質土
14	9	3面 土坑2	かわらけ	口1/3 底1/4	口 (12.3)　底 (7.8)　高3.6	橙色・混入物少なめ弱砂質土
14	10	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/5	口 (12.8)　底 (8.4)　高3.6	褐色・混入物少なめ弱砂質土
14	11	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/6	口 (11.8)　底 (8.3)　高3.0	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	12	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/5	口 (7.8)　底 (5.9)　高1.7	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	13	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口 (7.9)　底 (5.6)　高1.7	橙色・混入物含む弱砂質土
14	14	3面 土坑2	かわらけ	口～底1/4	口 (7.6)　底 (6.5)　高1.5	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	15	3面 土坑2	かわらけ	口1/5 底1/4	口 (7.5)　底 (6.0)　高1.6	淡橙色・混入物含む弱粉質土
14	16	3面 土坑2	かわらけ	完形	口7.6　底5.8　高1.8	淡褐色・混入物含む弱粉質土
14	17	3面 土坑2	龍泉窯系 青磁鎬蓮弁文碗	口縁部片		素地：灰色緻密 釉調：緑青色半透明・光沢あり
14	18	3面 土坑2	龍泉窯系 青磁無文鉢	底部片		素地：灰白色緻密 釉調：緑青色透明・光沢あり・貫入あり
14	19	3面 土坑2	常滑窯 甕	口縁部片		淡橙色（胎芯：黒灰色） 長石細粒含む砂質土　器表：明茶色
14	20	3面 土坑2	土錘	完形	長3.35　幅1.25　厚1.2 孔0.3	淡橙色・混入物殆ど含まない弱砂質土
14	21	3面 土坑2	鉄製品 釘		長4.4～　幅0.25　厚0.25	重さ2.1ｇ
14	22	3面 土坑3	鉄製品 釘		長5.3　幅0.35　厚0.3	重さ2.5ｇ
14	23	3a面 土坑4	かわらけ	口～底1/4	口 (8.0)　底 (6.1)　高1.6	淡褐色・混入物少ない弱砂質土
14	24	3a面 土坑4	瀬戸窯 卸皿	底1/8	底 (12.0)	素地：灰色緻密　釉調：薄緑色灰釉
14	25	3a面 土坑5	かわらけ	口1/4欠損	口12.0　底8.1　高3.1	淡褐色・混入物多い弱砂質土
14	26	3a面 土坑5	かわらけ	完形	口12.2　底7.3　高3.1	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土 口縁部内外スス付着
14	27	3面 土坑5	かわらけ	口1/7 底6/7	口 (12.0)　底7.5　高3.1	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
14	28	3a面 土坑5	かわらけ	略完形	口13.2　底8.3　高3.3	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
14	29	3面 土坑5	かわらけ	完形	口13.2　底8.1　高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
14	30	3a面 土坑5	かわらけ	口1/4欠損	口13.5　底8.4　高3.3	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
14	31	3a面 土坑5	白磁　口兀皿	口1/4 底1部	口(8.0)　底(4.5)　高2.1	素地：白色緻密　釉調：灰白色透明・光沢あり／口唇部タール付着
14	32	3a面 土坑5	青白磁？ 器種不明	足部片		素地：白色やや粗 釉調：緑味灰白色透明・光沢あり
14	33	3a面 土坑5	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石粒含む弱粘質土・緻密 器表：暗茶色
14	34	3面　P6	鉄製品 釘		長5.6　幅0.4　厚0.35	重さ4.8 g
14	35	3b面　P28	常滑窯 甕	口縁部片		黒灰色・長石粒非常に多い砂質土・堅緻 器表：青味暗灰色
15	1	3b面	かわらけ	口1/8 底1/3	口(12.4)　底(7.6)　高3.3	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	2	3b面	かわらけ	口～底1/6	口(12.2)　底(8.1)　高3.4	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	3	3b面	かわらけ	口1部 底2/5	口(12.3)　底(8.1)　高3.3	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	4	3b面	かわらけ	口1/5 底1/3	口(11.8)　底(8.2)　高2.8	橙色・混入物多い砂質土
15	5	3b面	かわらけ	略完形	口(12.3)　底(7.8)　高3.4	橙色・混入物含む弱粉質土
15	6	3b面	かわらけ	口1部 底1/3	口(12.2)　底(7.8)　高3.3	淡橙色・混入物含む弱粉質土
15	7	3b面	かわらけ	口1部 底2/5	口(13.2)　底(8.2)　高2.8	淡褐色・混入物少ない弱粉質土良土
15	8	3b面	かわらけ	口～底1/5	口(7.0)　底(5.1)　高1.5	淡褐色・混入物多い砂質土
15	9	3b面	かわらけ	口1/3 底全	口(7.8)　底(5.7)　高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	10	3b面	かわらけ	口～底1/4	口(7.4)　底(4.5)　高1.4	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	11	3b面	かわらけ	口3/4 底全	口7.3　底4.7　高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
15	12	3b面	かわらけ	口～底1/3	口(7.4)　底(4.9)　高1.7	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
15	13	3b面	かわらけ	口～底1/3	口(7.4)　底(4.8)　高1.6	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土
15	14	3b面	かわらけ	口～底1/4	口(7.4)　底(5.0)　高1.6	淡橙色・混入物含む弱砂質土
15	15	3b面	かわらけ	口～底1/3	口(7.8)　底(5.2)　高1.8	橙色・混入物多い砂質土
15	16	3b面	かわらけ	口～底2/5	口(6.8)　底(4.2)　高2.0	橙色・混入物含む弱砂質土
15	17	3b面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒多い砂質土・硬質 器表：暗茶色
15	18	3b面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部片		橙色(胎芯:暗灰色)長石粒多い砂質粗土・気孔多い　器表：赤褐色

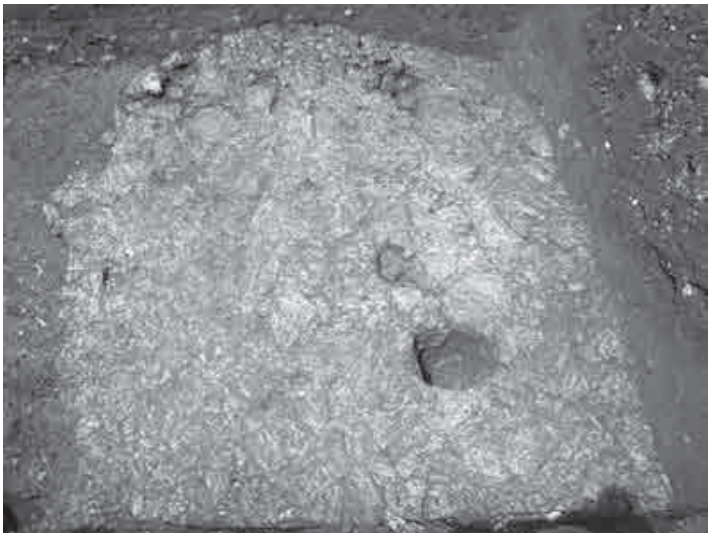
図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
15	19	3b面	土器質火鉢	口縁部片		淡橙色(胎芯：灰色) 混入物含む弱砂質土
15	20	3b面	研磨痕のある 陶片		長3.4　幅3.5　厚1.3	常滑甕転用／灰色・長石細粒少なめ 弱粘質土　器表：降灰緑茶色
15	21	3b面	鉄製品 釘		長6.1～　幅0.35　厚0.3	重さ4.3 g
17	1	4面	かわらけ	口～底1/4	口(12.8)　底(8.9)　高3.3	淡橙色・混入物多め弱砂質土
17	2	4面	かわらけ	口～底1/6	口(12.6)　底(7.9)　高3.3	淡橙色・混入物含む弱粉質土
17	3	4面	かわらけ	口1部 底1/6	口(13.7)　底(6.7)　高3.4	淡褐色・混入物少ない弱粉質土
17	4	4面	かわらけ	口～底1/3	口(7.3)　底(6.9)　高1.5	橙色・混入物多め砂質土
17	5	4面	かわらけ	口～底1/4	口(7.5)　底(5.5)　高1.5	橙色・混入物多め砂質土
17	6	4面	かわらけ	口～底2/5	口(7.2)　底(5.7)　高1.6	橙色・混入物多め砂質土
17	7	4面	かわらけ	口～底1/3	口(7.3)　底(4.8)　高1.6	橙色・混入物多め砂質土
17	8	4面	龍泉窯系 青磁折縁鉢	口縁部片		素地：白色緻密　釉調：緑青色半透明
17	9	4面	白磁 印花文皿	高台1/2	高台3.7	素地：白色緻密　釉調：青味白色透明・ 光沢あり
17	10	4面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰色・長石細粒少い砂質良土・やや軟質
17	11	4面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰白色・長石粒多い砂質粗土・硬質
17	12	4面	石製品 砥石	下端欠損	長9.2　幅3.1　厚0.6	鳴滝産(中山)仕上げ砥　　頁岩
17	13	4面	鉄製品 釘		長5.0～　幅0.5　厚0.35	重さ3.0 g
17	14	4面	鉄製品 釘		長4.1～　幅0.4　厚0.3	重さ2.5 g
17	15	4面	鉄製品 釘		長3.8～　幅0.5　厚0.45	重さ2.8 g
18	1	4面 P10	かわらけ	口～底2/5	口(11.5)　底(7.2)　高3.1	橙色・混入物含む弱砂質土
18	2	4面 P10	かわらけ	口1/ 4 底2/5	口(12.1)　底(7.0)　高3.4	橙色・混入物多め弱砂質土
18	3	4面 P35	かわらけ	口～底1/4	口(7.9)　底(5.5)　高1.5	淡褐色・混入物含む弱粉質土
18	4	4面 P35	かわらけ	口～底3/5	口8.2　底6.0　高1.7	橙色・混入物含む弱粉質土
18	5	4面 P35	かわらけ	口～底2/5	口(8.1)　底(6.2)　高1.6	淡橙色・混入物含む弱砂質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
18	6	4面 P35	青白磁　水注？	底部片		素地：白色精良　釉調：青白色失透
18	7	4面 P35	平瓦	残欠	長11.5～　幅5.5～　厚2.0	暗灰色・白色粒含む砂質土・硬質
18	8	4面 P35	鉄製品 釘		長5.3　幅0.5　厚0.45	重さ3.6ｇ
18	9	4面 P35	銅製品 銭		外径2.55　孔径0.62　厚0.1	重さ3.3ｇ　／元○○寶　篆書
18	10	4面 P38	鉄製品 釘		長5.8～　幅0.75　厚0.45	重さ10.8ｇ
18	11	4面 P39	鉄製品 釘		長4.2～　幅0.4　厚0.45	重さ2.7ｇ
18	12	4面 P40	かわらけ	口1/6 底1/4	口（12.8）　底（7.4）　高3.5	淡褐色・混入物少なめ弱砂質土
18	13	4面 P41	土器質火鉢	口～底片		淡橙色（胎芯：暗灰色）・混入物含む 弱砂質土
20	1	5a面	かわらけ	口1/4 底1部	口（7.9）　底（5.2）　高1.7	淡橙色・混入物含む弱粉質土
20	2	5a面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片		灰色・長石粒含む砂質土
20	3	5a面	常滑窯 甕	口縁部片		暗灰色・長石粒多い弱粘質土・硬質 器表：暗赤色
20	4	5a面	常滑窯 壺	底1/4	底（8.5）	淡茶色・長石粒含む砂質土・硬質 器表：降灰・薄緑色
21	1	5a面 土坑10	かわらけ	口1/4 底1/3	口（12.7）　底（8.1）　高3.2	橙色・混入物含む弱砂質土
21	2	5a面 土坑10	かわらけ	口1/4	口（7.9）　底（5.2）　高1.5	淡褐色・混入物含む弱粉質土
21	3	5ａ面 土坑10	かわらけ	口～底2/3	口8.2　底5.6　高1.6	淡褐色・混入物含む弱粉質土
21	4	5a面 土坑10	常滑窯甕	胴部片		灰色・長石細粒多め砂質土 器表：灰～茶色
21	5	5ａ面 土坑10	滑石鍋	口縁部片		加工痕あり・欠損後転用？
24	1	5b面	かわらけ	口1部底2/5	口（12.3）　底（9.0）　高2.9	橙色・混入物含む弱砂質土
24	2	5b面	かわらけ	口1/3底3/4	口（11.9）　底（7.4）　高2.8	橙色・混入物多め弱砂質土
24	3	5b面	かわらけ	口1/4底1/3	口（12.2）　底（8.0）　高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱砂質土
24	4	5b面	かわらけ	口～底1/5	口（12.6）　底（8.1）　高3.4	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
24	5	5b面	かわらけ	口～底1/3	口（7.7）　底（4.9）　高1.7	暗褐色・混入物少なめ弱粉質土
24	6	5b面	かわらけ	口1/3底3/4	口（7.5）　底（4.6）　高1.9	淡褐色・混入物少なめ弱粉質土

図	No	出土位置	遺物名	残存値	法　　量	色調・胎土・釉調・(重さ)・備考
24	7	5b面	白磁　口兀皿	口縁部片		素地：白色緻密　釉調：乳白色透明
24	8	5b面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片		橙色～灰色・長石粒含む砂質土
24	9	5b面	土器質火鉢	口縁部片		淡橙色・混入物多い弱粉質土
24	10	5b面	平瓦	残欠	長7.4～　幅5.8～　厚2.1	暗灰色・混入物含む粘質土・気孔あり 器表：灰褐色
24	11	5b面 土坑6	かわらけ	口3/4 底全	口7.4　底5.4　高1.7	淡褐色・混入物含む弱粉質土
24	12	5b面 土坑6	滑石加工品		長5.7　幅8.8　厚1.4	滑石鍋転用
24	13	5b面 土坑6	鉄製品 釘		長7.8～　幅0.4　厚0.38	重さ7.4ｇ
24	14	5b面 土坑13	かわらけ	口1/6 底1/4	口（12.4）　底（8.2）　高2.9	淡橙色・混入物含む弱砂質土
24	15	5b面 土坑13	かわらけ	口～底1/3	口（7.9）　底（5.0）　高1.7	淡橙色・混入物少なめ弱粉質土
24	16	5b面　P16	かわらけ	略完形	口8.4　底7.2　高2.0	橙色・混入物含む弱砂質土
24	17	5b面　P70	かわらけ	口1/6 底1/4	口（12.8）　底（8.0）　高3.1	橙色・混入物含む弱砂質土
27	1	6面	かわらけ	口～底1/4	口（8.4）　底（6.6）　高1.7	橙色・混入物含む砂質土
27	2	6面	鉄製品 不明		長3.85～　幅（4.0）　厚1.2	重さ45.5ｇ
28	1	5a面	土師器　坏	口縁部片		暗褐色・細砂、白針少量
28	2	1面	土師器　坏	底1/3	底（5.1）	暗赤色・白色微粒子含む
28	3	4面	土師器　坏	底2/5	底（5.6）	淡橙色・砂粒多め

◀ A.Ⅰ区１面（東から）

◀ B.Ⅱ区１面（北から）



◀ C.Ⅱ区１面（東から）

図版２

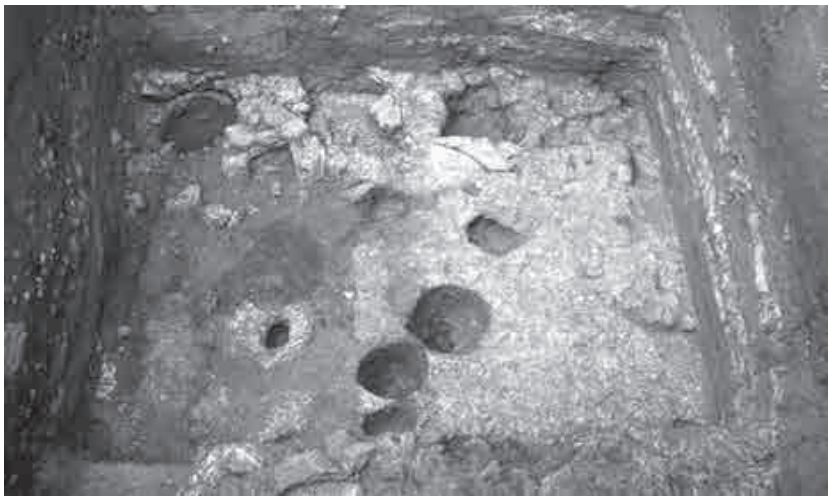
◀ A.Ⅰ区２面（東から）

▼ B.Ⅱ区２～３面（北から）

▲ A.Ⅰ区３面（東から）

▲ B.Ⅱ区３面（北から）

図版４



◀ A.Ⅰ区４面（東から）

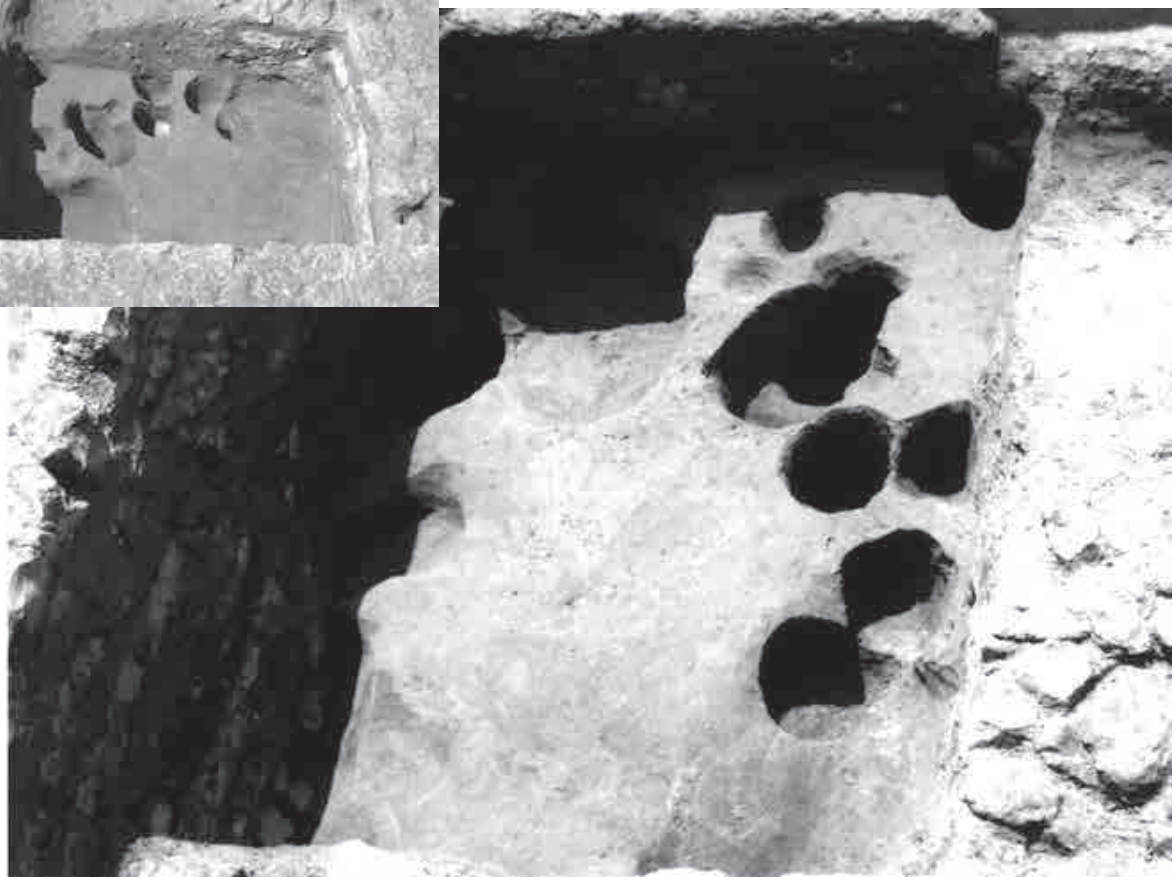
◀B.Ⅱ区４面（北から）

▼ C.Ⅱ区 5a 面（北から）

▲ A.Ⅰ区５面（南から）

▼ B.Ⅱ区５面（東から）

▼ C.Ⅱ区５面（北から）

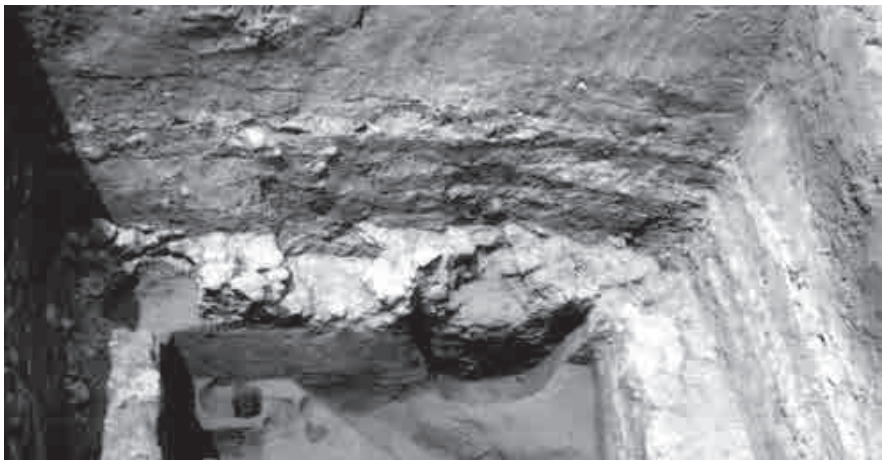


図版６

▲ A.Ⅰ区６面（東から）

◀ B.Ⅰ区６面（南から）

▼ C.Ⅱ区６面（北から）



◀ A. Ⅰ区西壁土層

▲ B. Ⅱ区北壁土層

▲ C. Ⅱ区西壁土層

図版８

7−3

7−5

7−6

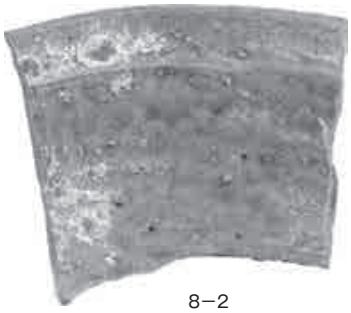
7−24

7−25

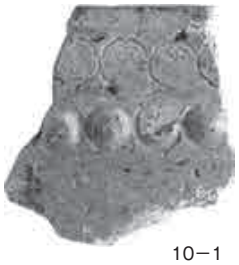
7−26

7−28

7−29


8−2

8−4


10−1

11−1

11−6

11−8

11−9

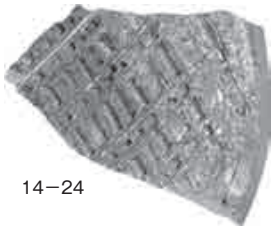
11−11

11−13

11−14

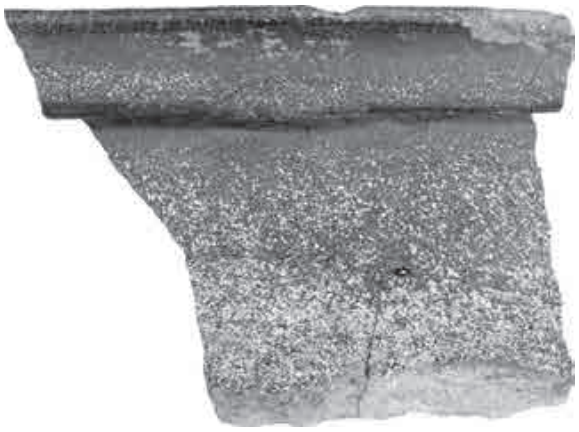
11−15

14−16


14−24

14−26

14−28


14−19

14−29

14−30

15−5

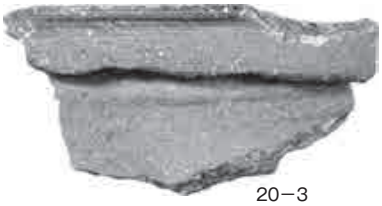
15−10

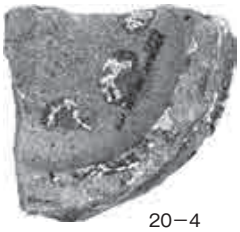
15−16

17−12
剥離面

18−7

18−13


20−3


20−4

21−5

図版10

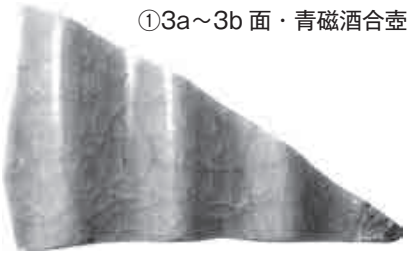
24−2

24−11

24−12

貿易陶磁

①3a～3b 面・青磁酒合壺



②3b～4 面
・青白磁梅瓶

③1～2・3a 面
・青白磁梅瓶

④5a～5b 面
・青白磁瓜型水注

⑤1 面上包含層
・青白磁蓋

7−1

7−2

24−7

17−9

14−32

18−6

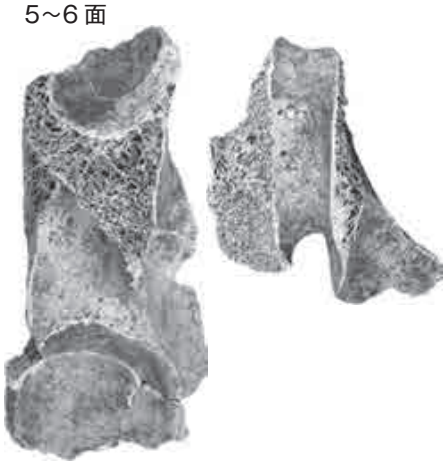
獣骨

1 面上包含層

3 面土坑 5

5 面土坑 6

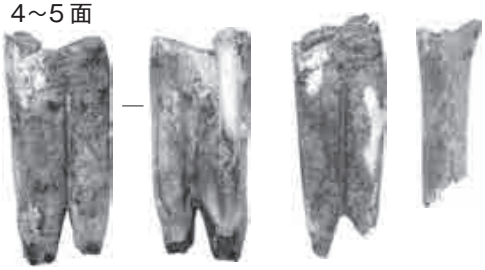
5～6 面



1～2 面

3～4 面

4～5 面



0　5